

中国浙江省におけるグリーン・ツーリズム農家楽に関する研究

— 日中欧におけるグリーン・ツーリズムの比較から —

方 琳

岩手大学連合農学研究科

生物環境科学

2015年11月

目次

第1章 序論	1
第1節 研究背景	
第2節 研究目的	
第3節 研究方法	
第4節 本研究の構成	
第2章 グリーン・ツーリズムに関する既往研究	12
第1節 グリーン・ツーリズムの概要	
第2節 グリーン・ツーリズムの歴史及び類似概念	
第3節 グリーン・ツーリズムの概念	
第4節 ヨーロッパにおけるグリーン・ツーリズム	
第5節 日本におけるグリーン・ツーリズム	
第3章 中国のグリーン・ツーリズム－農家楽	26
第1節 中国観光事業の展開	
第2節 中国におけるグリーン・ツーリズムの概念	
第3節 農家楽の分類及び発展経緯	
第4章 中国農家楽の経営者に対するヒアリング調査	
一 浙江省杭州市桐廬県を事例とする	35
第1節 調査目的及び調査方法	
第2節 調査地域の概観	
第3節 調査結果	
第4節 調査結果のまとめと考察	
第5章 中国における大学生の農村・農家楽に対するイメージ・意識のアンケート調査	51
第1節 アンケート調査の概要	
第2節 回答者全員の農村・農家楽に対するイメージ及び農家楽の利用実態	
第3節 観光専門と非観光専門の学生の農村・農家楽へのイメージ及び農家楽の利用実態の差異	
第4節 辺鄙農山村地農家楽を希望する人と希望しない人の農村・農家楽へのイメージ	

および農家楽の利用実態

第5節 アンケート調査のまとめと考察

第6章 総合的考察 70

第1節 結果の振り返り

第2節 課題と展望

引用文献

注記

要 旨

中国では近年「農業の低生産性、農村の荒廃、農民の貧困」の三農問題が特に注目されている。中国政府も2003年以降、政策課題として三農問題を取り上げ、その解決に向け種々の政策を打ち出している。一方、都市部では、住民の生活水準が向上し、物質的豊かさだけでなく、心の豊かさを求めるニーズも増加傾向にある。このように、中国のグリーン・ツーリズムは農山村側と都市側双方からの社会要請に基づいて誕生した。

しかし現在中国の農家楽は、個人経営型が多いため、管理の不完全、体験メニューの均一化、地域資源が非効率的利用などの問題も生じてきた。その点においては、日本や欧米などの先進国の農村観光業の体験に学ぶべき点が多いと考えられるが、中国の農家楽を展開する際には、中国の独自事情を加味して考える必要がある。そこで、本研究はこうした観点から、日本、欧州のグリーン・ツーリズムの歴史、発展経緯を参考に、中国の農林業・農村問題が抱えている諸問題に焦点をあてつつ、中国の状況改善の手段となりうる欧州、日本のグリーン・ツーリズムと中国農家楽を比較し分析・考察することとした。対象地としては中国の沿岸に位置し、経済発展が先行している先進地区の浙江省を選定した。調査方法はヒアリング調査および中国の大学生を対象に、農村・農家楽に対するイメージ・意識のアンケート調査を実施した。

ヒアリング調査の結果としては、観光地農家楽、辺鄙農山村地農家楽、都市近郊農家楽の全ての立地地区は新農村建設地区に位置づけられているが、農家楽に関する支援は観光地農家楽および辺鄙農山村の少数民族という特殊地区にしか行われていない。観光地農家楽は観光地ならではの団体客の継続利用による順調な経営がなされているが、辺鄙農山村地の少数民族の農家楽は支援を受けられても客数が伸びず経営の衰退が著しい。政府支援が受けられなかった都市近郊農家楽は需要地に近く、支援がなくても自発的に経営を发展させているが、周辺都市からの利用や観光客の継続的利用がない一般の辺鄙農山村地の農家楽は、政府の支援をも受けられなかったため、更に経営の困難さが伺える。ヒアリング調査の結果、現在の中国の国民の農家楽利用の動向から大都市といえども、欧州に見られるように「普通の農村」の景観や農山村そのものを楽しむ意識がまだ醸成されていないとの仮説を立てることができた。

次にヒアリング調査の仮説を実証するために中国の大学生に対する農村・農家楽に関するアンケート調査を実施した。アンケート結果からは現在中国の若者は農村・農家楽へのイメージはよかったが、実際の利用行動としては、観光地農家楽か都市近郊農家楽が人気で、辺鄙農山村地へ行って、本当の「農」を楽しもうという意識はまだ低いことが明らかとなった。また観光専門の学生と非観光専門の学生は農村・農家楽に対するイメージ及び農家楽の利用実態にはあまり差がないことから、現在中国の観光教育分野では、グリーン・ツーリズムに関する知識の伝達は十分ではないことが予想された。

以上の調査の結果を踏まえ、以下のような考察と課題を導出できた。

(1) 政府側：公的機関の長期的・計画的な支援

グリーン・ツーリズムを通じて三農問題を解決するために、潜在力がある農村に多大な援助を出すのではなく、条件不利の農村地域を重点対象として支援するべきと考えられる。この点は欧州の条件不利地域政策の中でのグリーン・ツーリズム支援に倣う必要がある。

(2) 経営者側：地域・人的資源の活用及び接客としての認識

グリーン・ツーリズム事業を推進するため、地域住民の積極的経営意思の存在や集落や地区の協力が重要であり、地域ならではの資源や人的資源を最大限に発揮することが不可欠である。また経営者としては、施設やサービスの水準を改善するとともに、「人と人との接点において顧客が感じる満足感」というホスピタリティ意識の醸成も農家楽の持続発展にも不可欠である。

(3) 利用者側：「農」に対する美意識の醸成

こうした意識を醸成するため、都市と農山村の関係を「対立」から「融合」へと誘導するため種々の対策が行う必要がある。具体的には日本における体験学習や交流事業の経験にならう必要がある。

(4) 教育機関側：教育的要素の取り組み

中国の教育機関はこれから、観光専門の科目設定を時代の発展とともに慎重に改革し、グリーン・ツーリズムなどの新たな観光形態に関する授業や知識を十分に伝達することが求められる。

現在の中国では、グリーン・ツーリズムに関する研究はいまだ未熟な段階に留まっている。グリーン・ツーリズム事業を展開する際にも、マーケティング調査や計画の作成は十分に実施されていないのが現状である。グリーン・ツーリズムの持続発展を促すため、グリーン・ツーリズム関係の専門家の育成や、研究の深化なども大きな課題となっている。

Research into Green-Tourism farmhouse tourism in ZheJiang province ,China

—Based on comparison of Green-Tourism between Japan, Europe and China

With development of the economy in China in recent years, the difference between areas has become a big problem. In particular, the low productivity of agriculture, abandonment in countryside districts and farmer's poverty issues are seen. From 2003, the Chinese government took up the [agriculture, countryside and farmer's issues] as policy matters and worked out various policies as a solution. As living standards improve in rural areas the need for basic necessities decrease and the desire for emotional fulfillment increases. Thus Chinese green tourism was born as a social request from both the rural districts and the cities.

However, a lot of farmhouse tourism in China is privately owned and thus have different styles of management which has led to faulty management, inefficient uses of area resources, lack of characteristics, community culture and notable activities have surfaced.

In order to clarify this point, we think it's necessary to introduce a forward way of rural sightseeing trade from advanced countries found in Europe and Japan. Still, by following green tourism from these advanced countries just as it is, can China accomplish similar results remains the question. This research will be based on those questions and consult historical documents, the development process of green tourism from Japan and Europe, focus on the agricultural, forestry industries and agrarian problems in China, analyzing and comparing green tourism in Japan and Europe with farmhouse tourism in China. This research was done in Zhe Jiang Province which is one of the most developed areas at the coast of China by interviews and also a questionnaire survey of investigating college students of their views and awareness of farm village and farmhouse tourism in China.

As the results of the interviews, we found out that farmhouse tourism in tourist spots, suburbs and remote rural areas are all placed categorized as new rural community construction, but actual support for farmhouse tourism is performed only in tourist spots or in a minority cases in a special area in remote rural areas. Tourist spot farmhouse tourism is managed smoothly by costumers from travel tours continued use, but remote rural areas despite getting support from the government still can't develop the number of guests and the decline of business is remarkable. Farmhouse tourism in suburb areas have been capable of developing voluntary management despite the lack of support due to their proximity to tourist sites where as management of rural districts suffers without both tourists continued travels or support.

According to the results of the hearing survey, we propose a hypothesis that Chinese people living in the cities don't view "normal agricultural community activities" as tourist attractions like in Europe.

When examining the questionnaire survey to prove the hypothesis of the interview, it became clear that while many Chinese young people had a generally good opinion of farm villages and farmhouse tourism and farmhouse tourism at tourist spots or suburb areas for which traffic was convenient was very popular, they did not think much of actually going out to the remote rural areas and enjoying farm life for themselves. Furthermore, we found that there are no big differences between students who specialize in tourism and those who do not and the portrayal of information in regards to green tourism was lacking as expected.

Based on the results of the investigation we can propose the following solutions and problems:

(1) Government side : long-term deliberate support of official facilities

In order to resolve the "agriculture, countryside and farmer issues" through green tourism, rather than putting out a great deal of overall assistance it's important to emphasize the support for particular locations.

It might be important to follow Europe's example of support towards green tourism in this case.

(2) Management side : utilization of area • human resources and recognition as service

To promote green tourism business, local resident's pro-active management, cooperation in a village or an area are important and it's indispensable to show the wealth and manpower of the area to the fullest.

It's important to cause a consciousness shift in regards to customer service in the form of "people to people interaction to maximize customer satisfaction" since it will improve the standards of the facilities and it is indispensable for World Business Council for Sustainable Development of Farmer Easiness.

(3) The user side : creating a sense of beauty to "farm life"

To create this sense, it's important to change the relations between cities and rural districts from "opposition" to "unity". To achieve this, many different measures need to be taken. More specifically, similarly to Japan there are hands-on-learning events and exchange projects that might be important.

(4) The educational institution side : Educational factor Efforts

The Chinese Educational Institution can carefully reform the sightseeing major and bring it up to speed with new developments in regards to green tourism.

The current research being done in China in regards to Green Tourism is still at a premature level. In the case of developing green tourism as an industry, marketing surveys and creating a development plan have still not yet been properly enforced. In order to advance the sustainable development of green tourism it's important for related specialists and researchers to promote and continue to deepen their studies of green tourism.

第1章 序論

第1節 研究の背景

中国では、近年の経済発展に伴い地域間格差が大きな問題となり、「農業の低生産性、農村の荒廃、農民の貧困」の三農問題（注1）は特に注目されている。中国政府も2003年以降、政策課題として三農問題を取り上げ、その解決に向けた種々の政策を打ち出している。一方都市部でも、心の安らぎの追求や豊かな自然を満喫しようとするニーズが、生活が豊かになった都市住民の中で高まりを見せている。このように、中国のグリーン・ツーリズムは農山村側と都市側双方からの社会要請により、現在隆盛を迎えつつある。

1 全国的な農村側の条件

(1) 中国の農業・農村政策の展開

中国の農村経済は、新政府である「中華人民共和国中央人民政府」（1949）の成立後、半世紀以上中国共産党と政府の強力な指導力のもとで、変化・発展を遂げてきた。特に第11次中国共産党中央会第3次総会（1978）以後、中国の農村は社会主義市場経済建設を目標とした改革開放政策（1978）（注2）の推進に沿って、農村経済体制と経営管理体制を変化させ、発展を遂げてきた。

本節では、中国の農業農村政策の展開を改革開放政策以前の中国の農村改革運動、改革開放政策直後の農村改革運動、三農問題の発現及び社会主義新農村建設（注3）の登場の4つの段階に区分し、整理を試みる。

ア 改革開放政策以前の中国の農村改革運動

呉（2008）は改革開放政策以前の中国の農村改革運動を三つに分けている。一つ目は封建的土地所有制から農民所有制への移行と、新政権の安定を目的とした「土地改革運動」（1950）（注4）である。この土地改革運動は土地の均等分配の実行を通じ、農村封建制度の剔抉と農民の労働力向上を目指すものであり、表面上では、農村変革運動でありながらも、農民動員戦略を通じた中央集権政策の強化と工業化の育成基盤を農業に求めることで、国家経済を回復しようとする意図があったとしている。

二つ目社会主義的改造という名分のもとで実行された「農業合作社運動」（1952）（注5）である。同運動は、農民個人の土地所有と生産手段に対する「農業互助共同運動」の実施を通じ、集団所有制という社会主義的集団経営を断行した。この運動は封建主義経済から社会主義集団経済への体制転換を通じ、社会主義の建設と共産主義への移行を先導する道具的な役割を果たした。

三つ目は、集団労働の実現と均等分配、そして生産手段及び生活手段の共有制を目標とした農業集団化組織の「農村人民公社運動」（1958）（注6）である。同運動は農工業の大増産を目標とした「大躍進運動」（1958）（注7）と並行し、地方的経済組織と行政組織の統一体を計画した点が特徴づけられる。すなわち「人民公社」は政社合一を意味することで、合作

社の組織合併によって形成された地区組織を一つの単位とした社会の中で、全ての人民が統治されるというものである。この運動は農村変革運動としての役割だけではなく、農民の行政的統制強化という社会主義権力の拡張の役割を果たした。しかし同運動は無理な増産政策と重工業に偏重した政策支援により、産業間の不均衡を深化させた。蔡昉ら（蔡昉ら、2008）によると、1959年の食糧総量は前年より15%減少、1960年に入ると更に10%を減少しつつある。その結果、飢餓で亡くなった農民は数多くあった。

改革開放政策以前、以上の三つの段階の農村改革運動を経て農産物供給は非常に不足し、国民経済は苦境に追い込まれた。1959～1961年は「3年間の困難時期」と言われている。

また10年間も続いた「文化大革命」は当時中国の農業発展に更なる衝撃を与えた。特に「左寄り」の誤りによる影響を受けて、「農業の生産を發展させ、人民の衣食問題を解決する」という目標は殆んど実現できなかった。「文化大革命」の間、農業経営体制の面では、人民公社制度が固守され、多くの農村地区では「貧困移行」を強行し、「労働点数優先」は「物質的な刺激」だと批判し、「資本主義の尻尾」を切ることで、長年農村市場が閉鎖され、社員の自家保有地が取り上げられ、家庭副業が制限されてきた。農業発展方針においては、「糧食がかなめである」ことが過大に強調され、多角経営が軽視されたために、農業生産構造はますます単一になった（姜、2005）。このように、工業と農業の間に発展が不均衡で、農産物供給が不足し、農村と農民は疲弊し、農業部分が萎縮するなど、全国各地で改革を求め声が上がり、農村経済政策の修正と新たな政策の強化が提起されるようになった。

イ 改革開放政策直後の中国の農村改革運動

改革政策以後、「人民公社」を中心とした計画経済的集団経営から、家族生産・家族経営を中心とした市場経済的「生産責任制」（1980）（注8）へ転換した。「生産責任制」の施行は農業経営の主体が政府から農民へ転換したことを意味し、農民は家族を中心とした市場経営主体者として、社会主義経済体制の中で、部分的に資本主義的経営活動を行うという性格を持っているといえる（呉、2008）。「生産責任制」の施行で、中国の農業は増産の黄金期に入った。中国政府は1982年から1986年まで中央政府は連続5年間農村改革及び農業発展に関する「一号文件」を提出した（表1-1）。『中国統計年鑑』のデータによると、1976年と1977年の文化大革命の影響で、農業生産額の増加率はマイナスになったが、1978年から1984年までは農業の増加率は7.4%に達し、特に1981年から1984年の間に、「生産責任制」の実施で、農業の増加率は10.9%に達した。また農業経営に対する責任体制の確立を図った「郷鎮企業」（1984）（注9）の育成運動は「農村・農業・農民」という「三農」改革の原動力となり、高度成長の足場を固めた役割を果たした意義を持つものとされる。

表 1-1

年	文件の名称	政策の目標
1982	全国農村工作會議概要	戸（家族）までの生産責任制を正式的に認められた
1983	現時点農村經濟政策の若干問題	農村の工商業をアクティブにさせる
1984	1984年の農村工作の通知に関して	農産品流通のシステム改革を推進させる
1985	農村經濟をより進歩させる十項の政策に関して	統一買い付けと統一販売制度を取り消し、産業構造を調整する
1986	1986年農村工作の手配に関して	農業への投入を増加、工業と農業、都市と農村の関係を調整する

（資料）杜潤生：『杜潤生自述：中国農村体制變革重大決策紀實』，人民出版社 2005 年版

ウ 三農問題の発現

生産責任制や郷鎮企業の実施で、農民は農業経営の主体となり、農業生産以外の経営活動をより自由に展開することができた。そして、農民と都市住民の収入格差はこの2つの運動の実施により、1980年から1985まで縮小された。こうした農民による創意工夫による経営展開が可能となったことは中国のグリーン・ツーリズムの発展の基盤となっているといえる。しかし、中国の農村改革運動は改革開放政策を境目に、農村地域の経済構造及び農工業問題、そして1998年から地域間の格差が広がり始めなど様々な問題をも拡大させた（表1-2）。

このような背景の下で、都市工業化政策と農民に厳しい農村経済政策の根本的な修正・補完が求められたことから、2002年11月の第16回中国共産党大会以降、2004年～2008年まで5年間連続で中央一号文件のテーマが三農（農業・農村・農民）問題に当てられている。農林水産省（2015）の中国の農業・農村政策の展開方向の中に、三農問題の解決を目指す背景としては、都市・農村の所得格差や教育格差の拡大、農村労働者に対する戸籍制度による差別、輸入農産品との競合によるリスクや農民所得の伸び悩みなどがあげられ、三農問題に対する取り組みとしては、2006年の農業税の撤廃（「少なくともとる」政策）と併せて、「多くを与える」政策として、農村への財政投入の拡大、生産者への直接補助金の拡大、食糧の最低買付価格制度の導入、及び出稼ぎ農民工の権益の保護などが行われてきたと指摘された。

表 1-2 農民と都市住民の収入格差及びエンゲル係数

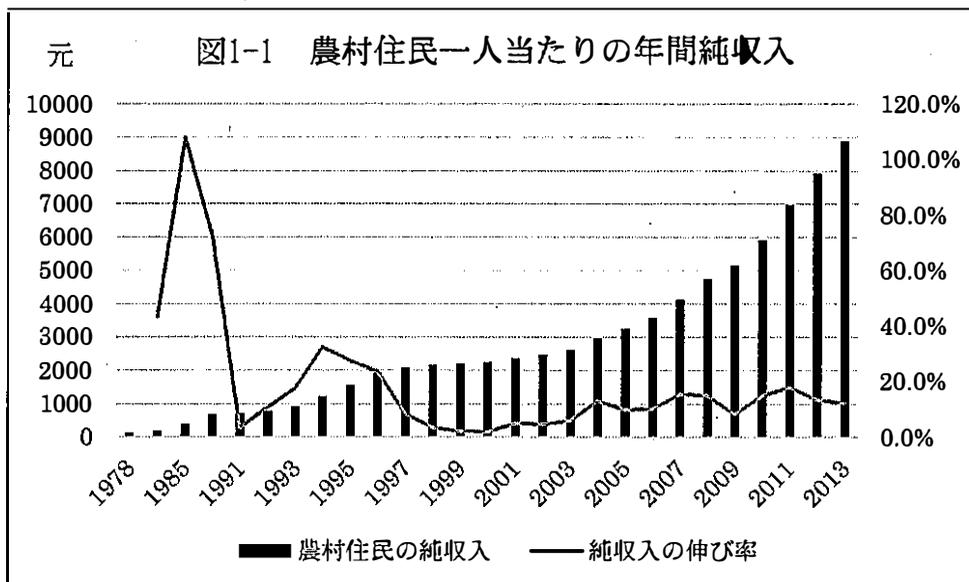
年度	農村住民の純収入 a (元/人)	都市住民の純収入 b (元/人)	農村と都市間収入格差 (b/a)	エンゲル係数 (%)	
				農村	都市
1978	133.6	343.3	2.57	67.7	57.5
1979	160.2	405.0	2.53	64.0	—
1980	191.3	477.6	2.50	61.8	56.9
1985	397.6	739.1	1.86	57.8	53.3
1990	686.3	1510.2	2.20	58.8	54.2
1995	1577.7	4283.0	2.71	58.6	50.1
2000	2253.4	6280.0	2.79	49.1	39.4

(資料) 中国人民共和国国家統計局「中国統計年鑑」を基に筆者作成

(注) 一元=18.87円 (2015年)

三農問題に関する取り組みの結果、中国の農業総合生産力の向上、農村経済構造の調整、農民収入の向上など大きな効果が見られた。2003年から2013年にかけて、中国の農民の純収入(注:年間純収入)は2622.2元から8895.9元へ増え、2009年のリーマン・ショックと国内農産品価格変動の影響を受けたため、農民の年平均純収入の伸び率は大幅に下落したが、一人当たりの純収入は増え続けている傾向が見られる(図1-1)。これは2003年以降の政策効果が著しいといえよう。

図1-1 農村住民一人あたりの年間純収入の推移



(資料) 中国人民共和国国家统计局「中国統計年鑑」を基に筆者作成

(注) 1990年以前の純収入の伸び率は5年前と比較した伸び率をとっている。1980年1978年と比較している。そして1990年代後半に、中国の食糧生産量が消費量をかなり上回るようになり、食料供給超過状態になった。そのために農産物の価格は低迷し、農民が食糧を増産しても所得の増加につながらない状況が見られた。そのために、1995年から2000年にかけての純収入の伸び率は大きく低下した(農林水産省, 2015)。

エ 社会主義新農村建設の登場

前項にみたように三農政策がもたらした効果は大きいですが、都市部と比較した場合、農村部の経済成長はまだ著しく緩やかで、都会と農村との発展の差を以下に縮めるのは三農問題の最も肝心な部分である。このような状況の中で、中国中央政府は2005年「社会主義新農村建設の若干の意見に関して」を提出して、新農村建設の新しい方針を打ち出した。この方針の主旨は「多与少取」(農民から少なく取り、多く与える)である。目標は「生産の発展、豊かな生活、郷土の文化、清潔な居住環境、民主的な管理運営」である。星野ら(2008)は新農村建設の特徴を以下のようにまとめている。

① 農民の主体性の確保と意欲啓発

地方政府だけではなく、農民を新農村建設の事業主体として明確に位置づけたことである。農民の主体性を引き出すために、先進地視察を奨励している。また農民への計画開示を進め、彼らの意見を幅広く求めると共に、村民代表会、村民大会を通じて自主的に決定させるプロセスを重視している。

② 農民が計画、実施過程に参画する体制

新農村建設におけるインフラ施設の建設では、政府が主導し、村が事業主体となり、農民が労働力を出し、政府が資材を提供するというスタイルをとる。

③生活環境の総合整備に重点をおいた整備

新農村建設は生活環境全般の改善に広げられた。具体的には、集落内道路、歩道の整備と舗装、排水汚水の処理と生態環境の保全、文化スポーツ、衛生サービスに関する公共施設などが建設される。村の環境改善として、「三清四包五改」というスローガンがある。ゴミ、汚泥、路上障害物を取り除く（三清）、庭先の清掃、秩序、緑化を農民自身が維持管理する（四包）、農家住宅の上水、トイレ、台所、畜舎、イメージの改善（五改）である。

④総合的なサービス・エリアの設置

村内に公園・広場、文化的活動センター、福祉サービスセンター、日常買回りの店舗、簡便な診療所と薬局、農業普及センターなどの総合的なサービス・エリアを設置する。

⑤土地利用の合理化と「保留地」の活用

「空心村問題」（過疎で農村住民が不在となり建物だけが残される問題）を解決するため、散在している農家住宅を一箇所に集めて集住化させ、余剰地を生み出す。また、そのための資金問題の解決のために、余剰地を農地あるいは公共用地に転換し、その土地の収益を投下資本の回収に当てる。いわゆる保留地処分のような仕組みを取り入れることも可能になった。

⑥都市と農村の連携強化

具体的には、都市と農村の一体的な発展を実現するように配慮すること、都市の経済力を農村へ還流させること、都市が農民に対して就業機会を提供し、所得を獲得できるようにすること、省、市など上級の地方政府が新農村建設の資金を提供することなど

⑦農村における新産業の育成

村の中に新たな産業を育成し、農民の収入増加を保障する。具体的には、農産物の直売、革新的な農業技術の導入、都市農村交流の活用、外部資本と連携した新作物の生産などを通じて、農民の所得拡大を目指している。

⑧農民の職能開発の充実

農村の余剰労働力を解消し、所得を向上させるために、農民に対して無料の教育機会を提供する。具体的には、造園緑化技術、料理技術、社交礼儀、管理サービスなどの専門的技能教育。都市へ出稼ぎをする時に必要な法律法規、職業技能など

以上にみられるように新農村建設の展開は、中国のグリーン・ツーリズムの発展に大きなサポートとなった。まず、新農村建設により農村地域への資金支援などの優遇措置は間接的にグリーン・ツーリズムの発展に政策と資金を提供している。また、都市と農村の連携の強化、農村における新産業の育成などは、グリーン・ツーリズムの顧客となる利用者の引き付けにつながるものであった。そして、農民の職能開発の充実などやインフラ施設の建設なども中国農村地域でのグリーン・ツーリズムの発展に大きな役割を果たすこととなった。

(2) 農業の衰退

社会主義国家である中国経済の発展は、政策からの影響を受けやすい。そして、経済発展の速度は産業別に大きな差が見られる。中国改革開放の初期段階では、農業部門の発展は決して遅くはなかったが、20世紀80年代中期に入ってから、農業の発展は緩やかになりつつある（表1-3）。

表1-3 1978-2006年経済の増加率及び産業への貢献

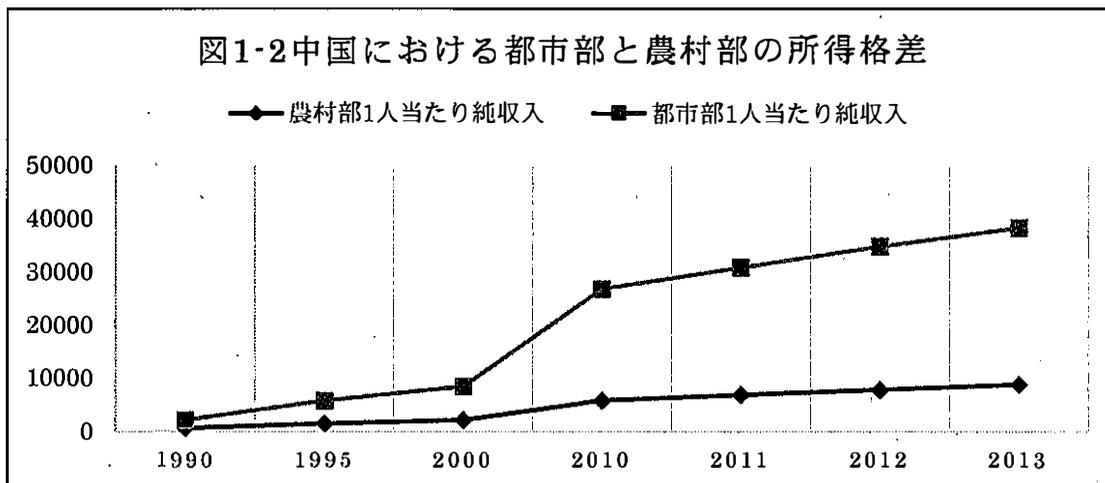
	1978- 1984年	1985- 1990年	1991- 1995年	1996- 2000年	2001- 2005年	1978-2006 年
GDP 増加 (%)	9.6	8.8	12.3	8.6	9.6	9.8
産業増加 (%)						
農業	6.9	3.8	4.2	3.5	3.9	4.6
第二次産業	9.9	10.7	17.4	9.8	10.8	11.6
第三次産業	12.2	10.9	10.9	9.5	10.2	10.8
産業貢献 (%)						
農業	43.2	23.9	9.1	5.8	8.0	18.6
第二次産業	35.1	34.1	54.0	43.1	48.6	43.0
第三次産業	21.7	42.1	36.9	51.1	43.4	38.3

(資料) 中国人民共和国国家統計局「中国統計年鑑」と『中国農村改革と変遷』(蔡昉ら, 2008)のデータを基に筆者作成

(3) 農民所得の低さと所得格差

三農政策や新農村建設が実施して以来、農民の収入は増加し続けてきたが、都市住民の高い収入との伸び率と比べてまだ小さい。図の都市と農村の格差の推移をみると、全体的には増加傾向にあり、都市と農村の所得格差が徐々に拡大してきたことが理解できる（図1-2）。

図 1-2 中国における都市部と農村部の所得格差



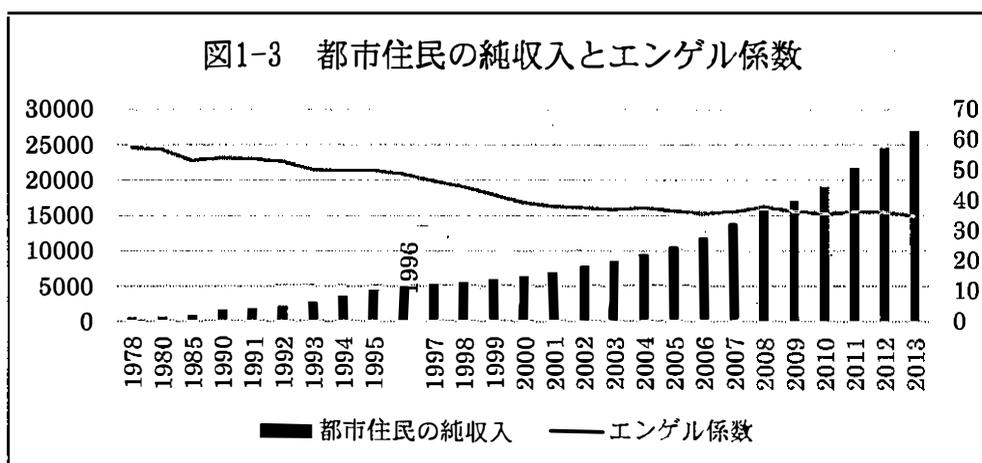
(中国人民共和国国家統計局「中国統計年鑑」のデータを基づいて筆者が作成した)

2 グリーン・ツーリズム発展に向けた全国的な都市側の条件

(1) 「物の豊かさから心の豊かさへ！」という転換

経済の発展とともに、都市住民の生活水準はますます向上し、物質的豊かさだけでなく、心の豊かさを求めるニーズも増加している。図は都市住民の純収入とエンゲル係数の推移を表している。都市住民の収入は1978年から2013年にかけて徐々に増加して、エンゲル係数は徐々に低下する傾向が見られた(図1-3)。

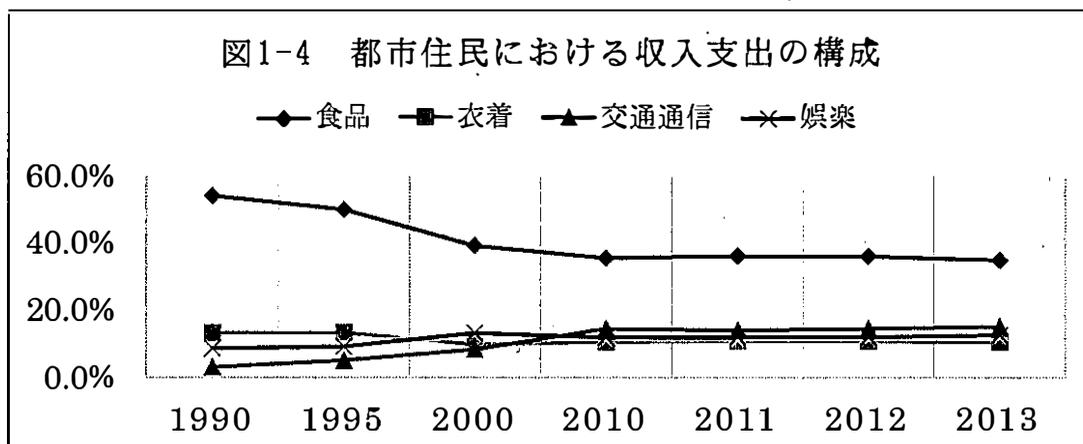
図 1-3 都市住民の純収入とエンゲル係数



(中国人民共和国国家統計局「中国統計年鑑」のデータを基づいて筆者が作成した)

また都市住民における収入支出の構成図からみれば、1990年代から都市住民は食品や服装の物質的ニーズは徐々に低下している一方、娯楽や交通通信などの精神的ニーズの増加傾向も見られた(図1-4)。

図 1-4 都市住民における収入支出の構成



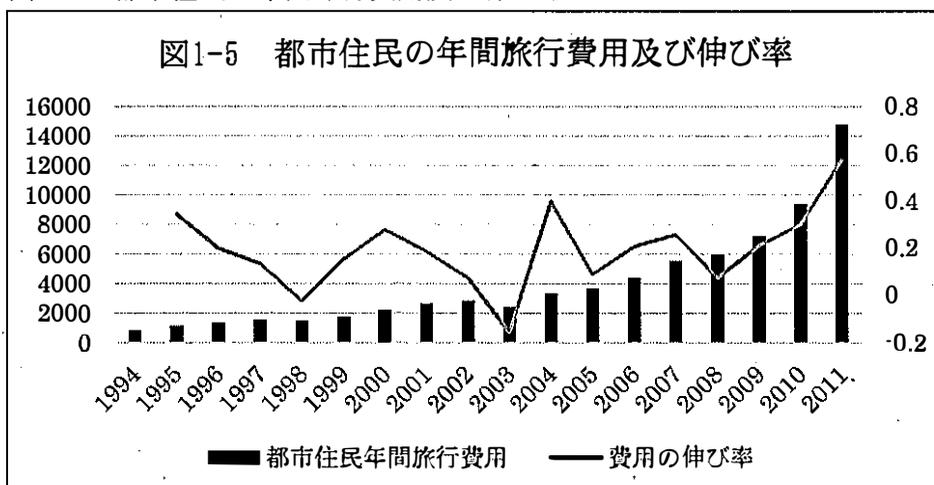
(中国人民共和国国家统计局「中国統計年鑑」のデータに基づいて筆者が作成した)

(2) 休暇制度の実施

中国では、1995年5月6日に「国务院が出勤時間の規定に関して」が公布され、正式に週休二日間制度が始まった。1999年に、国内の消費を刺激し、旅行事業を促進するため、国务院が「全国の年間休暇及び記念日休暇方法」を再更新して、「春節」、「中国語版のゴールデンウィーク」、「国慶節」の休暇を一週間まで延長した。2014年からまた新しい休暇制度が導入された現在、1995年よりさらに二週間以上の休日が増えている。

収入の上昇及び休日の増加により、中国の旅行事業は大きなブームを迎えている。図 1-5 は都市住民の年間旅行費用及び伸び率を示す。1994年から2011年にかけて都市住民の年間旅行費用は段々上回っていく傾向が見られた。価格の変化などの理由で、伸び率はやや不安定であるが、全体から見れば2009年から上昇の傾向が見られた。

図 1-5 都市住民の年間旅行費用及び伸び率



(中国人民共和国国家统计局「中国統計年鑑」のデータに基づいて筆者が作成した)

また、都市部と農村部の交通状況の改善及び自家用車の普及も、都市住民が休日に都市近郊に出かけやすくなった。大気汚染問題など、都市環境の悪化による健康志向を高めた都市住民が先進国で流行している「スローライフ」的ライフスタイルへの憧れも加わり、休日に農山村地域を訪れる旅行がブームとなりつつある。

このように農山村部と都市部、双方からの社会的要請に応える形で、中国政府は農山村地域のインフラ整備、伝統的な文化の維持などを奨励し、農山村地域の生活環境を改善し、都市住民が農山村を訪れることで地域とその経済の活性化を促し、三農問題及び都市の社会問題などに対応しようとしている。こうした背景のもとで運営される「農家楽」とは中国農山村観光における最も代表的な観光形態と位置付けられる。

第2節 研究の目的

本研究においては、日本、欧州のグリーン・ツーリズムの歴史、発展経緯を参考に、中国の農林業・農村が抱えている諸問題に焦点をあてつつ、先進事例と位置づけられる欧州、日本のグリーン・ツーリズムと中国農家楽を比較分析し、考察した。すなわち農村観光業による農村地域振興、農村地域の活性化への取り組みが先行している先進国的なグリーン・ツーリズムの運営のノウハウや経験を中国に還元することが可能となるように、中国におけるグリーン・ツーリズム「農家楽」の実態や問題点、そして今後の可能性を明らかにすることを目的とするものである。

また中国の沿岸に位置して、経済発展が先行している先進地区の浙江省を研究対象として、現地の調査を通じて、現在の中国における農家楽の特徴や、農村地域振興への役割、現状などを明らかにすることも併せて目的としている。さらに中国におけるグリーン・ツーリズムの特徴や問題点を実証的に明らかにする。

第3節 研究方法

本研究の方法としては、まずグリーン・ツーリズム及び農家楽関連の文献調査を元に、中国浙江省杭州市桐廬県の農家楽を分類し、分類ごとの経営者に対する詳細な聞き取り調査を実施した。あわせて地区行政関係者を対象としたヒアリング調査を行い、農家楽の類型分類ごとの課題や問題点の抽出に努めた。

さらに浙江省工商大学杭州商学院の観光専門及び観光外専門の学生を対象としたアンケート調査を実施し、今後の中国における新しい旅行形態としてのグリーン・ツーリズムの顧客となるであろう若い世代の意識を調査することで研究を実施した。

第4節 本研究の構成

本研究では、中国の農家楽を2つの切り口からアプローチする。一つは農家楽に関する理論研究である。もう一つは農家楽に関する現地調査である。これらの結果を第2章から第6章にかけて、先行研究のレビュー及び実証調査によって多面的かつ客観的に分析する。

第1章の「序論」では、研究の背景、研究の位置づけ、研究の目的の設定を行い、論文の構成について述べる。

第2章の「グリーン・ツーリズムに関する既往研究」では、先行研究をレビューし、研究の変遷を俯瞰することで、グリーン・ツーリズムの概念や歴史、発展経緯、そしてそれぞれの国・地域でのグリーン・ツーリズムの特徴などをまとめた。具体的には、まず全体的なグリーン・ツーリズムの概要、歴史及び類似概念をまとめた。グリーン・ツーリズムは新しい観光事業として注目され、中国での決して歴史は長くはない。これまでグリーン・ツーリズムと類似した観光産業も数多くあり、多くの研究者たちによって多様な定義が与えられてきた。しかし多様な定義はグリーン・ツーリズムに対する理解に混乱を生じやすいし、国々の事情によってグリーン・ツーリズムの内容も様々であるため、本章の他、さらに欧州、日本のグリーン・ツーリズムを別々に分析した。

第3章の「中国のグリーン・ツーリズム—農家楽」では、まず中国の観光事業の展開レビューを改革開放政策以前と改革開放政策以後に分けてまとめた。そして中国のグリーン・ツーリズムの概念を検討した。中国ではグリーン・ツーリズムに関する訳語が多いため、それらの訳語を比べながら、「農家楽」が最もふさわしい訳語だと思われる理由などをも明確にし、「農家楽」の発展経緯及び現状を明らかにした。

第4章の「中国農家楽の経営者に対するヒアリング調査—浙江省杭州市桐廬県を事例とする」では、中国の浙江省杭州市桐廬県の農家楽を観光地農家楽、農山村地農家楽、都市近郊型農家楽3種類に区分して、区分毎に地区行政関係者と農家楽の経営者に聞き取り調査を行った。調査の結果としては、観光地農家楽、辺鄙農山村地農家楽、都市近郊農家楽の全ての立地地区は新農村建設地区に位置づけられているが、農家楽に関する支援は観光地農家楽、辺鄙農山村の少数民族という特殊地区にしか行われていない。観光地農家楽は、観光地ならではの団体客の継続利用による順調な経営がなされているが、都市部から離れ、観光名所もない辺鄙農山村地の少数民族の農家楽は支援を受けられても客数が伸びず経営の衰退が著しい。政府支援を受けられなかった都市近郊農家楽は需要地に近く、支援がなくても自発的に経営を発展させているが、周辺都市からの利用や観光客の継続的利用がない一般の辺鄙農山村地の農家楽は、政府の支援をも受けられなかったため、更に経営の困難さが伺える。

一方最も利用料金は安価である辺鄙農山村地の農家楽は、農村ならではの豊かな自然に恵まれ、理想な郷村観光の場所であるが、現実の経営は非常に困難ということを明らかにした。ヒアリング調査の結果により、現在の中国の国民は、大都市といえども、欧州に見られるように「普通の農村」の景観や農山村そのものを楽しむ意識がまだ醸成されていないという仮説を立てることが可能となった。

第5章の「中国における大学生の農村・農家楽に対するイメージ・意識のアンケート調査」は第4章の仮説を実証することに重点を置きながら、現在中国の若者が農村・農家楽へのイメージ、農家楽の利用実態、希望条件及び今後の推進意向を分析した。調査の結果としては、若者は農村・農家楽へのイメージはよかったが、実際の利用行動としては、周辺観光

地がある観光地農家楽か交通便利な都市近郊農家楽が極めて人気で、辺鄙農山村地へ行って、本当の「農」を楽しもうという意識はまだ低いことが明らかとなった。また観光専門の学生と非観光専門の学生は農村・農家楽に対するイメージ及び農家楽の利用実態にはあまり差がないことから、現在中国の観光教育分野では、グリーン・ツーリズムに関する知識の伝達は十分ではないことが予想された。辺鄙農山村地農家楽を農山村への富の再分配への回路として機能させるため、更に辺鄙農山村地農家楽の潜在利用者を分析し、「自然との触れ合いが多い体験内容や長期的滞在及び安価の料金」を希望するような意識の醸成と辺鄙農村農家楽サイドからのマーケティングが不可欠と提案した。

第6章の「終章」は、本研究の全体の結論に当たる。第5章までの分析結果から得られる知見を踏まえ、中国のグリーン・ツーリズムについて総合的に考察する。最後に本研究の分析を通じて残された課題について整理し、論文全体の結論を述べる。本論文の構成図は以下のようなになる(図1-6)。

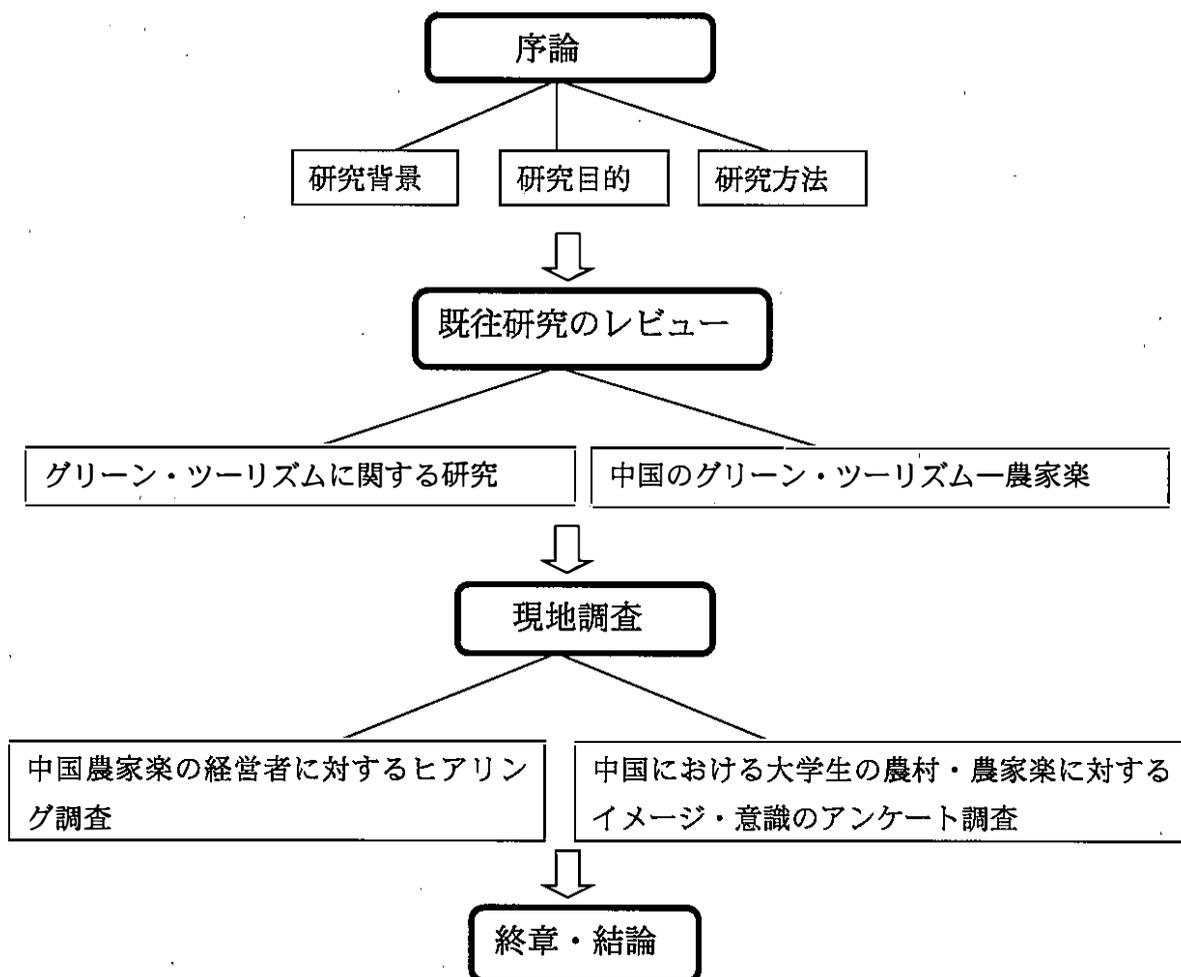


図1-6 論文の構成図

第2章 グリーン・ツーリズムに関する既往研究

第1節 グリーン・ツーリズムの概要

観光事業は主要産業として、グローバルな経済活動の中で起こった最も顕著な変化の1つである(Sinclair, 1998)。現在世界中で3番目(オイルと自動車の次)に大きい経済活動であり、且つ最も成長力が高い活動の1つ(Batta, 2009)と言われている。1947年日本運輸省観光課の『観光事業の話』では、観光事業を「観光現象の齎す、数々の効果を承認し、観光現象をめぐる一切の要素に、組織を与え、訓練を施し、体系を整えることによって、国家の繁栄と人類の福祉増進とに寄与せんとする目的な総合活動である」と定義している(岡本, 2001)。観光事業から生み出された収入や雇用効果などは特に発展途上国の経済発展に大きな役割を担っている(Furqanら, 2010)。しかし、観光事業から多くの効果をもたらす反面、訪問先の自然環境や文化、社会などにマイナスのインパクトを及ぼす場合も少なくない。そのため、自然や文化や歴史などの地域の資源の魅力を活かしながら、持続的に利用することを前提とした観光を行い、地域振興に貢献していくことをめざすグリーン・ツーリズムが注目されている。

グリーン・ツーリズムという旅は従来の名所めぐり、有名リゾートへの観光旅行と範疇的に異なり、緑豊かな自然、美しい景観の中での休養、自然観察、地域の伝統的・個性的文化との出会い、農村生活体験、農村の人々とのふれあいを求める。そして、美しい農村の景観と伝統文化を受け継いでいるヨーロッパでは、長期休暇制度を確立して以来、都市生活者のあいだで、農村への滞在旅行として定着されたが、日本や中国などのアジア地域で定着されるには、都市及び農村再度の諸条件からみて、まだ時間がかかるものと見られる(井上, 1996)。

第2節 グリーン・ツーリズムの歴史及び類似概念

近代観光発祥の地ヨーロッパでは、18世紀のグランド・ツアーに代表される貴族・ブルジョワなど裕福な階級の個人旅行という絶対的な少数者の時代から、19世紀イギリスのトマス・クックによる団体旅行システムの開発に端を発し第2次世界大戦後の海浜・山岳を飽和させたマス・ツーリズムの時代までを経験し、またそもそもの文化観光や保養観光から近年のエコ・ツーリズムの時代まで、「ポスト・ツーリズム」にいたるまで、ほとんどあらゆる種類の観光形態を生み出してきたが、その中で近年脚光を浴びてきたのが農村空間における観光である(多方ら, 2000)。

青木(2004)によると、1970年代以降、国際的な観光産業の急成長がみられ、先進諸国における国際観光志向の高まりを背景に、発展途上国の自然環境資源を商品とする「リゾートツアー」の増加によって、発展途上国における経済発展と環境保護という課題が浮上するのである。それまでの大規模開発、大量輸送、大量消費を目的とするマス・ツーリズムの延長としての「自然体験観光」の是非が問われることになったようである。このマス・ツーリズムの対峙概念として登場されたのはオルタナティブ・ツーリズムである。その具体例としては、

ルーラル・ツーリズム, ソフト・ツーリズム, エコ・ツーリズム, アグリ・ツーリズムとグリーン・ツーリズムが挙げられる。それぞれの定義は以下のように紹介している。

農村地域に行われる観光はルーラル・ツーリズムと呼ばれるが, Lane (1994) は農村地域での観光のすべてがルーラル・ツーリズムではないと指摘している。Lane はルーラル・ツーリズムと都市リゾート・ツーリズムを表 2-1 のように対比してまとめている。

表 2-1 都市・リゾート・ツーリズムとルーラル・ツーリズム

都市・リゾート・ツーリズム	ルーラル・ツーリズム
開放空間が少ない	開放空間が広い
1 万人以上の定住者	1 万人以下の定住者
人口密度が高い	人口密度が低い
ビルの環境	自然環境
多くの室内活動	多くの屋外活動
社会資本—集約的	社会資本—弱い
多くの催し—小売が基礎	個々の活動が基礎
多くの設立物 (施設)	少ない設立物 (施設)
国内・国際的会社	地方の会社
終日の観光を含む	多くの時間性の旅行を含む
農林業を含まない	いくらかの農林業を含む
旅行者の利益は自らがサポートする	旅行者は他の利益をサポートする
従業員は仕事場から離れて住む	従業員は仕事場の近くに住む
季節による影響は少ない	しばしば季節に影響される
多くの客	少ない客
客の関係は匿名	客との個人的関係
専門的経営	素人経営
国際的雰囲気	地方的雰囲気
多くのモダンな建物	多くの古い建物
進歩的/成長する道徳	保守的/発達が限定された道徳
一般にアピール	特殊な人にアピール
幅広い市場開拓	市場開拓無し

ここで示されたルーラル・ツーリズムの重要な特徴は, 人口 1 万人以下の農村において, 自然環境のもとで活動し, その行動の中にいくらかの農林業体験を含み, その村の農牧業を支えていること; 農家民宿など素人経営によるものであり, 客との個人的関係をもつこと; ローカルな雰囲気があり, 多くの古い建物がある農村地域であることをあげている (横山, 2002)。ヨーロッパにおけるルーラル・ツーリズムの原点は, 上流家族や貴族が郊外の農

村で乗馬や狩猟用の野生動物を確保するため、動物の生息地としての森が農地のなかに分散して保全された。このように、特権階級の人々は農村での乗馬や狩猟を心身のリフレッシュの手段にしていたが、一般の人々が農村で心身をリフレッシュするのは産業革命以降であった (Cavaco, 1995)。産業革命以降、多くの余剰労働力が労働者として農村から都市に流入し、近代工業が都市で発達するようになると、人々は余暇やレクリエーションを身のまわりの自然の中に求めるようになった。それはルソーの自然回帰思想の影響であった (菊地, 2008)。小槻ら (2013) によると、ルーラル・ツーリズムはロマン派に想を得て旅行者が特にアルプスや湖水地方に田園の静養地を求めた 18 世紀以来、ヨーロッパ全域でずっと人気がある。これは、ヨーロッパ諸国では法定年次休暇 (バカンス) 制度を背景にして、給与所得者は安い費用で長期休暇を過ごすことができる自然豊かな場所として農村に注目するようになった (Adler, 1989) からである。また、ヨーロッパ各国の農村人口は、現在人口全体の 10% 程度であるが、20 世紀初頭までは 40% 以上を占め、現在の都市住民やその祖先は農村出身者であることが多いため、ヨーロッパの人々にとっての農村は「ふるさと」、あるいは伝統的な生活文化と経済活動に基づく「牧歌的情景 (ルーラルティ)」への眼差しはルーラル・ツーリズムを促進させる原動力となった (菊地, 2008)。しかし、ルーラル・ツーリズムが真価を発揮したのは 20 世紀末である。その理由としては、海岸が豊富でない地域で都市や都会的環境からの脱出の需要が生まれた。それはヨーロッパ統合の進展や、地理的国境や辺境の再定義の結果、アイデンティティや民俗的な違いを確認する必要を人々が感じたからといわれている。

そして、1970 年代にマス・ツーリズムに伴う観光開発が環境に負荷を与え、地域の伝統的な景観を破壊していると指摘される一方で、環境に負荷を与えない「環境に優しい観光」としてのソフト・ツーリズムがスイスやドイツにおいて提唱されるようになった (Jungk, 1980; Krippendorf, 1982; Rochlitz, 1988)。横山 (2002) によると、ソフト・ツーリズムという用語を最初に使用したのは、スイスの空間プランナーの Baumgartner であると指摘している。彼は、「第三世界の観光一発展に寄与するために」という記事を 1977 年に *Neue Zürcher Zeitung* 紙上に寄稿し、その中でソフト・ツーリズムを目的国においてできる限り多くの雇用の場をつくり、最適のコストと利用関係をもち、健全な生態的均衡を維持し、本物の情報を提供するものであると定義している。NHK の高校講座では、ソフト・ツーリズムを自然、歴史や史跡などに触れたり、生活や伝統ある食文化を楽しむなど、その地域にもともとある資源を利用した観光の形態のことと定義している。Jungk (1980) はソフト・ツーリズムとハード・ツーリズム (マス・ツーリズム) を以下表 2-2 のように対比を行った。

表 2-2 ハード・ツーリズムとソフト・ツーリズム

ハード・ツーリズム	ソフト・ツーリズム
マス・ツーリズム	個人, 家族, 友人との観光
少ない時間	十分な時間
高速交通機関	相応 (またゆっくりした) 交通
固定したプログラム	自発的決断
外部統率	自己統制
移入された生活スタイル	地方の習慣的生活スタイル
見学	体験
快適で受動的	活動的で疲れる
心の準備なし	訪問地についての事前の準備
外国語なし	外国語の勉強
優越感	学ぶ楽しみ
買い物 (ショッピング)	贈り物をもっていく
お土産	思い出, 日記, 新しい知識
スナップ写真と絵はがき	写真, スケッチ, 絵
好奇心	他人に対する思いやり
騒々しい	静か

環境に対して意識的な消費行動をとる批判家的消費者 (critical consumer) の増大と環境に優しい観光であるソフト・ツーリズムの理解の広まりは, 1987 年 5 月にロンドンで開催された「農村地域における観光の新しい機会の考察」と題する会議では, 特に「グリーン・ツーリズムとは何か」という問題提起がなされた。そしてこのグリーン・ツーリズムの green は単なる緑色の森林や緑色の大地を意味するものではなく, 世界の環境保護団体である Greenpeace (1971 年創設) やドイツの Die Grune (緑の党), 或いは 1988 年に『The Green Consumer』(Elkin グリーン・ツーリズム on et al. 1988) として刊行されて有名となった green consumer (緑の消費者) などのように, 環境問題に対する批判と問題解決のための行動意識を含んでいることを理解しておくべきであるとされた [横山, 2006]。この点, グリーン・ツーリズムの概念に関しては次の節で詳しく説明する。

またエコツーリズムが形として現れるようになるのは, 1982 年にインドネシアのバリ島で開催された第 3 回世界国立公園保護地域会議において, 向こう 10 年間で世界の陸地面積の 5% を保護地域にする目標が採択されたことになる。しかし, 膨大な対外債務を抱える発展途上国においては資金難から保護地域の監視の目も行き届かないという問題を抱えていた。そこで, 自然保護地域の資金調達機構として考案されたのが, エコツーリズムと自然保護債務スワップであった。エコツーリズムは国立公園の入場料や地元ガイドの雇用などを通じて, 保護地域の自己資金調達機構として重要視されるようになったのである。さらに, 1992

年にはベネズエラのカラカスで第4回世界国立公園保護地域会議が開催され、エコツーリズムが開発途上国における生物多様性保全の方策として注目された（沼田，1998）。このようにエコツーリズムは1980年代に主に発展途上国の自然保護を目的とした観光スタイルとして広まっていくことになる。

エコツーリズムの概念に関しては、エコツーリズム推進協議会は、エコツーリズムを①自然・歴史・文化など地域固有の資源を生かした観光を成立させること、②観光によってそれらの資源が損なわれることがないよう、適切な管理に基づく保護・保全を図ること、③地域資源の健全な存続による地域経済への波及効果を実現することと定義している。しかし、その分、観光客の存在は全く忘れ去られてしまっている。どの程度のボリュームの、どのような旅行形態の、どのような意識の観光客が想定されているのかという視点がここではまったく欠けていると吉田（2003）が指摘している。小槻ら（2013）はエコツーリズムを手付かずの自然地域で行われ、環境の保全、地元コミュニティの生活向上、訪問者の教育に努める旅行のことであると定義している。1980エコツーリズム年代以来、エコツーリズムに対する産業界、消費者、学会の関心が高まり、2001年にDavid Fennellは学界及び産業界の資料から、80を超えるエコツーリズムの定義を見出した。しかし、エコツーリズムの定義やアプローチの急増に関わらず、この概念の下には5つの核となる原則があるという点に、論者は大旨合意している（小槻ら，2013）。

- ①自然：エコツーリズムは自然環境に依存する。自然環境の保全がエコツーリズム発展の鍵である。
- ②生態学的に持続可能である：実際には個々の活動によって形態が異なるが、あらゆる形態のエコツーリズムは、生態学的に持続可能で、自然なセッティングで行われるべきである。
- ③環境教育：環境教育と解説がエコツーリズムを他と区別する重要な特徴である。エコツーリズムは保全について学ぶことを期待している。
- ④地元利益がある：地元コミュニティと環境を利益をもたらし、かつツーリストの体験の質を向上するために、エコツーリズムのプロジェクトは、地元コミュニティが参加すべきである。
- ⑤ツーリスト体験への訪問者の満足度と訪問者の安全がエコツーリズム産業の将来持続性には不可欠である。

横山（2002）はエコツーリズムとソフト（グリーン）ツーリズムの目的及び目的地を比較した。人は旅行に一步踏み出すことによってツーリストとなるが、環境への責任を自覚することによってソフト・ツーリストかエコツーリストとなる。前者は保養や楽しみを求めて先進国の田園・農村地域或いは自然公園などで休暇・余暇を過ごすツーリストである。後者は体験や学習を目的に主に低開発国のまだ手の付けられていない自然に近い空間がある自然保護区や国立公園で休暇を過ごすツーリストである。

アグリ・ツーリズム（農村ツーリズム）は「農村地域でのツーリズム」という中性的な表

現となるが、必ずしも「グリーン」なツーリズムである必要がないが、実際には農村地域でのツーリズムはグリーンであるべきという議論が一般的で、この二つの表現は殆んど同じような意味で使われていると山崎ら（1996）が指摘している。Jansen-Verbeke・Nijimenge（1990）はアグリ・ツーリズムを農村の環境と産物に関連しながら生産活動と直接に結びつくツーリズムであると定義している。農産物直売所の訪問や農産物の直接購入、あるいは農業体験などが典型的なアトラクションとなっている。

第3節 グリーン・ツーリズムの概念

山崎ら（1996）によると、グリーン・ツーリズムは国によって、その表現が異なる。例えば、イギリスではグリーン・ツーリズム、ドイツではルーラル・ツーリズムといているが、フランスでは観光省などはグリーン・ツーリズム、農業関係機関はアグリ・ツーリズムなど、関係者によって、更に細かい表現を採用している。概念上は、農産物や農村景観、農村資源の活用に限定したツーリズムをアグリ・ツーリズム、ツーリズムの活動を展開する空間に着目したフランスの分類によれば、山岳地帯など雪の中での観光をホワイト・ツーリズム、海浜での観光をブルー・ツーリズム、そして田園での観光がアグリ・ツーリズムと分けている例もある。そしてこのような都市ではない海や山、そして農村地域を舞台として展開される観光全体をルーラル・ツーリズムと定義するのが一般的な傾向であるため、グリーン・ツーリズムは広い意味でのルーラル・ツーリズムの一部を構成するものと考えることが出来そうと指摘している。

グリーン・ツーリズムの定義は難しいものがあるため、山崎ら（1996）は更にグリーン・ツーリズムについて、次の三つの条件を提唱した。

- 1) あるがままの自然の中でのツーリズムであること。これには、古い伝統的な農村や山林などが中心を形成する。ドイツなどではビオトープというコンクリートなどで固められた護岸などを、できるだけ自然の姿に戻そうという運動が起こっているが、手をいれない自然の中での滞在や散策などが基本となる。
- 2) サービスの主体が、農家などに居住している人たちの手になるものである。つまり、外部の大資本などによって設置されたレジャー施設が中心となるのではなく、訪問者は地元に住む人たちの手で作られたサービスを楽しむ
- 3) 農村のもつさまざまな資源、生活、文化的なストックなどを都市住民と農村住民との交流を通して生かしながら、地域社会の活力の維持に貢献していること。具体的な活用形態としては農家経営による民宿、レストラン、キャンプ場、農産物販売所などがあり、いずれも低料金であることや新鮮な食べ物などが提供されている。

このグリーン・ツーリズムの中で中心を占めているのは、農家の兼業の一環として行われている宿泊施設「農家民宿」であると指摘している。

藤井（2011）はグリーン・ツーリズムの概念を農村や漁村での長期滞在型休暇であり、都市住民が農家などにホームステイして農作業の体験やその地域の歴史や自然に親しむ余

暇活動のことと定義している。ヨーロッパでは、1987年に農村地域における観光の新しい機会を考察する国際会議が開催され、常住地域から離れた農村地域（都市化された海浜とスキーリゾートを除く）での余暇活動を追及する人々の現象と定義した。

FurqanAら（2010）はグリーン・ツーリズムを持続可能なツーリズムの大切な一部分で、地域の植物や動物、そして伝統的な文化は目的地の主な魅力であると定義している。Dodds and Joppe（2001）はグリーン・ツーリズムの概念を四つの部分から説明した。

- 1) 環境の責任：自然及び物質的な環境を保護することによって生態系の長期かつ健康的な持続発展を維持する
- 2) ローカルな経済活力：地方の経済、コミュニティをサポートすることによって、経済の活力と持続可能性を確保する
- 3) 文化的な多様性：文化及び文化の多様性を尊敬、理解することによって、継続された地方の文化を保護する
- 4) 経験的な豊かさ：イベントや有意義な参与または現地の自然、人々、場所及び文化への関与によって、豊かで満足的な経験を提供する。

青木（2004）はグリーン・ツーリズムの概念を自然環境資源を活用する自然的要素、農村の文化的資源を活用する文化的要素、そして農林業といった産業資源を活用する産業的要素の3つが主要なものと指摘している。それらの要素を主たる対象とするツーリズムが、「エコツーリズム」、「ルーラル・ツーリズム」、「アグリ・ツーリズム」であり、それらの交差する中心部分に位置するのが狭義のグリーン・ツーリズムであり、それらを包括するのが広義のグリーン・ツーリズムと操作的に定義したいと述べている（図2-1）。

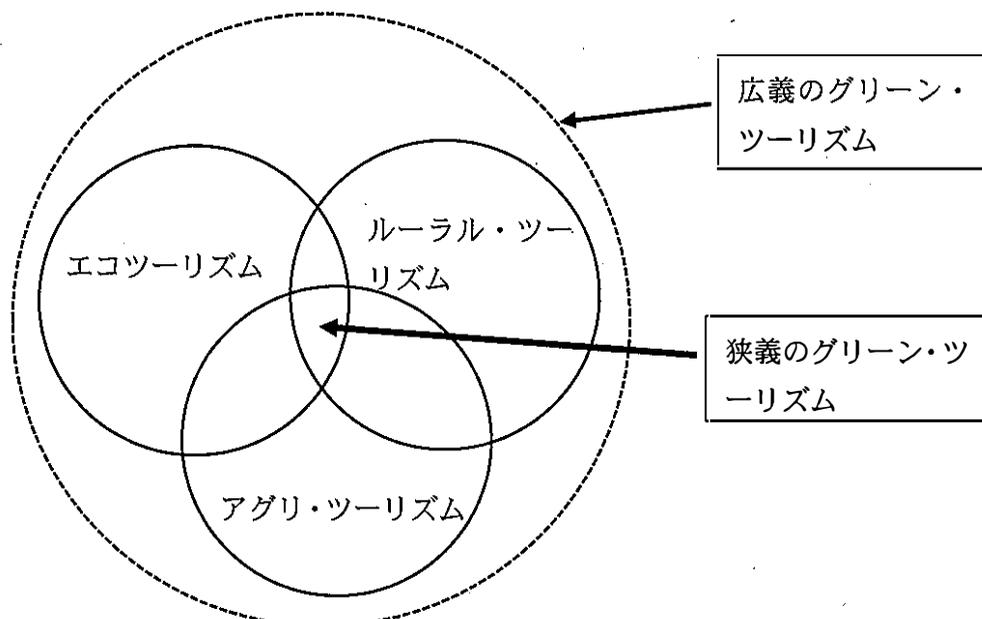


図 2-1 グリーン・ツーリズムの概念図

また、大島（2002）はフランスのツーリズムの事情によって、グリーン・ツーリズムの本質

を以下のようにまとめた。

- 1) 地元の人たちによる、地元の人たちのためのツーリズム。いわゆる、地元の人たちが自分の生活を守る、或いは地域が好ましい形で発展でき、そして事業による収益が地元に着ることが大前提である。農村には、都会とは違った景観や伝統が残っているが、それを郷土資産として守ることもグリーン・ツーリズムの目的となっている。
- 2) 地方色を強く感じることができるツーリズム。地方独特の文化や風土を味わえるのがグリーン・ツーリズムである。そのため、開発にあたっては、その地方のカラーが強く出される。家や教会の造りにも、それぞれの地方の特徴があるが、それを尊重することが第一である。お客の方でも、日常とは違った生活ができることを期待している。その土地を訪れた、その風土に溶け込んだ、という感覚を味わえるのがグリーン・ツーリズムである。その故に、グリーン・ツーリズムはストレス解消になり、癒しの旅になるのである。
- 3) 利益追求の商売活動の要素が少ないツーリズム。フランスでは、農村民宿も古い建物を廃屋にしないための手段となっている。また、農村の人たちは単調な生活に変化を与えてくれるツーリズムが来てくれるのがうれしい、という感覚がある。貸し別荘型の民宿などを利用したときには、この料金では採算が合わないだろうと、思うことがよくあるが、古い家屋を廃屋にせずに維持できて、人との出会いがあればそれで良い、と思う人が多いのである。そんな雰囲気があるので、ツーリストは民宿や農家レストランを利用する時は「お客様は神様」という態度はとらない。プロが経営するホテルやレストランと違って、お金を払っているのに、まるで友人に世話になっているような気遣いをするのである。つまり、農村の人は、「ツーリストが来て良かった」と思い、ツーリストは、「暖かいもてなしを受けた」と感謝する。これがグリーン・ツーリズムの最も大きな要素となっているのである。

以上の先行研究を踏まえて、グリーン・ツーリズムの概念は図 2-2 のようにまとめることができる。グリーン・ツーリズムというのは普通の農村のあるがままの自然資源・農山漁村の文化資源・農林業の産業資源という資源に基いて、農家など居住している人たちが都市住民にサービスを提供し、利益追求より交流を大事しているため、不特定多数の通過型観光客ではなく、リピーターの確保が主テーマとなっている。その目的は環境保護及び地域社会の活性化である。

またグリーン・ツーリズムと他のツーリズムの関係は図 2-3 のようにまとめた。本研究では、ルーラル・ツーリズムとグリーン・ツーリズムを同じ概念に扱うこととする。それは農民が経営の主体であり、文化資源、産業資源、自然環境資源の基に、利用者との交流関係をもちながら、地域コミュニティの生活向上を目指している。この中では、国立・自然公園などは含まれていない。右側のアグリ・ツーリズムは農村の環境と産物に関連しながら生産活動と直接に結びつくツーリズムであるため、主に産業資源と自然環境資源の事を指している。エコツーリズムはグリーン・ツーリズムと比べたら、主に体験や学習を目的に主に低開発国のまだ手の付けられていない自然に近い空間がある自然保護区や国立公園で休暇を

過ごすツーリストであり、利用者との交流関係や農民が経営の主体性などは特に触れていない。ソフト・ツーリズムは農村地域以外でも、自然公園などで休暇・余暇を過ごすツーリストであり、農民が経営の主体性が見えるが、交流者との交流関係は特に強調されていないようである（図 2-3）。

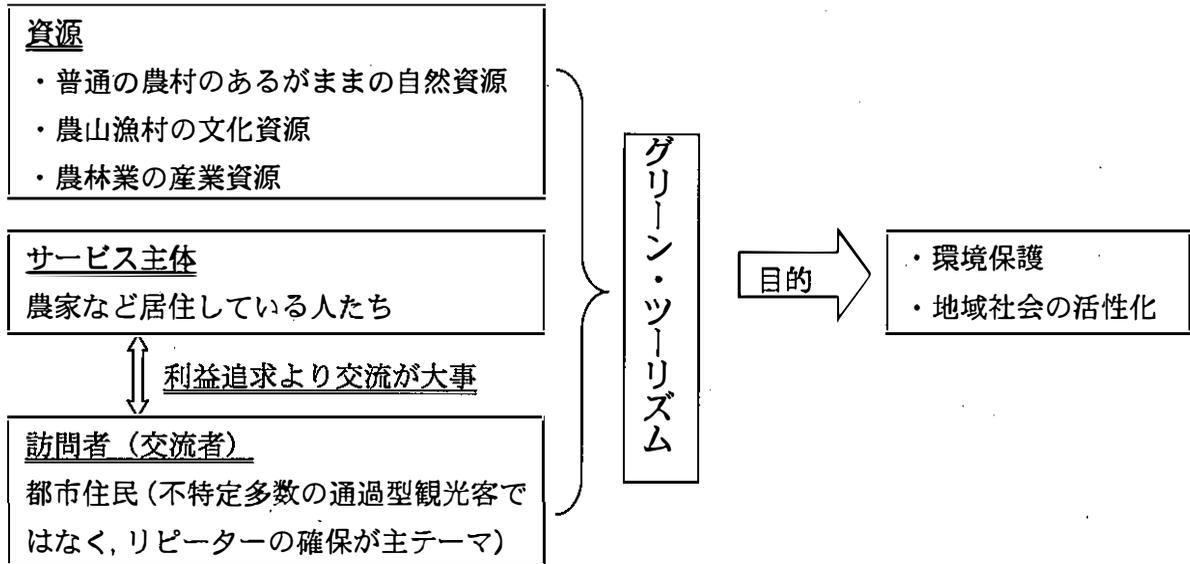


図 2-2 グリーン・ツーリズムの概念

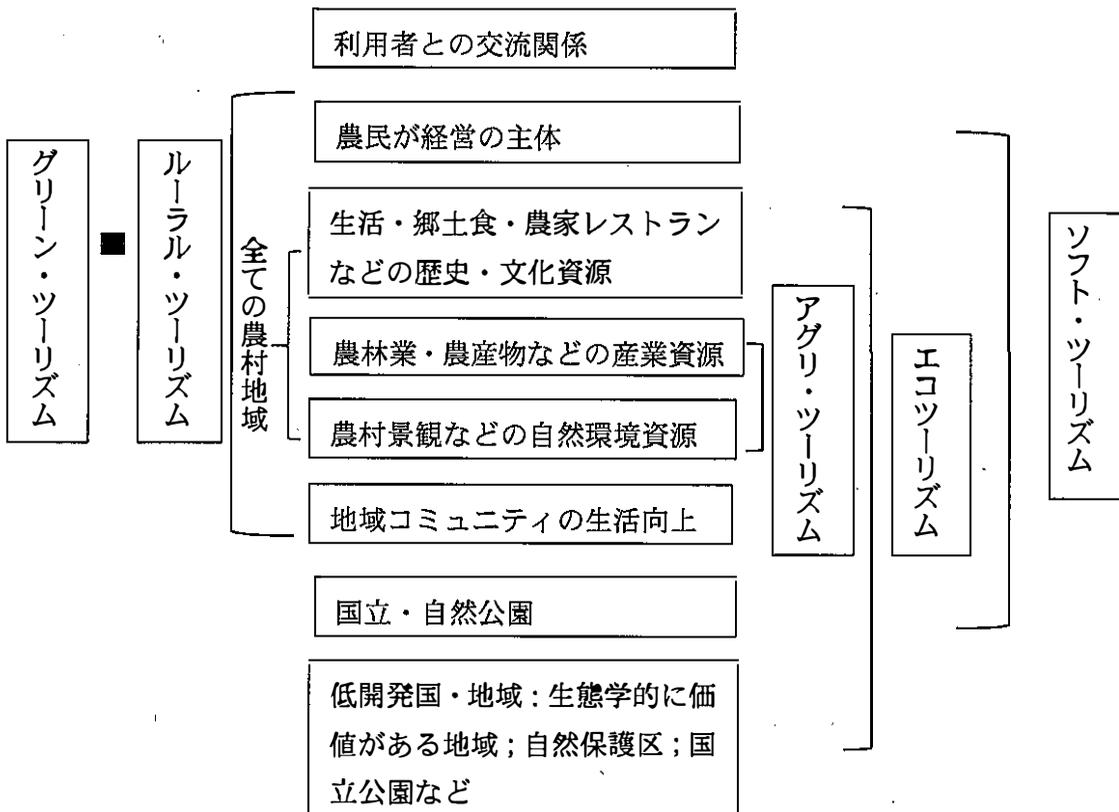


図 2-3 グリーン・ツーリズムと他のツーリズムの関係の概念図

第4節 ヨーロッパにおけるグリーン・ツーリズム

ヨーロッパのグリーン・ツーリズムは 1970 年台にドイツやフランス、イギリスなどの先進国で始まり、80 年代から 90 年代にかけてヨーロッパ全域に広がった。しかしグリーン・ツーリズムは国情や国民性を反映したもので、藤井（2011）は其々の国では様々な特徴を以下のようにまとめた。

イギリスでは、自然保護運動との連動が濃厚であり、農家も自然保護運動そのものをセールスポイントとした民宿などを経営する。宿泊客も自然保護の直接体験として農家などに滞在する。また、農業ホリデイ協会、政府機関である田園地域委員会があり、会員へのアドバイスや情報提供、マーケティングのための展示会、研修会、ガイドブックの作成・販売などを行っている。

山崎ら（1996）は、イギリスのグリーン・ツーリズムは「自然崇拜」の思想ではない、つまり「環境を破壊しない観光開発」ということでもなく、人間を遠ざけようとするのではなく、利用者と地域生活者をより近づけようとすることを指摘している。

世界最大のバカンス大国であるフランスは、農家民宿のスタイルも多様化している。さらに、農業の活性化対策という性格よりも、農村そのものの活性化を観光で行うという姿勢が強い。したがって、空き家を都市住民などが購入して別荘代わりとし、その結果地域活性化できればいいといったスタンスが広がりつつある。フランスでは、民宿の品質管理を行うフランス民宿連盟、農村ツーリズムの支援を行うフランス農業会議所という団体が主にサポートしている。フランスの民宿は、石造りの伝統的な民家が多い；独立性がある家屋；手間がかからない民宿；フレンドリーな経営者と利用者；きめ細かなサービス；車でないと行きにくいという 6 つの特徴を持っている（山崎ら、1996）。

ドイツの農村では、グリーン・ツーリズムという表現はあまり見られず、「農家で休暇を」と呼ばれている。「農家で休暇を」事業は、基本的には農家の維持並びに農村の存続を目指している。しかし、専業農家のみではなく、兼業農家での民宿経営も増えている。その一方、副業的な存在から専業的な民宿経営への移行も増えつつある。ドイツ農業協会は、優良民宿には DLG マークを与えるなど農家民宿に品質管理手法を導入し、信頼性と定評があるガイドブックを発行している。また、食料農林関連評価及び情報サービス協会は農業技術の普及と消費者への PR、農業民宿の経営に必要なノウハウを提供する研修、セミナーなどを行っている。山崎ら（1996）によると、ドイツのグリーン・ツーリズムは、農業条件が決して素晴らしいとはいえない地域で始まったようである。

ヨーロッパでは、グリーン・ツーリズムが広くされている理由としては、都市側、農村側と行政側の三つの側面から見られる。

まず都市側に関しては、井上（2002）は次の 11 項目を挙げられている。①国民の教育レベルの向上、②歴史、文化遺産に対する関心の高まり、③交通・通信ネットワークの展開、④健康への関心の高まり、⑤余暇時間の増加、⑥食べ物への関心の高まり、⑦本モノ志向の高まり、⑧安らぎと静けさを求める願望、⑨活動的な高齢者の増加、⑩休暇における余暇活動の

個性化、①REAL（注 10）な旅行市場の拡大。この中で「余暇時間の増加」はヨーロッパと日本のグリーン・ツーリズム普及率に大きな違いを生んでいる。イギリス、フランス、ドイツなどヨーロッパの国々での一般労働者は 1 週間、2 週間とまとまった休暇をとることができることが当たり前のこととなっている。一般の労働者には、このまとまった休暇に、リゾートや高級ホテルに泊まり 1~2 週間過ごすほどの経済的余裕はなく、都市にすむ多く人々は農村へ行って休暇を過ごすことが一般的なものとなっている。

そして、グリーン・ツーリズムを受け入れる農村側にも 1970 年代以降の変化があった。農村における自然や景観の保全・再生が実施され、景観的にも、生態的にも多様性のある美しい農村が再生されてきている。どこにでもあるような自然ととらえられがちな農村地域の小川、生垣や石垣、森林の biotope（生物の生活の場）の保護・再生が行われ、集落の伝統的な建物の保存・再生がなされた（横山、1997）。一方、農村女性の自立に貢献する新たな役割開発への支援の意味も大きい。ドイツでは、女性のための新しい職業開発の可能性のチャンスとして「ローエン生態系保留地域内の農村ツーリズム」が生まれた。それでも農村女性の社会的地位は決して高くないため、農協組織があっても農家女性は正会員になれない、つまり融資が受けられないなどの現実が存在する。いわば副業的収入を高めることで、男女平等社会を実現するという試みが行われている（藤井、2011）。

また行政側では、農家が民宿の開業などを行う時点で大半の国が農家へ直接補助を行っていた。例えば、様々な資金援助、税制上の優遇措置、住民税や職業税、付加価値税や所得税などの免除や減税などが行われた（山崎ら、1996）。

以上、都市側、農村側と行政側の条件を即し、農政ジャーナリストの会（1997）はヨーロッパにおけるグリーン・ツーリズムの特徴を以下の 7 点にまとめた。

- 1, 基本的には農家の副業としてのツーリズムであること。
- 2, 大半の国では、大半の国では、農家の副業としてのグリーン・ツーリズムを行政がバックアップしていること。
- 3, 副業を前提として、行政による直接補助と税の減免などが制度化されている。立地場所が条件不利地域にある場合には、さらなる優遇策が取られている。
- 4, 最近では、ワイン製造農家などの参入がドイツやフランスでは目立っている。背景には農業の不振がある。
- 5, グリーン・ツーリズムの主役は農家婦人であること。この点は農家婦人の地位向上運動との連動もある。
- 6, 宿泊施設の品質向上が進んでいること。ドイツでは B&B（ベット&ブレイクファースト）スタイルの民宿が自炊型民宿へ移りつつある。
- 7, 宿泊者向けのサービスは、実に淡泊である。年配者には保養、家族連れには食糧生産の仕組み、動植物とのふれあいなどによる情操教育は効果として期待されている。

グリーン・ツーリズムを展開することで、農村住民によるレストラン、直営販売、農家民宿、農業体験といった活動によって、地域の物流が良くなり、農村地域の経済活動の活性化も期

待できる（藤井, 2011）。また, グリーン・ツーリズムは農山村にある自然, 景観, 農林業, 暮らし, 歴史, 文化などの地域資源を村づくり, まちづくりとリンクさせることによって, 更なる社会活性化効果をもたらす（多方, 2006）。グリーン・ツーリズムを通じて, 都市開発の影響などで失われていく自然, 農村環境をより自然のまま残す, 維持しようと環境保全の効果も見られた。

第5節 日本におけるグリーン・ツーリズム

日本のグリーン・ツーリズムが本格的に普及されるのは1992年である。バブル経済が崩壊して, 農山漁村におけるリゾート開発が破綻し始め, 農林水産省は「新しい食料・農業・農村政策の方向」において, 始めてグリーン・ツーリズムの行政用語を用いた（宮崎, 2002）。日本におけるグリーン・ツーリズムの時代的な背景を見れば, 都市側と農村側の大きく二つの側面があった。

まず, 都市側では, 生活の質の向上を求める国民の余暇ニーズへの対応である。都市住民の今日的な旅行行動から「短期間に名所・旧跡を回る団体旅行的な従来形態」から「旅行先の人々や自然と接するなかで日常生活の疲れを癒し, ゆとりを感受し, 創造的な活動を試みるといった, 自己実現を企図する旅行」への傾向変化が多く旅行会社から見られる（藤井, 2011）。一方, 都市住民が抱える食に関する諸問題も示されている。例えば, 食の安全・安心への不安, 食の「外部化」進展に伴う食習慣の乱れ問題など, 食料供給のグローバル化に伴う資源と環境問題も深刻化されている（藤田, 2011）。

また農村側では, 高度経済成長以降, 重化学工業を中心に産業が発展し, その労働力として農村部から三大都市圏を中心に都市部への大規模な労働人口流出が続いた。このため, 農村部では労働力が減少し, 農業生産や農民の生活に影響を受けた。今日に至って, 農村地域における人口の減少がさらに進んでいることに加え, 少子高齢化との並進は, 農業生産の担い手の不足による生産活動の停滞や耕作放棄地の増加によって, 日本の過疎化, 農業・農村の低迷状況が, 益々深刻化してきている。更に近年, 日本においては, 農産物輸入の拡大により, 日本の農村・農業の低迷状況を導く一つの原因となっている（藤井, 2011）。

この様な都市と農村両側からのニーズに合わせるため, 農村サイドの地域づくりと都市サイドの農村への余暇利用ニーズとの架け橋としてのグリーン・ツーリズムは大きな役割を担っている。

日本型のグリーン・ツーリズムの定着としては, 宮崎（2002）は以下のようにまとめた。

- 1998年 「農山漁村でゆとりある休暇を」推進事業（グリーン・ツーリズムのモデル整備構想の策定と推進手法の調査研究）
- 1994年 農山漁村滞在型余暇活動のための基盤整備の促進に関する法律（農村休暇法）の制定
- 1995年 （財）農林業体験協会による農林漁業体験民宿の登録制度の開始
- 1998年 農政改革大綱と農政改革プログラムでは, 「グリーン・ツーリズムの国民運動とし

ての定着に向けたソフト・ハード両面からの条件整備」を明記

1999年 食料・農業・農村基本法では、「都市と農村との間の交流の促進」(36条)を明記

2000年 食料・農業・農村基本計画では、「農村における滞在型の余暇活動(グリーン・ツーリズム)の推進」を明記

このような行政によるグリーン・ツーリズム促進が進められる一方で、農家サイドに直接語りかける研修会や組織的・継続的な勉強会が全国的に生まれた。これらには、一部に行政支援があるものの、いわゆる補助金での事業がベースになったものではない(藤井, 2011)。

では、日本型のグリーン・ツーリズムはどのような特徴を持っているのだろうか。まずヨーロッパのグリーン・ツーリズムの農業・農村と比較してみたい。宮崎(2002)はその違いを以下のようにまとめている。

ヨーロッパは大規模畑作と放牧型畜産の農業形態であるのに対し、日本は北海道を除いて水田稲作の農業形態である。これは、国土に占める森林面積の割合が低いヨーロッパと極めて高い日本という自然環境の違いが関係している。ヨーロッパの農業条件不利地域では、放牧型畜産が主体であり、草地に家畜と集落が点在する景観が都市住民の原風景となっている。これに対して、日本の山間地域は水田稲作・集落・人工林の景観が主体である。こうした粗放な管理を可能とするヨーロッパ型の農村景観と集約な管理を必要とする日本の農村景観の相違は、顧客である都市住民に与える印象のみならず、農村へのグリーン・ツーリズム導入に際して受け入れ側である農村住民の労働時間等の受け入れ条件にも大きく影響するものといえるだろう。

農村の家屋構造も異なる。ヨーロッパの家屋は多くがレンガや石を素材にした耐用年数が長く、屋敷が広く、部屋も基本的に個室である。このつくりのおかげで、空き部屋をプライバシーが守れる個室方式の宿泊施設を提供できる。これに対し、日本の農家は開放的な木造家屋で、大部屋のつくりであるため、伝統的農家家屋はプライバシーが守れず、これを民宿とする場合、改造する必要がある。

次に、農業経営形態に関しては、ヨーロッパでは夫婦間の分業が明確であり、農業経営は基本的に男性労働力による機械作業で行われているが、女性の多くは家事や農作業以外の仕事を分担している。それに対して、日本が男女ともに農外就業が支配的であり、農家における男女の分業体制が未確立である。分業が明確であるヨーロッパでは農作業は男性、グリーン・ツーリズム関連の施設、レストラン、加工などの運営・作業は女性が担い手となり、農業とグリーン・ツーリズムの運営が一つの農場の中で展開できる。日本は、北海道を除き、農家単位のみでのグリーン・ツーリズム受入態勢づくりは困難である。

そしてこれらの条件を反映したことから生じる最も大きな違いとして、グリーン・ツーリズム施設の経営主体があげられる。ヨーロッパでは個人により経営される、個人経営が主体であるが、日本では自治体、団体などの出資による第3セクター営、農家グループ営など地域のメンバーによる地域経営が中心である。

このように日本とヨーロッパのグリーン・ツーリズムを取り巻く環境は大きく違ってお

り、日本型のグリーン・ツーリズムの特徴も見えてきた。

日本におけるグリーン・ツーリズムは、都市と農村が近い場所において成立することが多く、日帰り型が多い。それゆえ、近隣主要都市や地元周辺の利用客が多いなかでも、顔の見える同士の交流となるリピーター利用が多い。そして、日本には春から秋にかけての高温多雨、国土に占める低い可住地面積率、島国で火山国の気候的・地理的特徴あるから（このことと地域経営体であることとのつながりが不明）、グリーン・ツーリズム施設の過半数を運営するのは地域経営体である。また日本のグリーン・ツーリズムでは各々の農山漁村が地域の個性や多面的機能を重視している（宮崎，2002）。

日本のグリーン・ツーリズムはおおむね都市近郊に多く見られる「農林業公園型」、日本全国的に展開している農林水産物資源を活用した「食文化型」、中山間地域で多い「農村景観・ふるさと定住型」、農林水産業や農村環境をテーマにした「生涯学習型」の四つのタイプがある（日本交通公社，2004）。

21 ふるさと京都塾（1998）はグリーン・ツーリズムのタイプを以下の図 2-4 のようにまとめた。

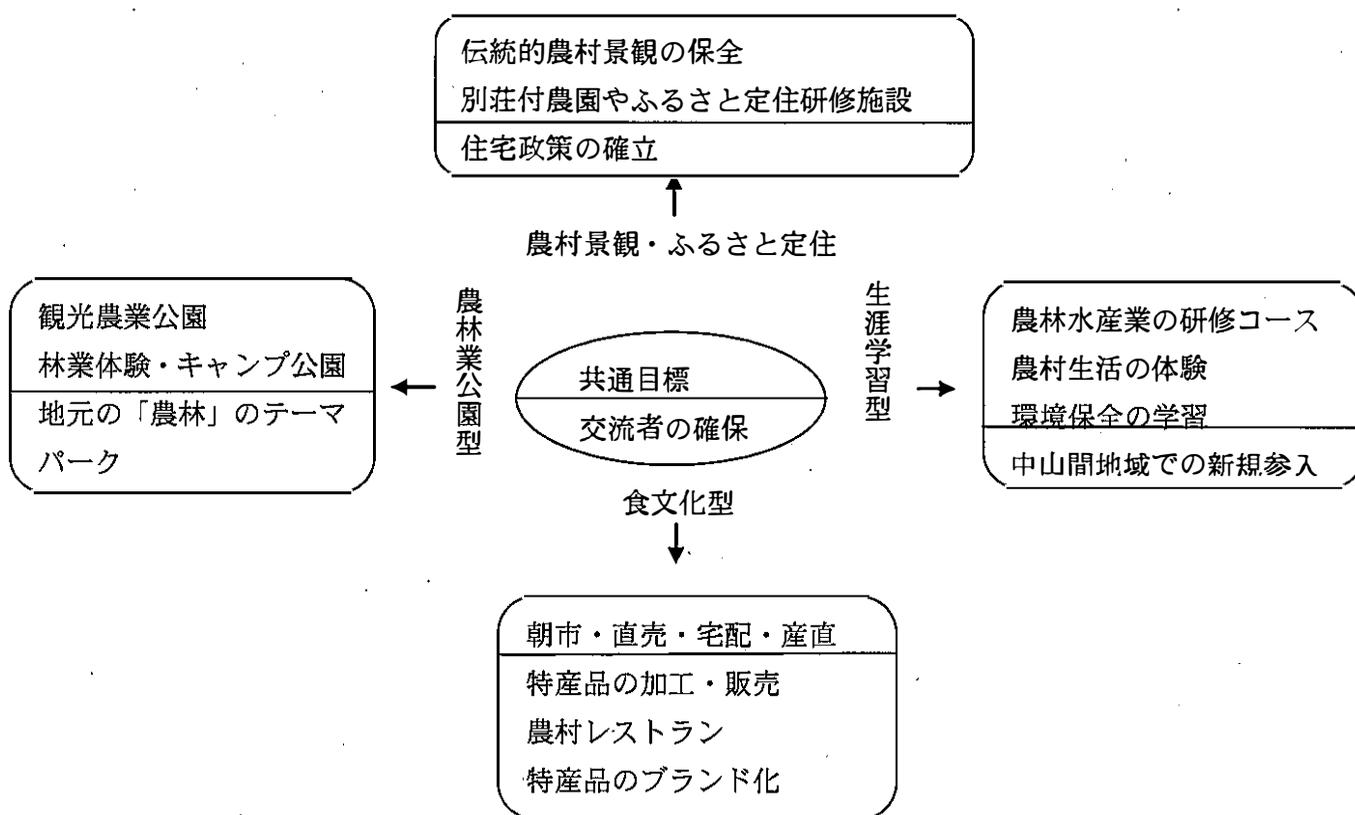


図 2-4 グリーン・ツーリズムのタイプ
 (資料)「人と地域をいかにグリーン・ツーリズム」より引用

日本のグリーン・ツーリズムは様々な効果が見られる。財団法人の都市農山漁村交流活性化機構が平成 20 年度に行った農山漁村型ワーキングホリデー実態調査報告書によると、グリーン・ツーリズムからもたらしてきた都市農村交流面での効果としては、地域の知名度がアップし、リピーターが増え、地域の活気が生まれ元気になった。また農業振興面の効果としては、農繁期の労働力を確保できて、営農意欲の向上、産直活動が生まれの所得向上などにも結びついた（藤井，2011）と評価されている。

第3章 中国のグリーン・ツーリズム―農家楽

中国では近年の経済発展に伴い地域間格差が大きな問題となり、「農業の低生産性、農村の荒廃、農民の貧困」の三農問題は特に注目されている。中国政府も2003年以降、政策課題として三農問題を取り上げ、その解決に向け種々の政策を打ち出している。中でもグリーン・ツーリズムを通じた農山村地域の活性化もその解決策の一環として注目されている。都市部においては経済の発展とともに、住民の生活水準が向上し、物質的豊かさだけでなく、心の豊かさを求めるニーズも増加傾向にある。1995年の週休二日制度導入、自家用車の普及による都市・農山村間の交通状況の改善といった物理的条件の向上、大気汚染など都市環境の悪化による健康志向を持つ都市住民の増加、先進国で流行している「スローライフ」的ライフスタイルへの憧れも加わり、休日に自然豊かな農山村地域を訪れる旅行がブームとなりつつある。

こうした農山村・都市双方からの社会的要請に応える形で、中国政府は農山村地域のインフラ整備、伝統的な文化の維持などを奨励し、農山村地域の生活環境を改善し、都市住民が農山村を訪れることで地域とその経済の活性化を促し、三農問題及び都市の社会問題などに対応しようとしている。こうした背景のもとで運営される「農家楽」は中国農山村観光における最も代表的な観光形態であるといえる（方ら、2015）。

第1節 中国観光事業の展開

観光業は地域経済の活性化、雇用の創出、産業の振興など国民経済のあらゆる領域に発展寄与するとともに、国際間の相互理解、国際的な友好交流の増進に貢献している。中国では、当時の貧困状態から脱却するため、1978年に鄧小平が改革開放政策を提唱し、それまでの閉鎖的な古い経済体制から海外からの資金や企業の誘致を促進する開放的な経済体制に変え、社会主義市場経済に基づく経済発展を目指してきた。その結果、現在の中国は改革開放政策の方針の下で、様々な分野が著しく成長し、未曾有の経済発展をもたらしている。このことは観光分野においても例外ではなかった（張、2011）。

(1) 改革開放政策以前の観光事業

まず改革開放政策以前の観光に関連する事業や行動は、1966年からの文化大革命の影響などもあって、すべて「社会主義に反する資本主義の外交路線」と見なされ、「反社会主義の行為」として強く批判された。松村（2009）によると、当時の中国では沿岸部大都市の人口増加・過剰都市化を抑制するため、「糧票」（食糧切符）による食糧配給制度を活用して、農村から都市への人口移動を厳格にコントロールしていた。また、「単位」という職場が発行する招待状がある公務出張でなければ、列車や飛行機の切符を購入したり、宿泊先を確報したりすることは困難であった。この時期は全体的には、国に生産力はまた低いため、国民は旅行に対するニーズも極めて低かった。

中国の建国初期、欧米諸国は中国に対して「政治孤立、経済封鎖」の政策を実施したため、

外国人に対しては、政治目的の外交事業の一部として、中央政府の厳格な管理下で観光が推進されてきた（張，2011）。

華僑の帰国や親族訪問、外国人訪問者の食事、宿泊、交通などのサービス提供をするため、1949年11月に福建省アモイ市で中国初めての国営旅行会社「華僑服務社」を設立された。1952年には、「アジア及び太平洋地域平和会議」でより多くの外国人訪問者を接待するため、「中国国際旅行社総社」は1954年4月15日に設立された。この旅行会社も国営で、営利の目的ではなく、政治を主要目的で、初期の対象は主に旧ソ連などの社会主義国家である。

20世紀50年代後期に入ると、自費で中国へ旅行をしにくる訪問者が増加し、最初は旧ソ連と東ヨーロッパの各社会主義国家からの訪問者が多かったが、中国と旧ソ連の関係の悪化により旧ソ連と東ヨーロッパからの訪問者は減少し、かわって欧米からの訪問者が増加した。

1960年代の中期から、欧米は中国観光業の主な市場となり、周恩来がアジア、ヨーロッパの14カ国を歴訪してから、第三世界からの訪問者も増えてきた。その結果1964年に「中国旅行遊覧事業管理局」が設立された。この管理局は現在の「中国国家旅游局」の前身であり、全国の観光事業の管理や指導などの業務を行う、「初めての外交部の外事行政管理部分であった」（張，2003）。

この時期、中国の観光事業の基本任務は、外交的なを目的を主としたもので、「自分を宣伝しながら他人を理解する」事が目標であった。そして、国営がほとんどであり、政治目的のイメージが強いものであった。

(2) 改革開放政策直後の観光事業

I（国際観光客を対象）入国旅行段階（1978年～80年代中期）

改革開放政策を実施した初期、中国の経済はまだ厳しい現状に直面していた。1978年、中国の国際旅行の接待人数はわずか世界中の0.7%しかなかった。外貨獲得の機能も乏しかった。鄧小平はより利益性を意識し、資源の総合利用と経済産業の立場から観光業を積極的に提唱した。

当時中央政府はより多くの外国人観光客を誘致するため、様々な方針を立てた。まず、中央政府は中国における「国際観光客」を定義し、その内容は「わが国に参観・訪問・旅行・親族や友人訪問・休養・視察・会議参加などで訪れ、経済・科学・技術・文化・教育・宗教などの活動に従事するため訪れた外国人・華僑・香港・マカオ同胞と台湾同胞」であった。また改革開放政策による沿海部大都市への外国人観光客の大幅な増加に対して、「中国共産党中央第11回全国人民代表大会第3回総会（第11回3中全会）の開催と同時に、1978年に開かれた全国観光活動会議では、中国は自然資源が豊かであるが、経済基盤が弱いという特徴を踏まえて、観光業を「積極的に発展し、穩健に前進」すべきだという方針を定めた」（王，2002）。この方針は中国観光の外貨獲得機能が弱いことを認識したうえで、積極的な発展を目指す方向性を示している。

20世紀80年代、中国の入国観光のルートは主に、北京、西安、上海、桂林、広州にある。90年

代中期に入って、国家旅行局は更に「シルクロード」などの新しいルートを作った。当時の訪問者は主に日本人であった。張（2003）によると、1970年代末から1980年代初の数年間に、外国人観光客は毎年25%増加した。観光客の急速な増加によって旅行会社の不足問題が起こったことから、中央政府は新たな国営旅行会社を設立した。

Ⅱ 入国旅行と国内旅行の併行段階（80年代中期～1997年）

20世紀80年代中期から、経済の快速発展とともに、国民の生活水準も上がり、国内旅行も流行し始めた。1985年1月に、国家旅游局の「当面旅游体制のいくつかの問題に関する報告」によると、①従来の観光客誘致を中心とした取り組みから、観光資源の開発と観光客の誘致を並行して進めること②国際観光を中心とした観光管理体制から、国際観光と国内観光を並行して進めること③国を主体とした投資による旅游インフラ整備から、国、地方、部分、集団、個人の全員参加、また自国資本と外国資本の共同参加④事業機関による旅游経営から、自主経営、企業型の旅游経営という「4つの転換」を示している（張、2003）。

また、管理体制の改革に加え、観光を推進する上で重要な要素となる休暇制度も設けられた。1999年、国務院は休暇を増やし、「春節」、「五・一」、「十・一」の年三回の「黄金週間」として推進する制度を発表した。この休暇制度の導入は、観光業だけではなく、様々な産業の発展を促した上に、国民が国内観光に参加する機会を与え、経済発展に結びつける手段の一つとしても有効である。更に、国家旅游局は休暇制度の推進だけでなく、1992年から毎年1つの観光テーマを定め、中国観光の魅力をアピールした。1992年の「友好観光年」に始まり、1993年の「中国山水風光游」、1994年の「文物古跡游」、1995年の「民俗休暇游」、1999年の「生態環境游」、2000年の「神州世紀游」、2001年の「中国体育健身游」などのテーマを定め、様々な新しい観光形態への挑戦を試みた（張、2011）。

Ⅲ 入国旅行、国内旅行と国際旅行が全般的に展開段階（1997年～）

中国国家旅游局と公安部の連盟で1997年7月1日に「中国公民自費出国旅游管理規則」を実施し始めた。これは中国政府が正式的に旅行会社が出国旅游の業務を展開することを認めると見られる。

2002年海外からの訪問者は9791万人で、観光からもたらした外貨は204億ドルに達し、世界の4.4%まで上回った。また中国の出国国民の人数は1660.23万に達し、アジア地区での新たな客源輸出国と注目された。また、同時に国内旅行の人数は8.78億人になり、世界中でも人数が最も多い、スピードが最も速い、潜在力が最も強い旅行市場となった。

またこの時期の国内観光は、地方都市や農村ではマス・ツーリズムに代表される大衆観光の市場が大きい。他方で、同じ国内観光でも、沿海部大都市を中心とした富裕層は金銭的にも時間的にも余裕を持っていることから、大衆観光よりもむしろ観光資源に新しい価値を見出し、テーマ性を強調した観光形態を選択し始めていると考えられる（張、2011）。

第2節 中国におけるグリーン・ツーリズムの概念

グリーン・ツーリズムは、農山漁村地域において、自然、文化との交流を楽しむ余暇活動で

あり、都市と農村を行き交う新たなライフスタイルを広まる取り組みである。中国においては、主に自然・景観・文化などの農業・農村の多面的な機能を利用し、農業・農村の活性化及び都市住民のゆとりあるライフスタイルの提供を目的として、農業生産、農業技術、伝統食品の加工などの農業関連活動を観光客に紹介する事業活動として推奨されている。即ち農家（または農業経営法人）が、観光、娯楽、飲食、宿泊などのサービスを提供することを通じて、農業と加工業、観光業（第一次産業、第二次産業、第三次産業）を一体化する事業活動を指す（楊ら、2008）。

現在中国では、グリーン・ツーリズムに関する訳語はこれまで研究者が様々な訳語と解釈を行っている。しかし中国におけるグリーン・ツーリズムの理論研究は始まったばかりであり、明確にまとまっていなかった現状である。現在グリーン・ツーリズムに関する概念の中で、「郷村観光」、「生態観光」、「レジャー農業」、「観光農業」、「農家楽」などの訳語が最も見られる。まず其々の概念から見てみよう。

中国国家旅游局の「郷村観光」に関する報告書『概念、類型、過ち、問題と対策—中国の郷村観光に対する5つの質問』（2006年）によると、郷村観光とは、現在都市と設定された観光地以外の地域で起こっている観光の特徴を備える産業のことである。即ち直接的に観光客にサービスを提供する産業のことであり、通常は農村集団経営あるいは個人経営で以下の業界に幅広く関与もしくは関与可能な産業を含んでいる—旅行業及び関連業、宿泊施設経営業、飲食業、娯楽業、小売業、水上旅客運送業、道路旅客運送業、レンタル業、文化サービス業」とされている。しかし同時に、「この定義では、直観的に郷村観光の内容と実際の業態を知ることが難しい」と述べ、郷村観光の曖昧さを指摘している（張、2010）。

郭ら（2011）によると、郷村観光は郷村地域で行われ、郷村の自然環境や、農林漁業、民俗習慣、農村文化、村落古鎮、農家の生活などを資源として、科学的な企画及び開発デザインを通じて、観光客に観光、レジャー、休暇、体験、娯楽などのサービスを提供する経営活動である。広い意味から見れば、レジャー農業、民俗観光、民族風土人情観光、レジャー休暇観光、農家楽、郷村自然生態観光、回帰自然休養観光も郷村観光に含まれていると指摘された。鄭（2005）が郷村観光は郷村地域の自然生態、農業生産、農村生活と文化活動を適切に計画して、郷土レジャーサービスを提供することによって、訪問者のレジャーニーズに満足させ、郷土の休暇教育機能を発揮できる活動であると指摘している。「郷村観光は郷村の空間環境と、都市と農村の相違を利用する」という点を強調する肖（2001）は、「郷村観光は、郷村の空間環境という名目のもとに、郷村独特な生産形態、民俗風土、生活様式、風景、家屋、郷村文化などを対象として、都市と農村の相違を利用して、計画と設計と商品を組み合わせている。そして、主に観光、遊覧、娯楽、レジャー、長期休暇を過ごすことと、ショッピングが一体となった一観光形態である」と述べている。これらの定義では、郷村地域という範囲を指定し、自然資源以外、適切な計画も郷村観光によって不可欠な要素であると認識されている。

鄭（2005）は郷村観光を資源によって、自然観光類、観光農業類、郷村休暇類、文化旅行類と分類した（表 3-1）。

表 3-1 郷村観光の資源分類

	自然利用類	資源保護類
自然資源に基づく類	観光農業類 農業祭り 教育農園 観光摘み取る園	自然観光類 九寨溝 大堡礁 森林楽園
人文資源に基づく類	郷村休暇類 グリーン休暇村 休暇農場 レジャー農場	文化旅行類 民俗祭り 麗江古鎮 民俗旅游村

中国社会科学院の研究者魏小安は更に郷村観光の発展方向を大都市近郊の農家楽、ハイテク農業観光、農業新村（極めて経済を発展させて、郷村を都市化にしようと目的している）、古い村落の開発、農業景観の活用（棚田など）の5つにまとめた（単ら、2008）。

前章では、グリーン・ツーリズムはあるがままの自然資源に基づいて、農家などの居住している人たちがサービスを提供して、都市住民との交流を大事にしながら環境保護及び地域社会の活性化を実現できるようにする活動と定義したが、計画性が強い中国の郷村観光は、「農」に基づいた観光形態であるが、必ずしも農家が経営の主体でもなく、農村地域にある全ての資源（ありのままの自然資源と人為的資源）に依存し、先進国が提唱しているグリーン・ツーリズムの概念より範囲も内容も幅広いものであるといえる。

生態観光とは、人々が自然保護を意識し、自然環境に配慮しながら楽しむ観光形態を指す。具体的には、自然の散策や動植物の観察などが挙げられ、農村地域に限らず、様々な地域で取り組まれている。現在の中国で行われている生態観光は、動植物園の生態を観察することだけではなく、郷村観光の一環として行われているという特徴も見られる（緒方、2009）。この生態観光はグリーン・ツーリズムよりエコツーリズムという訳語のほうが適切ではないかと思われる。

レジャー農業とは、都市近郊と農村地域で、農業や農村の自然環境、田園風景、農業生産及び経営、農業施設、農耕文化、農家の生活などの資源を利用し、科学的な計画を通じて観光客に観光、レジャー、娯楽などを提供する経営活動である（趙憲軍ら、2011）。候ら（2012）はレジャー農業を先進国のアグリ・ツーリズムと一括し、郷村観光や農業観光とは同じ意味と指摘している。

張（2010）は観光農業を収穫体験や農産物の食体験、農家民泊など、農業資源を活用した観光形態と定義している。観光農業の基本特徴は、観光価値のある農業資源や農産物を開発することを前提に、観光客に大自然の風景と近代化の農業芸術を同時に味わわせることができる。即ち観光農業は「農業＋観光業」の新しい産業である（駱、2009）。駱（2009）は更に、郷村観光には観光農業があり、観光農業は郷村観光の大切な一部分であり、この二つの

観光活動を統一に認識され、結合点は農家楽であると指摘している。

農家楽という言葉が初めて使われたのは1987年に成都日報のジャーナリスト王学成が成都市郫県農科村の郷村観光を報道する時であった。農家楽の定義に関しては現在中国ではまだ公認的統一されていない。胡（2002）は中国の農家楽が「観光扶貧」（注11）政策から生まれたものであると指摘しているが、多くの学者は「農家楽」が欧米の観光農業から生まれたものであると指摘している。李ら（2011）は農家楽が中国の独特の郷村観光であり、郷村観光の中でも最も代表的な観光形式であると指摘している。現在中国では、農家楽に関する主要な概念は表3-2のように示している。

表 3-2 農家楽の概念

概念	出典
狭義の農家楽は、利用者が豊かな自然と美しい景観、更に食に特色がある農村を訪れ、体験を通じて楽しみながら、ゆとりのある余暇活動をする一方、人口高齢化、既存の産業が低迷する農村で、食事、宿泊、直売、農産物加工の新しいサービス産業を振興し、農村の経済的活性化を図ることである。広義の農家楽は、農業の概念から生まれ、林家楽や漁家楽や牧家楽などの形式も含まれている。	田喜洲（2002）
農家楽は農村観光の一つのタイプであり、農村の文化、景観、生態環境、生産活動及び伝統的な民族習慣を資源とし、娯楽、レジャーを融合した観光活動である。	胡衛華（2002）
農家楽は農村地区で行い、農村資源を活用し、そして利用者が都市住民である観光方式	任虹（2004）
農家楽は観光業と農業を結びつけ、農村の自然、文化を観光資源として運営する農村観光事業を指し、一つの農村経済を振興させる経済活動である。いわば中国型グリーン・ツーリズムである。	展鳳彬（2008）
農家楽は郷村地域に行われ、旅行者と経営者の交流を主要な目的としている新しい観光活動と資源利用の方式である。農家楽は郷村性、家庭性と娯楽性の特徴を持っている。	李鵬ら（2011）
農家楽は、農民を営業の主体として、農山村の風景や民俗文化を利用しながら、都市部以外の自家建物で、地域独特の料理および生活体験によって接客するという新しい観光形式である。	陳蕾（2004）
農家楽は郷村地域で行われ、郷村性がある自然と人文資源を前提としている観光形式である。	楊桂華ら（2006）

中国旅遊協会旅遊都市分会（2011）は農家楽を郷村観光の一種類で、農村地域の農業活動や民俗風習によって都市住民をひきつけ、様々なサービスを提供したりして、コストも消費

額も低い経営活動であると定義している。更に農家楽の特徴を郷土性、地方性、参与性、レジャー性と自然性にまとめた。郷土性とは美しい農村の自然環境、豊かな農村民俗風習、特別な農家建物、伝統的な農業イベントや農産品などの農村資源のことである。地方性とは地域の特別な自然環境や伝統によって現れた地方の性格である、例えば新疆ウイグルの砂漠風景や広西省の棚畑風景など。参与性とは都市住民が農村地域での体験活動のことである。レジャー性とは都市住民が農村地域へ行って、フラッシュな環境でリラックスができることである。自然性とはありがままの自然の環境で観光活動を行うことである。李鵬ら（2011）は農家楽を中国の特色ある郷村観光であると提唱している。ここの「農」は「農業、農村、農民」を指し、これは農家楽の基礎となる資源のことである。「家」は農家の家庭という単位で行う経営活動のことである。「楽」は体験内容のことである。農民は農家の生活雰囲気や習慣、地元の農産物で都市住民と交流しながらサービスを提供し、都市住民は郷村の自然や文化から「娯楽」を求める。

郷村観光の発展方向には、農家楽のほかにハイテク農業や、農業新村などありがままの自然を基いて人為的行為を含む観光形態も見られる。農家側に着目し、政府が計画するものではなく、農家自分で行っている行為としてのグリーン・ツーリズムを表すものとしては、郷村観光より農家楽のほうが適切だと考えられる。そのため、本研究では、農家楽を中国のグリーン・ツーリズムの代表として扱い、調査対象とするものである。

以上の概念に基づいて、本研究においては、農家楽を都市と農山村の交流を前提に、郷村地域で農家レストランを中心として、民宿や農林業体験などを含む「農家に宿泊し、飲食し、農林業体験を行い、農林産物を購入するなどの体験を楽しむ」ものと定義している。

第3節 農家楽の分類及び発展経緯

農家楽に関しては、立地地域、資源、投資主体、体験の種類、郷村の特徴、観光客の目的などによって、様々な分類をされている。郭ら（2011）は、農家楽を農業観光農家楽、民俗文化農家楽、民宿農家楽、レジャー娯楽農家楽、飲食宿泊農家楽と農業体験農家楽の6つに分類した。展（2008）は農家楽を山村農家楽、田園農家楽、民俗文化農家楽、水郷農家楽、竹郷農家楽のタイプに分別した。陳（2004）は農家楽を地域の交通状況、経営者、利用者、季節性などの要因から、農家楽を観光地農家楽、農山村地農家楽、都市近郊農家楽に区分している。李ら（2011）は現在中国で、農家楽に関する主要な分類を表3-3のようにまとめた。

表 3-3 農家楽の分類

特徴	類型	出典
資源と市場への依頼程度	資源型, 市場型, 中間型	肖佑興ら (2001)
郷村の特性	郷村自然風景観光, 農場観光, 郷村民俗観光, 民族風土人情観光	何景明ら (2002)
投資の主体	農民が投資する, 外来投資, 連盟投資	劉娜ら (2001)
観光の目的	観光型, レジャー型, 体験型, 休暇型, ビジネス会議型, 買い物型, 研究型, 総合型	楊建翠 (2004)
活動内容	田園観光型, 科学教育型, レジャー休暇型, 体験参与型, 体験交流型, 農産物提供型, 農業文化型	姚素英 (1997)
民族	漢家楽, 白家楽, タイ家楽など	李鵬ら (2011)

農家楽は四川省成都市郫県（ピケン）の農科村で始まった。1987年、郫県の花を栽培する農民の徐紀元が買付人の便宜のため、自家の部屋、庭などを利用して、買付人に宿泊、食事を提供し始めた。これを土台として、郫県の新鮮な空気、花に囲まれた環境、美しい田舎料理が人気を集め、観光サービス理念、簡単な設備を取り入れることによって、成都市市民に向けて、農業観光事業の「徐家大院」を始めたのである（展、2008）。全体から見れば、中国の農家楽は大旨以下のように三つの段階に分けている。

（一）農家楽の萌芽誕生段階（1987～1998年）

この段階では、中国の農業生産の構造には大きな変化が始まり、伝統的な農業から近代化の農業への転換が見られた。そして都市住民観光者の増加により、都市近郊や観光名所の周辺などの農民は自家の田園を利用して、接客活動を始めた。これは農家楽の雛形といえよう。

1. 土地制度の改革による農家楽の発展のための制度的な保障

中国政府の農業政策思想は新政府樹立（1949）後、「土地改革運動」（1950）を始めとした「農業合作社運動」（1952）、「農村人民公社運動」（1958）、「生産責任制運動」（或いは生産請負運動 1980）、「郷鎮企業の育成運動」（1984）など、様々な農村改革運動に表れてきた。その中でも、家族生産・家族経営を中心とした市場経済的「生産責任制」への体制転換は、政府の家族経営育成政策による制度であり、多数の農家が生産請負をすることで、「経営権・所得配分の受益権・財産権」が確報されるとともに、重要な生産資材の購入権も取得することができたという特徴を持っている。即ち「生産責任制」の施行は農業経営の主体が政府から農民へ転換したことを意味し、農民は家族を中心とした市場経営の主体として、社会主義経済体制の中で、部分的に資本主義的経営活動を行った性格を持っているといえる（呉、2008）。「生産責任制」に基づいて、農民は自家の田園で自由に経営することができて、農業以外のサービス業などの経営活動もできた。これは萌芽時代の農家楽を支える大きな力となった。

2. 農家楽発展の触媒としての市場ニーズ

改革開放が進むとともに、都市住民の収入も明らかに上がった；1995年からの週2日制度の実施で、都市住民の余暇時間が増えてきた。その上に、交通状況の改善、都市近郊の美しい自然や環境等で、益々多くの住民が農村地域を訪れてきた。この様なニーズに合わせるため、都市近郊の農民は自発的に自家の建物を利用して、飲食や宿泊を提供し始めた。これは中国の初段階の農家楽である。また、農民の収入問題を解決するため、中国政府は観光業を貧困政策及び三農問題解決の手段として強力に進めている。政府の支援政策は農家楽発展の後押しとなった。

3. 初期の農家楽の特徴

初期の農家楽は三つの特徴を持っている。一つ目は、自発性である。農家楽の最初は、都市近郊の農民が自発的に自家の建物を利用して、観光に来ている都市住民に飲食や宿泊を提供し始めた。二つ目は、政府の支援が強い。農民が自発的に行った農家楽は、中国の貧困政策や農業構造の調整意思と合致していることから、各地域の政府から様々な支援を受けることができた。三つ目は盲目投資現象が現れたことである。農家楽は新しい旅行形態のため、理論的にも実践的にも経験不足であった。そのため盲目的な開発があふれ、環境破壊、体験内容の類似化、サービス質の低下など、様々な問題が表れることとなった。

(二) 農家楽の初発展段階（1999～2005年）

1999年、中国国家旅游局は「生態旅游年」を提唱して、全国各地で農家楽ブームが始まった。2001年、中国国家旅游局は正式的に農家楽の発展を当時の観光事業の中心とされた。そして、山東省、江蘇省、浙江省などの地域の農家楽での調査によって、『農業旅游発展指導規範』を作成し、農家楽のモデル地区のリストを発表した。

2004年、中国国家旅游局は全国農家楽モデル地区の判定基準によって、招待人数、旅行収益、製品、施設、管理、経営、安全、将来性などの要素から、全国で203箇所の農家楽のモデル地区を選定した。

このように、農家楽は自発的な農民活動から企画性が強い観光活動になってきた。2001年まで、中国国家旅游局が提出した農家楽のルートは20省以上、1万あまりの村落にわたった（金ら、2011年）。

(三) 農家楽の快速発展段階（2005年～）

2006年に「中国共産党中央第十六回全国人民代表大会第5回総会（第16回5中全会）の開催及び「2006年中央一号文件」をシンボルとして、全国各地の農家楽は快速発展階段に入ったことを示した。農家楽のよりよく、速い発展及び社会主義新農村建設の促進をするため、中国国家旅游局は2006年に『農村旅游発展に関する指導意見』を公布した。2007年、中国農業部と中国国家旅游局とともに、全国農家楽の発展に関する通知を発表して、農家楽に対する指導、基本原則及び要求を提出した。更に、中国農家楽サイトをも作成し、全国の農家楽を強力に推進した。

2010年1月、中国中央政府は「三農問題」に関する中央一号文件の中で、「現地の特色に

あわせる高効率の農業を発展し、農業の就業潜在力を掘り起こし、郷鎮企業のシステム調整と産業革新を進め、農産物の加工業を支援しながら、レジャー農業、郷村観光、森林観光及び農村サービス業を積極的に推進する」という主旨を示した。中国国家旅游局のデータによると、2011年まで中国全国の農家楽は150万戸に達し、年間接客人数は6億人を超え、年間経営収入は1500億元に達した。農家楽の発展によって、1500万人以上の農民の就業問題を解決した。更に、中国中央農村農業部事務室の担当陳錫文（2014）によると2014年まで農家楽の接客人数はおよそ12億人に達し、中国全国の観光者数の30%を占めている。現在中国では、農家楽の数は200万戸以上を超え、その中で10万戸以上のモデル村・鎮があり、年間総収入は3200億元に達したことが明らかとなった。

中国の農家楽はわずか20年間の間に、極めて快速な発展が見られたが、個人経営型が多いため、管理の不完全、地域資源が効率的に利用されていない、地域文化・特徴を出せていない、地域ブランドの単一化などの問題も表れてきた。農家楽を持続可能な地域振興策にするため、管理、経営、地域文化、資源の活用の面における地域農業、地域経営体、地域住民の組織化が重要となってきた。

こうした点においては、日本や欧米などの先進国の農村観光業の先進方法を学び・導入する必要があると考えられるが、中国の農家楽を展開する際に、そのまま先進国のグリーン・ツーリズムを見習って行っても同じ効果は期待できず、中国の状況に応じたアレンジが不可欠である。このため本研究では、先進国的なグリーン・ツーリズムの社会的・経済的条件が普及しつつある浙江省を研究対象として、中国におけるグリーン・ツーリズム「農家楽」の特徴や問題点更なる発展方向について考察を行うこととした。

第4章 中国農家楽の経営者に対するヒアリング調査—浙江省杭州市桐廬県を事例として

第1節 調査目的及び調査方法

本調査では、農家楽を詳細に検討するために、その特徴に基づいて分類、分析を行うが、こうした分類の先行研究として陳（2004）は農家楽を地域の交通状況、経営者、利用者、季節性などの要因から、観光地農家楽、農山村地農家楽、都市近郊型農家楽に区分している。観光地農家楽は、観光名所の周辺にあり、経営者は主として農家であり、公共交通の便もよく、個人観光客や避暑や休暇を過ごすための中高年の利用者が多く、名所利用への依存度が強い。農山村地農家楽は、農山村地域にあり、現地の農家が経営し、近隣都市の中間層消費者が自家用車か電車で利用している。現地の農林産品に合わせ、閑散期と最盛期があり、連休時とくに人気である。都市近郊農家楽は都市周辺にあり、経営者は都市近郊の農家である。利用者は現地都市の市民や周辺の農家であり、季節にかかわらず、週末の日帰りが多く、その利用は次第に一般庶民の日常生活に組み込まれたと指摘した。

しかし陳の研究では、それぞれの農家楽の類型毎の具体的な事例調査による実証部分や類型別の発展方向や問題点についての分析に弱さを抱えていることが否めない。よって本研究においては、調査対象地の現状に基づき農家楽の現状をより詳細に分析するために、陳の定義を援用し、農家楽を①観光地農家楽（観光地に隣接する形態）、②辺鄙農山村地農家楽（一般的な農山村部にある形態）、③都市近郊型農家楽（都市に隣接する農山村部に存する形態）に区分することとした。

こうしたそれぞれの区分ごとの農家楽の実像を明らかにするとともに、農家楽の発展が三農問題を中心とした都市-農山村の格差是正につながりうるのか、つながり得るとすればそれはどのような条件に基づくものなのかを実証的に明らかにすることを目的とした。

調査の方法としては、農家楽に関する文献調査及び中国浙江省杭州市桐廬県の農家楽を先述した三区分に分類した上で、区分毎に地区行政関係者と農家楽の経営者に聞き取り調査を行った。地区行政関係者に対しては桐廬県の農家楽の歴史、現状、農村計画、政府の支援状況及び今後の展望について聞き取りを行い、桐廬県の農家楽の現状を全般的に把握した。また、実際の農家楽の運営状況を明らかにするため、農家楽経営者に経営主体、目標、経緯、経営効果及び現在の問題点などについて聞き取りを行った。

第2節 調査地域の概観

中国では、地方行政を4層の垂直構造に分けている。最上層を第一級行政区画と呼び、23の省、5つの自治区、4つの直轄市、2つの特別行政区の計34の行政区からなる。第二層の地級の行政単位は地級市、自治州、地区などがある。現在、中国は省と県・県級市の中間に位置する地級市に再編されつつある。地級市は市と称するものの、都市部と周辺の農村部を含む比較的大きな行政単位である。人口や面積といった規模は、日本の市より県に近い。第三層の行政単位が県、県級市である。中国では「市」の下部に「県」があることになり、英

語では county と訳される。日本と比較した場合、県より郡に近い。1980年代の改革開放以降、直轄市や大都市（地級市）などで急速に都市化した市街地には県級行政区としての「市轄区」が設置される場合がある。第四層の行政単位が郷や鎮などの郷級行政区である。日本における基礎自治体に近い存在である。市轄区の管轄下では県級人民政府の派出機構である街道弁事所が管理する地区として「街道」が郷や鎮の代わりに設置される場合がある（つまり「街道」と呼ばれる地区は県級人民政府の直轄であり地方自治体政府機関を持たない）。1990年代以前に多数あった県轄区も現在では郷級行政区に区分されているが、2011年現在2区のみ存在している。本調査は、浙江省杭州市に属している桐廬県を調査対象地区とした。

(1) 浙江省の場合

浙江省は中国の華東地区中部に位置し、東シナ海に面す。省都は杭州市である。北に江蘇省と上海市、西に安徽省と江西省、南に福建省と接する。東は東シナ海に面する。銭塘江が流入する杭州湾は古来より交易で栄え、沿海には舟山列島など約2千の島々が散らばり、中国で最も島嶼が多い省である。内陸は丘陵地帯となり、天台山、四明山、天目山などが連なる。

(図 4-1)

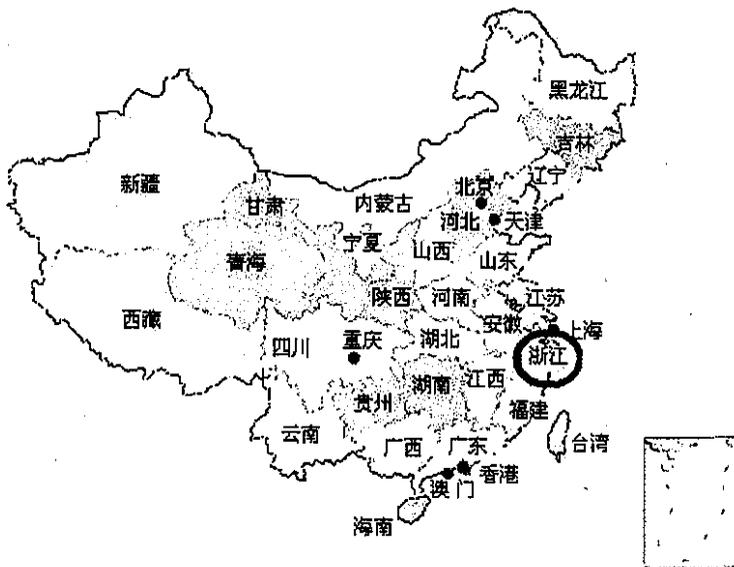


図 4-1 中国の地図及び浙江省の位置

出所：Baidu 画像 <http://image.baidu.com/>より著者が加筆。図 4-1 は中国全国の地図であり、○をつけられた部分は浙江省である。

浙江省の2013年の省内GDPは全国第4位で、都市化率は63.2%（李・江，2013）である。一人当たりの平均収入は都市部13年連続全国第1位（直轄市の上海、北京を除く）、農山村部は29年連続第1位（直轄市を除く）（呂，2014）、都市農山村の格差は2.35：1で、全国の3.32：1より低い。しかし、都市化は進んでおり、農山村部では一人あたりの耕地面積の減少、農家の兼業化、高齢化など農業資源が不足、農業衰退の傾向が見られる。しかし、2004年と2012年を比較すると農村戸籍を都市戸籍（注12）に変更する戸籍変更数は67%

減少し、都市への人口流入は収まりつつあり、先進国のように「反都市化」(注 13)とよばれる傾向も見られつつある。

こうした背景の中で、農業の振興、農村地域の活性化を図るため、浙江省政府は経済発展を促進するとともに、新農村建設にも大きな力を注いでいる。2005 年中国共産党第 16 期中央委員会第 5 回総会(五中全会)では、「社会主義新農村の建設」の目標を提出した。それは、都市と農村の経済・社会発展を強調させることを堅持したうえで、「生産を発展させ、生活を豊かにし、気風を改善させ、村を美しく、民主的管理を行う」という目標概念である。この目標を応えるため、2008 年に浙江省の安吉省は正式的に「中国美しい郷村」計画を打ち出した。2010 年に浙江省政府は更に「浙江省美しい郷村建設行動計画(2011-2015)」政策を策定し、2015 年に浙江省 70%の県・市・区は「美しい郷村建設」の要求に満たし、60%以上の郷鎮は正式的に美しい郷村建設を展開する目標を提出した(茅, 2014)。2014 年浙江省国経済と社会発展統計公報によると、2014 年年末まで、浙江省省内では、汚水の処理工程を一般的に展開する村は総 6120 個であり、農村ごみの減量化と資源化処理の村は 1901 個である。現在省内 46 個の県・市・区は「美しい郷村」建設のモデル地区に選ばれ、農家樂の重点村は 856 個、旅行スポットは 2336 個に達した。

浙江省における農家樂の発展は全国的傾向と同様に 1980 年代に誕生、90 年代後期から発展を始め、2004 年時点で農家樂や漁家樂など 1,500 戸程度、従業員は約 1.3 万人、来客数は 1,385 万人、総生産額は 7.34 億元に達した(張・申, 2006)。2006 年には中国「国家農業旅行モデル地域」の称号を授与され、2009 年までに農家樂は 1,678 戸に達し、従業員は 11.26 万人、農家樂及び観光農業の総生産額は 78 億元に達した(郭・呂, 2011)。

(2) 杭州市桐廬県の場合

桐廬県(図 4-2)は浙江省西北部に位置し、省都杭州市から南西 90 km に位置し、全区域の東西の長い約 77 キロメートル、南北の広い約 55 キロメートル、面積 1,825km²、人口約 40 万人の地方都市である。2012 年地域 GDP は 249.25 億元(1 元=17.79 円、以下同じ)、都市住民一人あたり可処分所得は 30,301 元(全国は 24,565 元)、農山村住民の一人あたりの純収入は 15,232 元(桐廬県統計局 2013)(全国は 7,917 元)である。

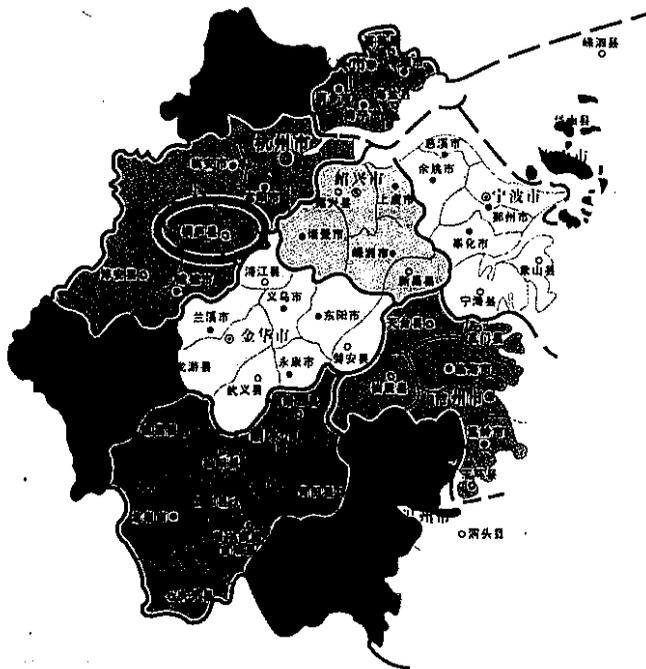


図 4-2 浙江省の地図及び桐廬県の位置

出所 Google 画像 <https://www.google.co.jp/search?q=浙江省地図>より著者が加筆。図 4-2 は浙江省の地図であり、○をつけられた部分は桐廬県の位置である。

桐廬県を選定した理由は第 1 に桐廬県は政策的に新農村建設に力をいれ、農山村振興を強力に推進していることにある。2003 年から 2005 まで 3 年間連続「中国百強県(市)」(注 14)であり、2012 年まで都市化率は 63.1%と経済社会の発展過程としては成熟期を迎えており、中国国内の一つの先進事例と位置づけられる。政策的には三農問題の解決に留まらず、工業と農業、都市と農山村、都市住民と農民を一つのまとまりとした発展計画を目指し、旅行開発を新農村建設に関わる重要な事業として位置付けている。「桐廬県十二五新農村建設発展企画」には、美しい郷村づくりが明確な目標として掲げられた。2011 年、桐廬県は「中国魅力新農山村十佳県」(注 15)に選ばれた。2012 年全国レジャー農業と郷村旅行モデル県と認定され、杭州市内唯一かつ初のモデル県である。2013 年桐廬県の環溪村は中国住宅・都市農山村建設部による「第一陣美しい小鎮・村建設のモデルリスト」にも選定されている(中華人民共和國中央人民政府網, 2013)。

第 2 には、観光業が急速な発展を見せていることである。桐廬県は 1979 年「瑶琳仙境」の開発に始まり、30 年間の観光開発期間中、観光産業の規模は絶えず拡大している。2003 年から「山水祭」を開催、「自然を抱擁」の旗を掲げ始めた。2006 年に、第 10 回世界「国際花園都市」(注 16)の決勝戦で「国際花園都市」の称号を獲得した。2009 年までに観光名所は 19ヶ所に達し、その中で国家 4A 級(注 17)名所 2ヶ所、3A 級名所 1ヶ所、国家森林公園 2つがある。2012 年の全県の観光客数は 757.01 万人、観光業の総収入は 73.50 億元に達した(林, 2013)。2012 年「中国最美県」と 2013 年の「長寿の郷」(注 18)の称号を獲得

している。

桐廬県は山岳地帯であり、周囲に群山がそびえ、中部は河川沿いに平原が広がり、都市的地域の中心部はその平原に位置する。1990年代の蘆茨村の農家楽を嚆矢に農家楽の発展が始まる。2002年県政府は「農家楽の発展に関する意見」並びに「桐廬県旅行発展に対する支援意見」を策定した。2006年、桐廬県レジャー観光農業旅行チームを発足させ、専門の事務室を設定した。2011年には「農家楽発展に関する実施意見」を作成し農家楽の発展、インフラ建設、宣伝などのために毎年「農家楽資金」を計上している。2011年までに桐廬県レジャー農業と郷村観光のモデル村は17に上り、農家楽は150戸に達している。農家楽の従業員は1,788人、観光客108.5万人、営業額は6,780.3万元に達した(徐, 2012)。2011年、桐廬県は杭州市内で初めて中国農業部国家旅行局に「全国レジャー農業と郷村旅行モデル県」として指定されている。桐廬県の地形図(図4-3)のように、桐廬県の川沿いには観光地が多く存在する。また、農家楽も観光地、及び都市的地域周辺への立地が目立つ。しかし、都市的地域から遠く離れた交通不便の辺鄙農山村地では、農家楽の数は少なく、観光地や都市的地域周辺との格差が明らかに見られる。

桐廬県の農家楽の現状をより詳細に分析するために、本研究では陳蕾の定義を援用し、農家楽を①観光地農家楽(観光地に隣接する形態)、②辺鄙農山村地農家楽(一般的な農山村部にある形態)、③都市近郊型農家楽(都市に隣接する農山村部に存する形態)に区分し、調査を行った。調査事例はそれぞれ①桐廬県富春江鎮の芦茨村、②莪山シャ族郷、鐘山郷、③城南街の周辺である。

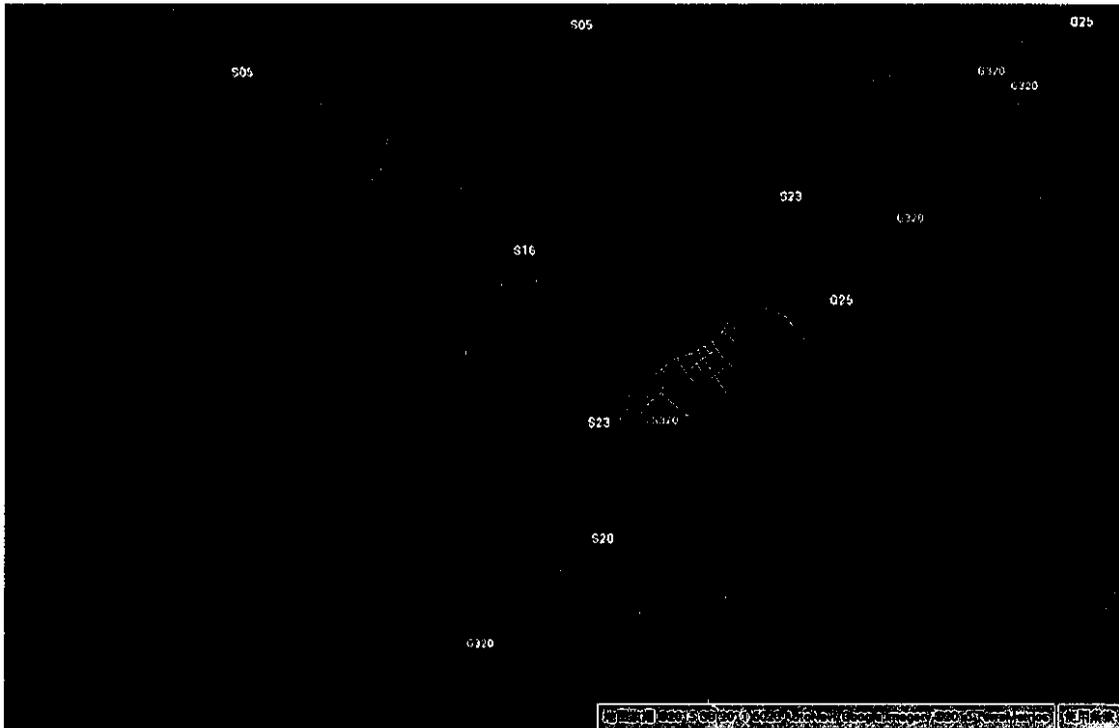


図 4-3 桐廬県の地形図

出所：<http://www.meet99.com/map-tonglu.html> より著者が加筆

注記：点線の部分は町の中心部；楕円の部分は調査地の辺鄙農山村地；長方形の部分は調査地の観光地である；△は桐廬県の観光名所であり，◆は調査地の代表事例の農家楽の位置である。

第3節 ヒアリング調査の結果

(1) 観光地農家楽—桐廬県富春江鎮芦茨村

富春江鎮芦茨村は桐廬県の西南部に位置し、県の中心部からは遠隔地にあるものの、村落内には白雲源森林公園、巖子陵釣魚台の2つの4A級の観光地区と江南龍門湾などの名所があり、山水調和、農漁村風景にあふれ、多くの観光客が集まる。芦茨村の総村民委員会（注19）の委員によると、芦茨村には7つの集落があり、村全体の面積は54.5km²、人口は1,313人（2012年）である。芦茨村の芦茨湾は鵜飼の伝統もあり、河川を利用した天然プールでも有名である。心地よい風景の他、歴史、民俗文化、民間手工芸、古街、古橋、祖廟、寺院、百歩街に恵まれ、元代の画家黄公望の名作「富春山居図」の取材地の一つでもある。村内の白雲源観光地は、龍門山脈に位置し、主峰の観音頂は（1,246.5m）富春江地区の最高峰である。地域の森林率は98%に達し、多彩で奇異な山の中で、滝や深い淵が数十か所あり、80年代から“江南の九寨溝”、“富春江のシャングリラ”と讃えられてきた。

1990年代、芦茨村では農家風レストランが誕生したが、2002年に白雲源地区で初めての農家楽が誕生した。芦茨村の梅樹村委員会への聞き取りからは、当時、芦茨郷の郷長（現在富春江鎮の鎮長）沈氏は農家楽の将来性を感じ、村委員会委員を伴い、農家楽先進地である

浙江省にある金華市の仙華山へ視察を行い、その後村民へ農家楽の経営を推奨した。その上で周辺のインフラ建設や観光客の誘致などのため県政府と交渉し、支援を要請した。2009年、杭州市農業農村事務局、桐廬県農業農村事務局、郷政府の支援に加え、村民の寄付により3,000万元の基金を作り、浙江省初のスローライフ体験区—芦茨村風情小鎮（農家楽の集団立地と体験農園などの一体的整備地区）の建設を開始した。2012年時点で、芦茨村の60%以上の家庭は農家楽を経営しており、総数は60戸、さらに15戸の家庭も農家楽開業を申請中である。芦茨村の農家楽は主に芦茨中心村と梅樹村（ともに集落名）にあり、2013年10月時点、食卓数は600卓、ベッド数は1,500床、2012年の年間旅客数は9万人、営業収入は2,500万元に達した。この地区は、2006年に県内初の農家楽協会を設立し、農家楽の運営力向上などの自主管理を行ってきたが、スローライフ体験区ができてから、政府の指導の下で、村委員会が農家楽を管理している。内容的には杭州市農業農村事務局及び県政府は毎年経営者を対象に、1ヶ月～2ヶ月程度の育成研修会及び教育指導を実施している。

具体的事例について詳述すれば「白雲源人家」は芦茨村の最も古い農家楽である。経営者夫婦は、2002年に村委員会の指導の下で、レストランでのシェフの経験を活かしながら自家の建物で農家楽経営を開始した。2009年から年間収入は30万元～40万元（2009年浙江省の平均年間収入は22,727元/人）に達し、家庭総収入のほぼ80%を占めるに至っている。聞き取りからは芦茨村農家楽の利用者は主に上海、江蘇省と浙江省内の団体客であることも明らかとなった。利用料金は時期により異なるが、閑散期は一泊三食70～80元、最盛期は120～150元程度である。繁忙期は夏秋で、2、3ヶ月前からの予約が必要であり、その人気は何われる。

杭州市社会主義新農村建設指導グループ事務局2010年の発表によると、芦茨村スローライフ体験区の進行は桐廬県新農村建設の目標の一つとして重視されている。現在芦茨村の農家楽は、全員現地の農家が自家の建物で経営をしている。食と宿のほかに、農園体験やタケノコ取りなどの体験プログラムも用意されている。体験区管理委員会によると、2012年農家楽の発展は、村内300人の就業問題を解決したとされている。地域振興政策としての新農村建設の成功例といえる。しかし現在、村の中での農家楽同士の競争も激しくなっており、公共交通機関でのアクセスの不便さなどの問題も顕在化している（表4-1）。

表 4-1 観光地農家楽の代表事例

名称	白雲源人家
位置	芦茨村の梅樹村；桐廬県の中心部から19km
経営主体	村委員会の指導の下で、夫婦2人で経営
経営動機	レストランでシェフをした経験を基に、実家で技能を生かしながら起業したいとの希望から農家レストランを開業した
規模	自家建物；レストランの最大収容人数は90人；宿泊施設は最大25人
平均利用額	一泊三食、閑散期 70～80元/人；繁忙期 120～150元/人
利用者	上海、江蘇省及び浙江省の団体客が多い
政府からの支援	施設整備（テーブル、ベットなど）への補助 金技能講習：シェフの養成訓練など
経営効果	2009年から平均年間収入30万～40万元、家庭総収入の80%ぐらい
難点	地区としての知名度は上がったが、村内農家楽間の競争も激しい；公共交通が不便のため、貸切バスによる団体客が主で県内の顧客が少ない；政府には閑散期の対応策をつくってほしい

(2) 辺鄙農山村地農家楽－桐廬県義山シャ民族と鐘山郷

(1) 義山シャ族郷

義山シャ民族郷は杭州市唯一の少数民族郷で、桐廬県中部に位置し、県の中心部から約10km離れ、全地区の面積は28.73km²である。桐廬県で有名な竹の郷でもある。光緒元年(1875年)に文成、青田一帯から移動・定住したシャ民族が次々と村を創立した。シャ民族の名字には藍、雷、鐘、李の四つがあり、義山は独特なシャ民族の文化拠点として発展し、今もなお一部の地区がシャ民族の言語と冠婚葬祭等の習慣を強く残している。

義山シャ民族郷は1988年に、中国人民政治会議杭州市委員会の提案で少数民族支援策として設立された。新農村建設の重点地区として、農家楽などの新興産業で三農問題を解決する方策は社会的に注目されている。2012年まで、全郷は13の行政村を管轄して、総人口は9,550人、その中でシャ民族人口は2,711人、総人口の28.4%である(市委办, 2013)。義山は山々に植えられた名産の竹の緑に囲まれ、棚田の景観が美しい、自然豊かな地区である。郷内のシャ民族山村は2006年に星級(注20)の郷村旅行地区と指定された(注21)。地区内のベッド数は49床あるが利用者のほとんど食事利用のみである。平均利用額は30元程度と安価である。2010年4月16日、シャ民族の郷政府は杭州市政府との協力で歌舞団や現地のシャ民族住民から山歌、武術などのイベントを通じて“三月三”と呼ばれるシャ民族文化祭を開催している。

このように杭州市政府及び県政府は少数民族居住地区である義山の発展を非常に重視し、様々な助成支援を行ったが、県内他地区と比較した場合、農家楽の経営状況は順調とは言えない。郷政府の職員によると、義山の農家楽は政府の勧めで経営を開始したが、周辺観光地がなく、山の奥にあり、車で市内から1時間以上かかり、インフラ建設や宿泊施設が不完備

のため、外来の利用者が少ないといった問題を抱えている。

具体的事例について詳述すれば「洪聚萍土菜館」は莪山民族郷にある農家楽で、現在夫婦二人だけで運営されている。聞き取りによれば2004年に、莪山郷政府の指導に基づき、経営を開始した。開業当初は、政府からの支援金や地区行政による直接的な顧客の紹介、行政職員の直接的飲食利用などもあり、一時的に経営は安定していた。しかし顧客の紹介などの支援も終了し、さらに中央政府が汚職追放の一環として始めた2012年12月からの「八項規定」(注22)の改革を実施して以来、勤勉節約などの方針を定めたことで、行政職員による飲食利用が減少し、それにともなって食事利用収入も大幅に縮小した(表4-2)。

莪山郷の農家楽の数は2004年の7戸から現在の3戸にまで減少し、衰退傾向が著しい。

(2) 鐘山郷

鐘山郷は桐廬県中南部の山岳地帯に位置して、桐廬県の中心部から約14km離れている。全地区の総面積は107.77km²、11の行政村を管轄している。2009年まで、郷全域には世帯数は7,488戸、人口は21,356人である。鐘山郷は杭州市最大の梨生産地である。鐘山郷では2001年から始まったイベント「梨の祭」が多くの観光客を集めている。2009年から地区政府は新農村建設を促進しているが、莪山シャ族郷の事例とは異なり観光農業や農家楽などのグリーン・ツーリズム起業そのものへの支援は制度的にみられない。当地は山地かつ交通不便などの原因で、集客力が弱いため、農家楽の発展は難しい状況にある。特に、先述した2012年の政府の改革開始以来、農産品などの販売も低迷し、2013年3月現在、かつて3戸あった郷内の農家楽は一つも営業していない。

具体的事例について詳述すれば盛隆農荘は現在鐘山郷で最後まで営業していた農家楽である。経営者夫婦は全国的な農家楽開業ブームに刺激され、2008年に自らの居住する建物で起業し、農家楽経営を開始した。しかし2012年の調査時点では、利用している顧客はほぼ周辺の工場職員の食事利用に限られ、2013年3月に休業に至り、今後も再開の意向はないとしている(表4-2)。

表 4 - 2 辺鄙農山村地農家楽の代表事例

名称 洪聚萍土菜館	盛隆農莊
位置 義山シャ民族郷；桐廬県の中心部から 9.59km	鐘山郷；桐廬県の中心部から 14km
経営主体 夫婦 2 人で経営	夫婦 2 人で経営
経営動機 郷政府に勧められた	周辺の農家楽ブームを見て、起業した
規模 自家建物；最大収容人数は 80 人。サービスに割ける労力がないため、レストランだけを経営している	自家建物；レストランだけを経営している。最大収容人数は 100 人
平均利用額 30～40 元/人	30～40 元/人
利用者 政府の職員（2012 年から減少）、周辺工場の職員、住民が中心、祭りの際に限り外来の団体顧客	政府の職員（2012 年から減少）、周辺企業・工場の職員
政府からの支援 開業資金補助、開業当初の顧客団体の紹介	特にない
経営効果 年間 10 万～15 万元ぐらい	2013 年 3 月から休業、家庭収入の比率不明
難点 都市から離れ、周辺観光地もなく、交通不便などの原因で、外来の顧客が少ない；政府の改革に影響を受けやすい	山の奥にあるから、顧客が少ない

(3) 都市近郊農家楽—城南街周辺の農家楽

城南街は桐廬県政府の所在地で、桐廬県の全体は富春江を境にして、江北の区域は桐君街で、江南の区域は城南街と分かれている。新しい街である城南街では 19 の行政村があり、地区の面積は 97.11 km²、人口は 97,247 人である。ここ数年来、城南街は工業化、都市化、新農村建設をめぐって、数多くの事業が同時並行して行われている。

桐廬県農業農村事務所の経済発展科科长の俞氏への聞き取りから、城南街の周辺には 30 戸以上の農家楽が存在し、その数が増加しつつあり、規模や経営形態も多様である。経営者の多くは郊外の農家だが、まれに純然たるレストラン経営もみられ、「農家が経営しない農家楽」、いわゆる農家風レストランとの区分が難しいものもある。こうしたことを背景として、都市近郊の農家楽の建物は自家建物と賃家の双方が存在している。具体的事例についてみれば「安安農莊」は家族全員 6 人が自家の建物で農家楽を営んでいるが、「望江人家」は主婦の 3 人が農家を借りて、農家楽を営んでいる。こうした農家楽の顧客は近隣都市の住民が中心で、年間で閑散期と繁忙期の繁忙の時期的変動が少ない（表 4-3）。

表 4 - 3 都市近郊農家楽の代表事例

名称 安安農莊	望江人家
位置城南街の周辺, 中心部から車で10分	城南街の周辺, 中心部から車で10分
経営主体家族全員6人(両親, 長男夫婦, 次男夫婦)	主婦3人経営
経営動機農家楽がはやっている; 自家建物が広い, 農産物も充実; 家族だけでできる事業をやりたい	周辺の農家楽ブームを見て, 主婦3人が工場の仕事をやめて起業した
規模自家建物; 最大収容人数は120人; レストランだけを営んでいる	貸家, 最大収容人数は100人; レストランだけを営んでいる
平均価格40~50元/人	70~80元/人
利用者都市住民, 周辺工場の職員住民, 政府職員など	都市住民, 政府職員, 旅行の季節になると上海, 杭州市内の顧客もいる
政府からの支援特にない	特にない
経営効果年間20万~30万元ぐらい近年経営が難しくなっている	年間40万元ぐらい
難点周辺農家楽の数は年々増えている, 競争が激しい	政府の改革政策を実施して以来, 客の数がかなり減少

第4節 調査結果のまとめと考察

調査結果から明らかになったこととして第1に観光地農家楽, 辺鄙農山村地農家楽, 都市近郊農家楽のすべての立地地区が政府の新農村建設地区に位置付けられており, 政府はいずれの地区も振興すべき農山村を位置づけていることが理解できる。

第2に, しかしながらそうした位置付けに関わらず政府の支援には区分別に大きく相違がある。三区分の中で観光地農家楽には多大な政府補助が行われているにもかかわらず, 日常的なレストラン利用の需要に恵まれ農家が自主的に開業することが通例の都市近郊農家楽には政府補助がなく, 辺鄙農山村地農家楽は少数民族対策という特別な場合にのみ補助が行われている。このことから政府の補助は観光一般への補助と連動して行われており, 農家楽を含む農山村観光あるいは農山村そのものの発展への補助として位置付けられていないことが理解できる。

第3に政府支援を受けられた少数民族地区の辺鄙農山村地農家楽と観光地農家楽の差異についてである。この二つを比較することで別の問題が浮き彫りになる。即ち, 同じように政策的テコ入れが行われながらも農家楽数が減少している辺鄙農山村地農家楽と順調な経営が伺える観光地農家楽の差異である。後者は観光地ならではの団体客の継続的利用による順調な経営がなされている。しかしながら辺鄙農山村地では, 少数民族対策という特殊事情がある場合に限り政府支援を受けられる一方, 農家楽を開設しても都市から遠く, 観光名所でもないため, 農家楽の利用者は近隣の住民が中心で, 客数は伸びず経営の衰退が著しい。

政府の支援を受けられなかった辺鄙農山村の事例からはさらに経営の困難さが伺える。以上のことから、たとえ政府補助があったとしても、周辺都市からの利用や観光客の継続的利用がない農村部では農家楽の経営は困難なことが明らかとなった。

第4に、地域住民や地元行政の積極的経営意思の存在も重要である。観光地農家楽の事例としてとりあげた芦茨村では、村委員会を中心に村民自らが市・県政府と交渉し、国家補助も利用するという村民・村行政の役割が観察された。一方、経営の衰退傾向がみられる辺鄙農村地の少数民族地域では同じように国家等からの支援を受けたにしても農家楽経営は政府の推奨による受動的な立場でのスタートであり、経営改善への要望でも政府への依存度が高い傾向が見受けられた。こうした点から経営者の自発性も重要といえるだろう。また、農家楽自体も個人経営が基本だった開始時から変化し、集落や地区の協力が必要となりつつあることが芦茨村の事例から伺える。こうした点から個別の農家楽経営のみならず、地域として郷村観光に取り組む積極的姿勢も重要といえるだろう。

第5に、都市近郊農家楽は、需要地に近く、政府支援がなくても自発的に経営を発展させている。観光地農家楽と異なり利用者は隣接都市の住民が中心で、集客に波もなく最も安定している。ただし、最もアクセスしやすい都市近郊の農家楽は、日々の利用率が高いため食材は殆ど自家産ではなく、地元の農家や市販品を仕入れている。即ち、都市近郊の農家楽は少々変わった高級レストラン化している傾向もみられ、農家への所得移転という目的からは逸脱傾向があることも否めない。

第6に、辺鄙農山村地の農家楽は、観光地、都市近郊の農家楽より利用料金として安価であり、農山村ならではの豊かな自然に恵まれ、郷村観光の本来の目的からは理想的な場所であるにも関わらず、現実の経営は非常に困難に直面している。これは本来、三農問題が発現している一般的農山村への再分配の回路としてグリーン・ツーリズムが機能していないことを意味している。浙江省全体からみれば、農家楽の経営が盛んな村は殆ど都市近郊或いは観光地周辺にあり、美しい農業景観だけではなく、地域独特の農家料理、農耕文化及び低価格をセールスポイントとして発展している（張ら、2009）。現在の中国国民は、大都市周辺といえども、欧州にみられるように「普通の農村」の景観や農山村そのものを楽しむ意識がまだ醸成されていないものと理解できるだろう。

以上のことから、三農問題の解決手段として農家楽を手段とする場合、自律的な経営は都市近郊や観光地周辺にしか生じ得ず、一般的な農村への再分配の手段として機能させるためには政府支援等の方策を検討する必要がある。こうした点から中国におけるグリーン・ツーリズム、農家楽を発展させ、かつ三農問題解決と結び付けていく方向性は以下のように考察できる。

(1) 行政の長期的・計画的支援の必要性

調査結果からは、2012年の「八項規定」の実施は全ての農家楽に大きな影響をもたらした。農家楽は通常のレストランとは素材や鮮度などの点で異なり、ある種の「高級レストラン」であり、来客への接待など点で行政関係者の利用に占める割合が大きかった。こうした

利用減少はやむを得ないものとはいえ、需要に恵まれない地域での農家楽経営を軌道に乗せるためには行政による長期的・計画的支援が必要といえよう。辺鄙農山村地農家楽が示すように、現在の段階では、農家楽の成否のカギは初期の資金援助、インフラ建設などハードの支援だけではなく、観光客の誘致、イベントの導入、観光プログラムの開発、経営管理の指導を含めた人材育成などソフト面の支援も必要である。

(2) ホスピタリティに関する認識の養成

農家楽の経営の成功に大切な要因として顧客の確保があげられる。しかし現代の消費社会においては、単に他の企業と違う製品・サービスをつくり提供しても、すぐにその目新しさ、優位性は追いつかれてしまい、製品・サービスそのものだけでは他の企業との差別化は図れなくなっており、製品・サービスが顧客に提供される際に生じる人と人との接点において顧客が感じる満足感が再購買や再利用ひいては顧客拡大に大きく影響しているといわれている（阿部，2013）。こうした点から農家楽に必要とされる「人と人との接点において顧客が感じる満足感」とはホスピタリティといいかえることができるだろう。そこにおいて重視されるのはサービスの提供者－消費者としての関係だけではなく、人と人とのふれあいであろう。事例の観光地・芦茨村では持続的な発展のために、施設・サービス水準の改善、地域全体の推進計画などが行われているが、それに加えて経営者のこうしたホスピタリティ意識を醸成することが、農家楽の持続発展に極めて大切なことといえよう。

(3) 「ありのままの農山村を楽しむ」ことのできる美意識醸成の取り組みの必要性

本調査の結果からは利便性の高い農家楽の利用が盛んであることが明らかとなった。この傾向は利便性の重要性を示していると同時にもう一つの可能性を示唆している。それは中国における都市住民のグリーン・ツーリズムに対する意識の成熟度の問題である。グリーン・ツーリズム先進地である欧州や日本においては必ずしも交通が便利な農山村だけがグリーン・ツーリズムの人気対象地ではない。それはグリーン・ツーリズムの本質が、農山村を舞台に、農山村地域の自然や景観のありのままの姿を楽しむものであるからといえるだろう。調査の結果から見れば、現在の中国では浙江省のような都市化が極めて進んでいる地域でも、農山村地域の自然や景観のありのままの姿を楽しむ意識は未だ薄い可能性が考えられる。こうした点を明らかにするために筆者は現在中国における農家楽についての意識調査を行っており、次章においてその内容を詳述する。

ともあれ、ヒアリングの調査結果と先進国におけるグリーン・ツーリズム行動との比較から、こうした仮定にある程度蓋然性があるものと判断できよう。こうした「ありのままの農山村を楽しむ意識」の希薄さが遠隔地の農家楽経営の困難さにつながっているのであるとすれば、「ありのままの農山村を楽しむ」ことのできる農山村に対する美意識を醸成することが必要といえる。日本においては、こうした意識を醸成し、都市と農山村の関係を「対立」から「融合」へと誘導するため種々の対策が行われてきた。都市住民の「食」と「農」への関心の高まりや潤いと安らぎのある生活、土地や生き物との触れ合いに対するニーズに応えるとともに、都市的地域では農地の有効利用や都市住民の農業理解の促進等を、また農山

村地域では遊休農地の解消や都市農山村交流による地域活性化などを目的としての市民農園（内藤，2011）を開設したり，農山村を舞台とする体験教育旅行，学校の教育によって子どもの頃から自然や農山村を体験できる教育的要素を取り入れた取組みがなされている（鈴木，2011）。現在の中国においても農山村に対する「美」意識を醸成し，都市と農山村の「融合」を進めるためにはこうした取組みを展開することも必要といえるだろう。

第5章 中国における大学生の農村・農家楽に対するイメージ・意識のアンケート調査

第1節 アンケート調査の概要

(1) 調査の目的

前述した先進国的なグリーン・ツーリズムが普及しつつある浙江省を研究対象として、中国におけるグリーン・ツーリズムの代表形態である「農家楽」をその立地条件から観光地農家楽、都市近郊農家楽と辺鄙農山村地農家楽に分類して、農家楽の特徴と問題点についてのヒアリング調査を行った。またその結果から、現在の中国では利便性の高い都市近郊農家楽や観光地農家楽の利用は盛んであるが、利用料金が安価で、農山村ならではの豊かな自然に恵まれ、グリーン・ツーリズムの本来の目的からは理想な場所であるはずの辺鄙農山村地農家楽の現実の経営は非常に困難に直面していることが明らかになった。グリーン・ツーリズムの本質は、農山村を舞台に農山村地域の自然や景観のありのままの姿や農山村の文化を楽しむものであるが、先行調査の結果からみれば、現在の中国では浙江省のような都市化が極めて進んでいる地域でも農山村地域の自然や景観のありのままの姿を楽しむ意識は未だ薄い可能性が考えられる。こうした点を明らかにするために、中国における農村・農家楽に対するイメージ・意識調査を実施することとした。

(2) 調査の方法

本調査では、杭州商学院の学生 265 人を対象としてアンケート調査を行った。そのうちわけとして、観光を専門とする学生 116 人、非観光専門の学生 149 人である。調査対象の杭州商学院の正式名称は浙江工商大学杭州商学院であり、浙江省の杭州市に本部を置く独立の学院である。1999 年 7 月に設立され、旅行管理（観光専門）、人力資源管理（人事）、情報センターなど 43 の課程を擁し、院生を含む在学学生数は 19,000 人である。

調査期間は 2014 年 12 月中旬から下旬まで、調査の手法は授業中、調査の内容を説明しながらアンケート用紙を配布し、その場で回答を求める形式をとった。

調査の内容に関して、具体的には 3 つに分けている。まず農村と農家楽のイメージについてである。合計 25 組の形容詞対を採用し、判定尺度は「非常に悪い」、「やや悪い」、「普通」、「やや良い」、「非常に良い」の 5 段階評価とした。調査で用いた形容詞対は白藤ら（2002）、艾海提江ら（2013）を参考にした。次は、「観光地農家楽」、「都市近郊農家楽」、「辺鄙農山村地農家楽」を 3 種類の中で最も行きたい農家楽についてである。最後は農家楽の利用実態についてである。その中で、農家楽への関心度から行ったことがある A タイプと行ったことがない B タイプを分けた。A タイプに対しては、農家楽の行き先と体験した内容を調査したが、B タイプに対しては、体験の希望があるか、体験したくない理由、体験したい内容を調査した。またタイプを問わず、農家楽を体験する際の同行者、宿泊日数の希望、受けられる消費額、農家楽を体験する際の希望条件及び今後の農家楽へ期待をも調査項目とした。

アンケート調査の対象者に関しては、中国の政治的事情により一般の農家楽利用者を対象とするアンケート調査の実施は難しいため、今後の農家楽利用者と期待される青年層、と

りわけ従来型のマス・ツーリズムでなく、新規な旅行形態としてのオルタナティブ・ツーリズムとしてのグリーン・ツーリズムの情報に触れやすく、またそうした物事に関心を持ちやすいと考えられる大学生にアンケート調査への協力を依頼することとした。また先行調査の結果から、現在多くの中国国民はグリーン・ツーリズムに対する意識の成熟度が未だ低いと推定されたが、観光に関する専門教育を受け、専門知識を持つ学生は一般の学生と異なる意識をもつとの仮定の下に、今回の調査では観光専門の学生と非観光専門の学生を区分し実施した。

統計解析はピアソンのカイ二乗検定を利用し、有意水準の α を0.05として有意差を判断した。また項目別の変数間の関連性を調べるため、残差分析を行った。

第2節 回答者全員の農村・農家楽に対するイメージ及び農家楽の利用実態

①農村・農家楽に対するイメージ

調査対象の全員は農村・農家楽に対して良いイメージを持っている傾向が見られる(表5-1)。農村に対しては、良いイメージを持っている人の割合は71.7%、悪いイメージを持っている人の割合は24.5%であった。その中に「やや良い」イメージを持っている人が最も多く見られる。一方、農家楽に対するイメージの場合では、良いイメージの割合は76.2%に対して、悪いイメージの割合は16.6%となっていた(図5-1)。農村に対するイメージと農家楽に対するイメージの間で統計的に有意な差があった。調査対象の全員は農村より農家楽に対するイメージの方がややよい傾向があきらかとなった。

表5-1 回答者全員農村・農家楽に対するイメージ

単位 (%)	非常に悪い	やや悪い	普通	やや良い	非常に良い	確率 (p)
農村に対するイメージ	24.5%		3.8%	71.7%		※
	2.3%	22.3%	3.8%	56.2%	15.5%	
農家楽に対するイメージ	16.6%		7.2%	76.2%		-
	0.8%	15.8%	7.2%	54.0%	22.3%	
χ^2 統計量	11.0177 確率 $p < 0.05$ 有意差が認められる					

注：確率 (p) の範囲はカイ 2 乗分布表に従い、対応する自由度及び χ^2 値によって読み取られる(以下同じ)。「※」印は $p < 0.05$ 、有意差の見られた項目で、「-」印は $p > 0.05$ 、有意差のない項目である(以下同じ)。

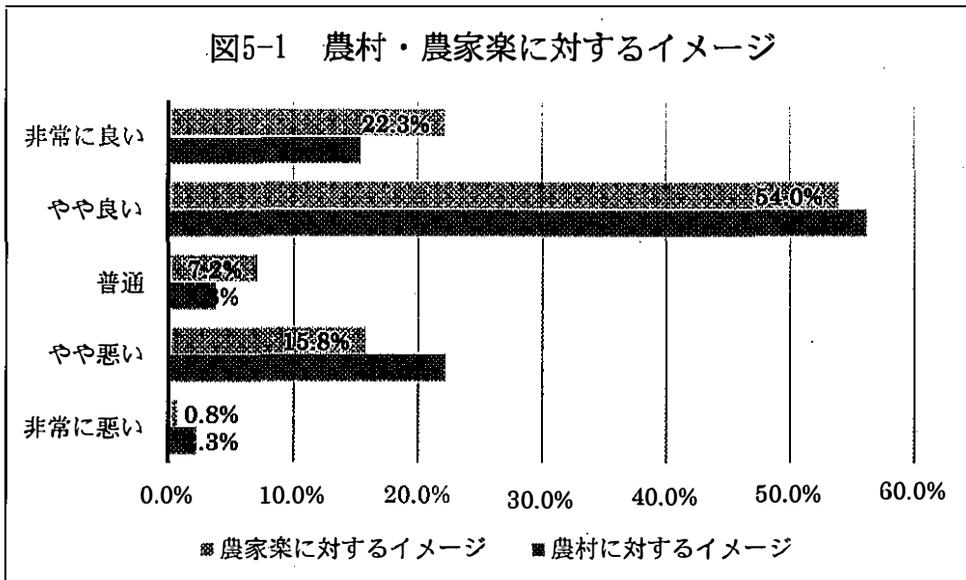


図 5-1 回答者全員が農村・農家楽に対するイメージ

②農家楽への訪問経験

図 5-2 によると、全員農家楽へ行ったことがある人は 82%を占め、行ったことがない人は 18%しかなかった。農家楽は新しい観光形態として、国民からの関心度が高いと判断できる。

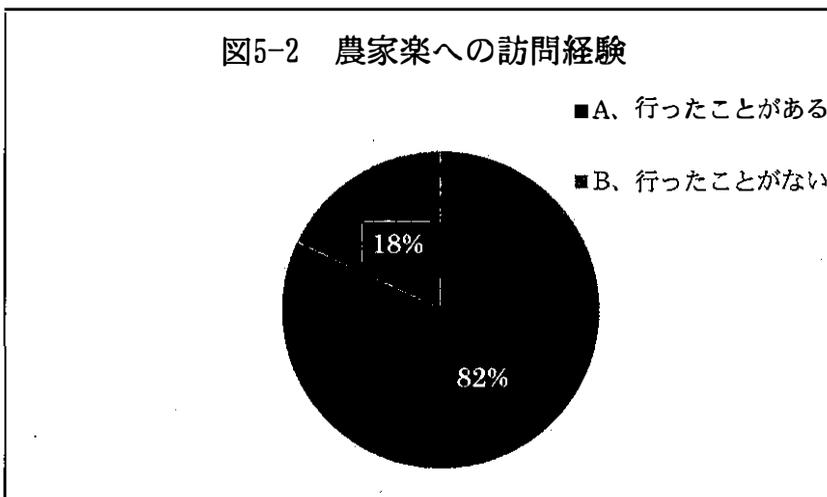


図 5-2 回答者全員が農家楽への関心度

③最も行きたい農家楽の種類

回答者全員の最も行きたい農家楽の順位をみると、観光地農家楽が 63%を占め、最も人気であった。次の都市近郊農家楽は 23%であり、2 番目となっていた。辺鄙農山村地農家楽の割合は最も低かった。三種類の農家楽 ($P=2.09E-21$) の間で統計的に有意差があった(図 5-3)。

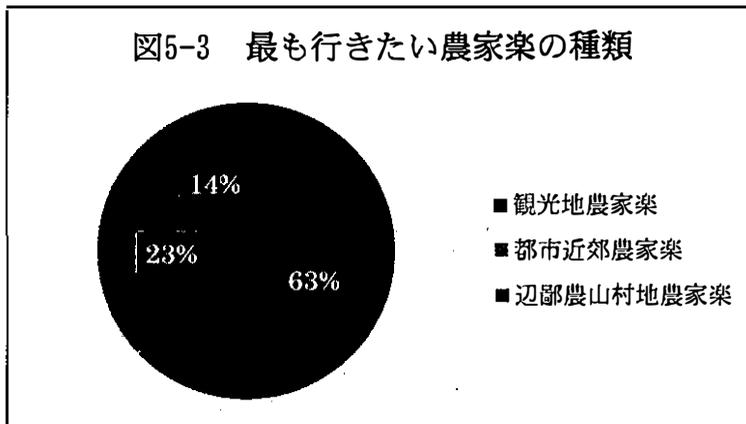


図 5-3 最も行きたい農家楽の種類

次の項目④と項目⑤は、行ったことがある人をAタイプ、行ったことがない人をBタイプと分けて分析した。

④Aタイプ—行ったことがある人

ア、農家楽の行き先

農家楽に行ったことがあるAタイプの人に行き先を距離的な面から分類し尋ねたところ、省内へ行った人の割合が85%と最も高く、次は省外13%で、国外は2%であった。郷村性、家庭性と娯楽性の特徴を持つ農家楽の行き先に関しては、利用者が最も行きやすい省内を選んでいることが理解できる（図5-4）。

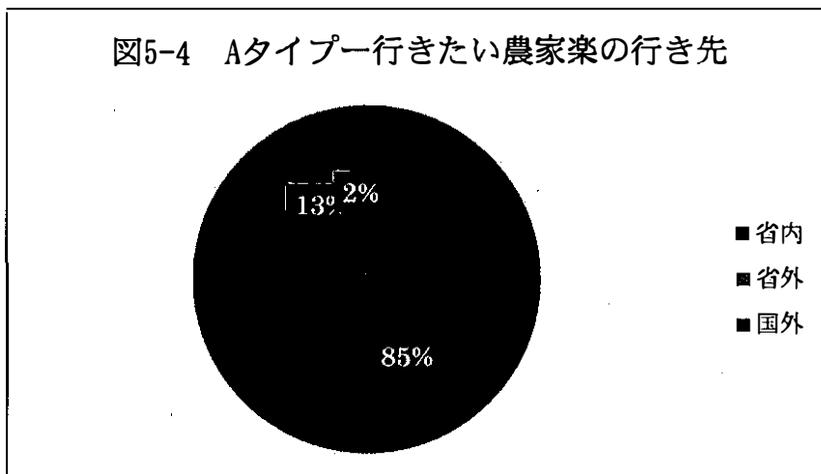


図 5-4 回答者Aタイプが行きたい農家楽の行き先

イ、農家楽で体験した内容

農家楽で体験した内容を見てみると、「農家レストランで地元の食材を味わう」ことが最も多く選ばれ、その次は「自然の中での森林浴、トレッキング活動などの体験活動」と「トランプ、麻雀」であり、続いては「漁獲、魚釣り」「自転車で観光」などの体験であった。多く

の場合、農家楽を体験する際に、自然や農村の文化とふれあいがある体験内容が選択されていた（図 5-5）。

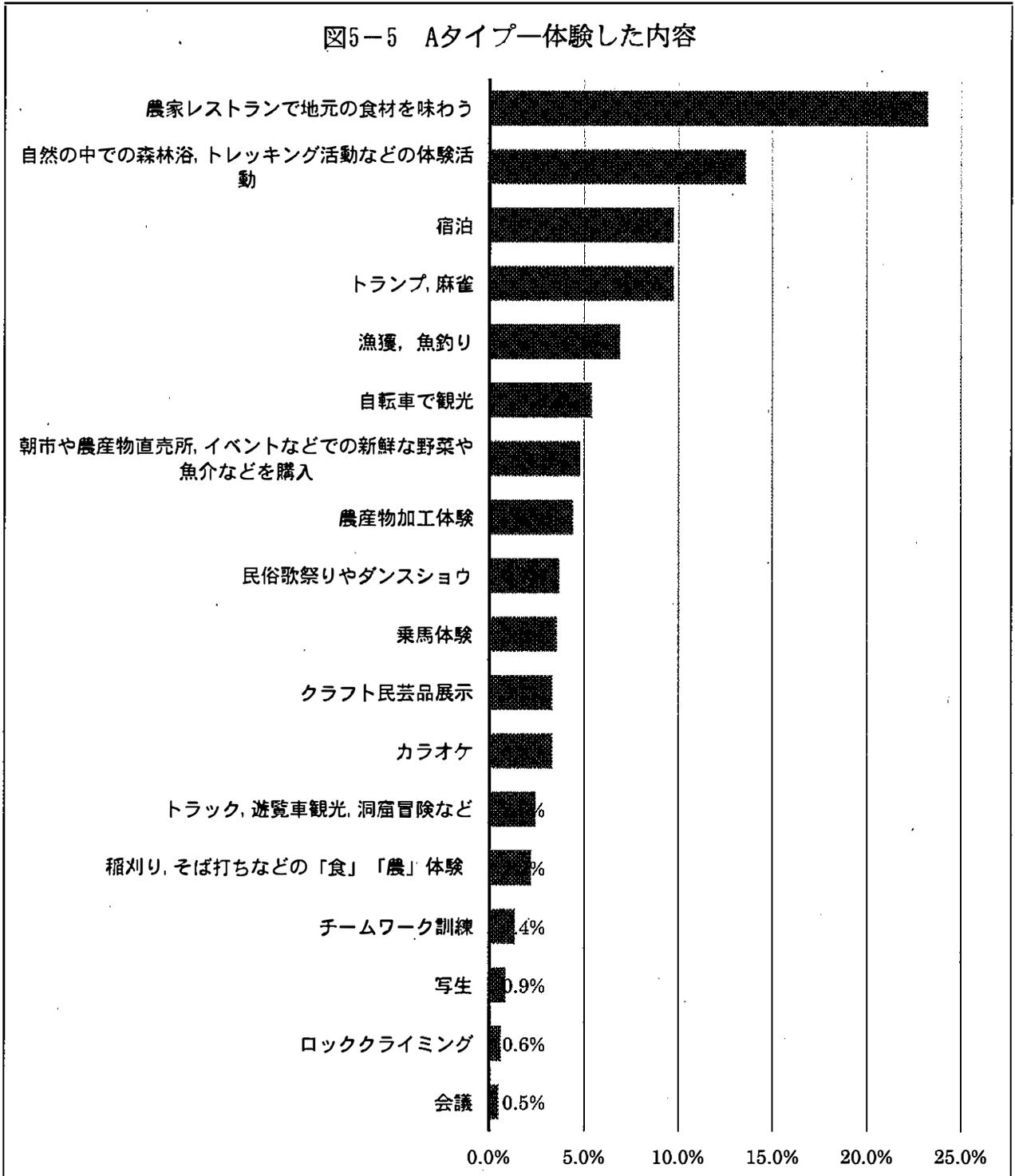


図 5-5 回答者 A タイプが体験した内容

⑤Bタイプ—行ったことがない人

ウ、農家楽への体験希望

農家楽へ行ったことがない B タイプの人は、農家楽への体験希望を尋ねたところ、69.5%の人が体験してみたいが、30.5%の人はあまり体験してみたいと思わないか参加したくない(図 5-6) との結果となった。

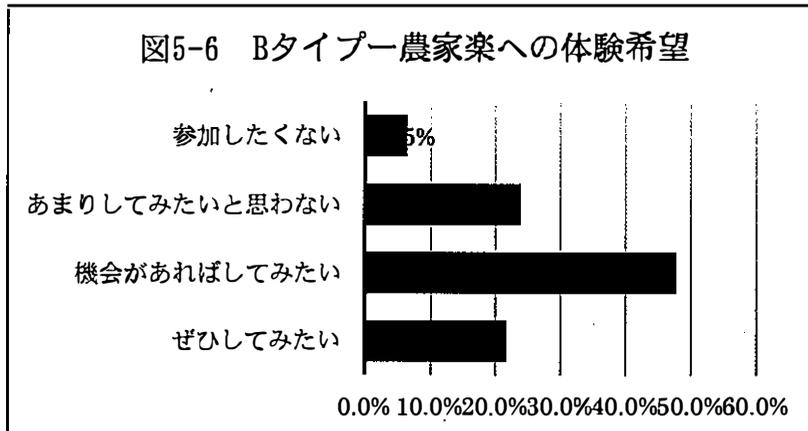


図 5-6 回答者全員の B タイプが農家楽への体験希望

エ、農家楽を体験したくない理由

農家楽へ行ったことがない B のタイプの人の中で、農家楽に体験したくない理由を聞いてみると、「費用が高い」の割合が最も高く、その次は「情報を知らなかった」, 「交通不便で行く手段がない」となっていた。ここから、現在中国の農家楽はレベルがそれぞれであり、料金の基準もないため、費用に不安を感じる人が少なくない状況や、「情報を知らなかった」ことから、農家楽の宣伝不足の現状も伺われる(図 5-7)。

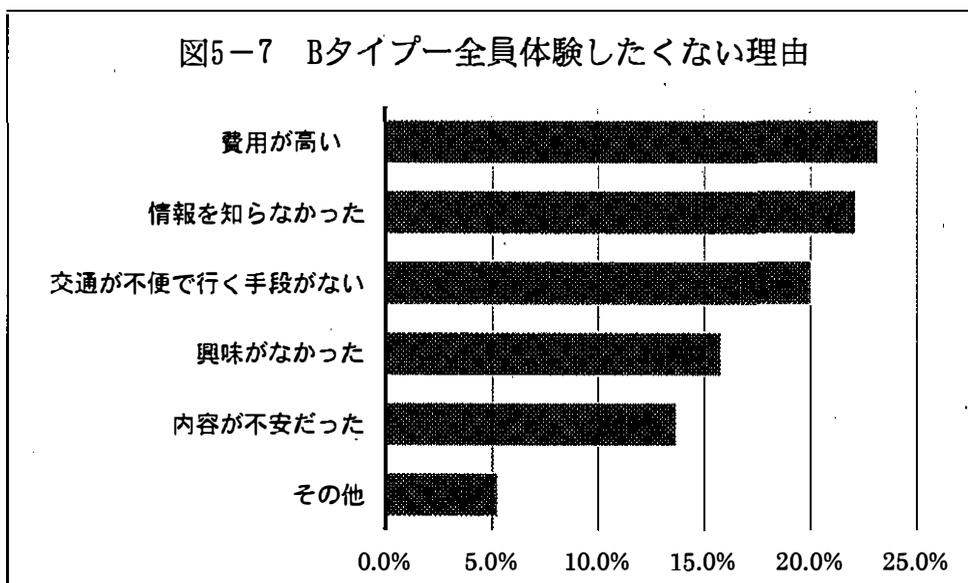


図 5-7 回答者 B タイプが農家楽を体験したくない理由

オ、農家楽の体験内容への希望

農家楽へ行ったことがないBタイプの方が、最も体験したい内容は「地域の特産物を食べる」であった。ここから、現在中国の農家楽は農家レストランとして広く認知されているのではないかと思われる。その次は「温泉」、「登山、ハイキングなどで鍛える」、「加工体験」などの体験である。「教育研修など」、「地域の人々との交流」の割合は最も低かった（図5-8）。

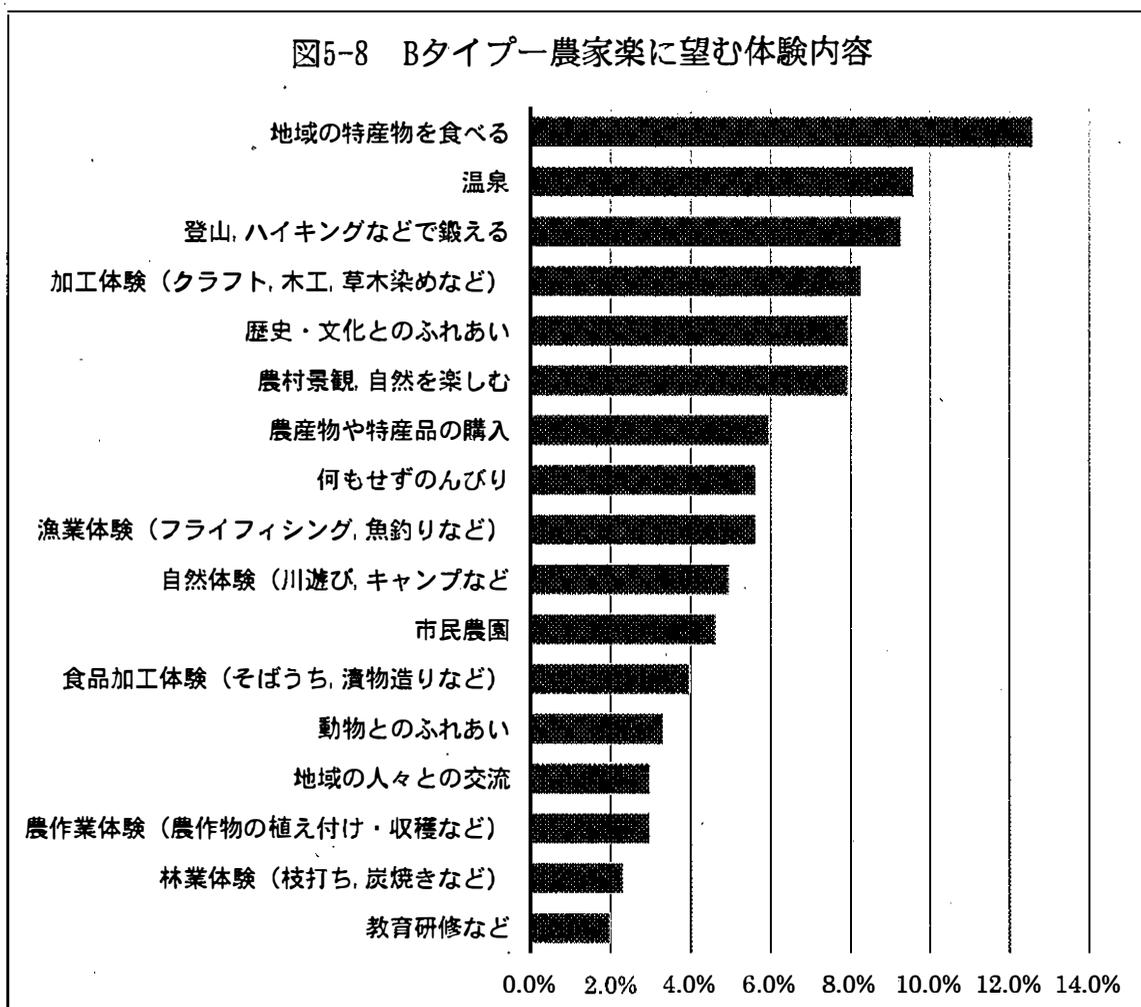


図5-8 回答者Bタイプが農家楽に望む体験内容

⑥同行したい人、グループ

農家楽を体験する際の同行者としては、「家族・親戚」の割合が41.0%で最も多くを占めた。その次は「カップルのみ」であり、26.1%となっていた。新しい観光形態としての農家楽は、安価かつ都市から遠くない、休日に出かけやすいなどの特徴を持っているため、家族に受け入れられやすい傾向が見られる（図5-9）。

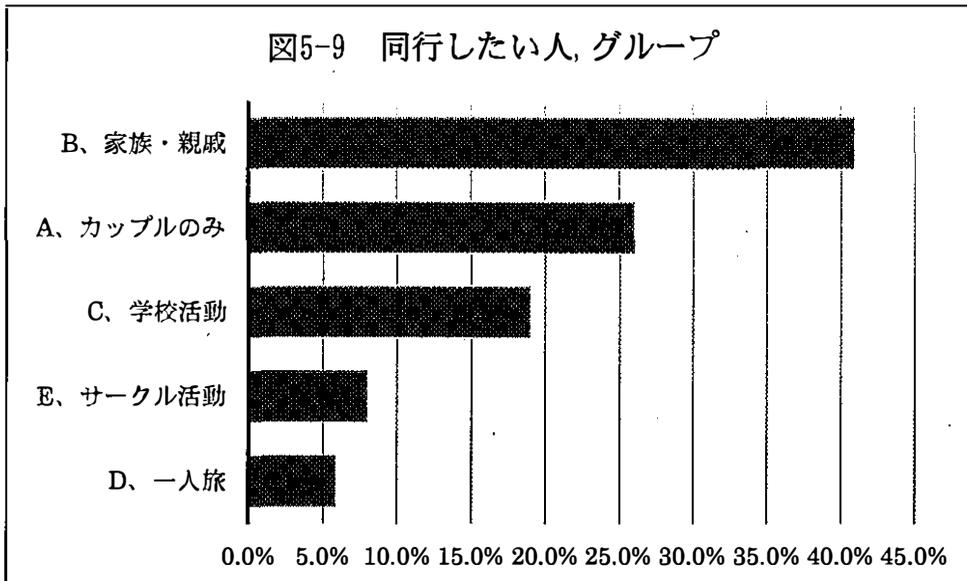


図 5-9 農家楽を体験する際に同行したい人, グループ

⑦希望する宿泊日数

農家楽を体験する際に、日帰りの利用者は 44.4% を占めていた。その次は 1 泊 2 日の短期滞在で 41% と同程度であった。2 泊 3 日以上の割合は 14.9% しかなかったが、現在中国の農家楽は短期滞在が主流となっていることが伺われる (図 5-10)。

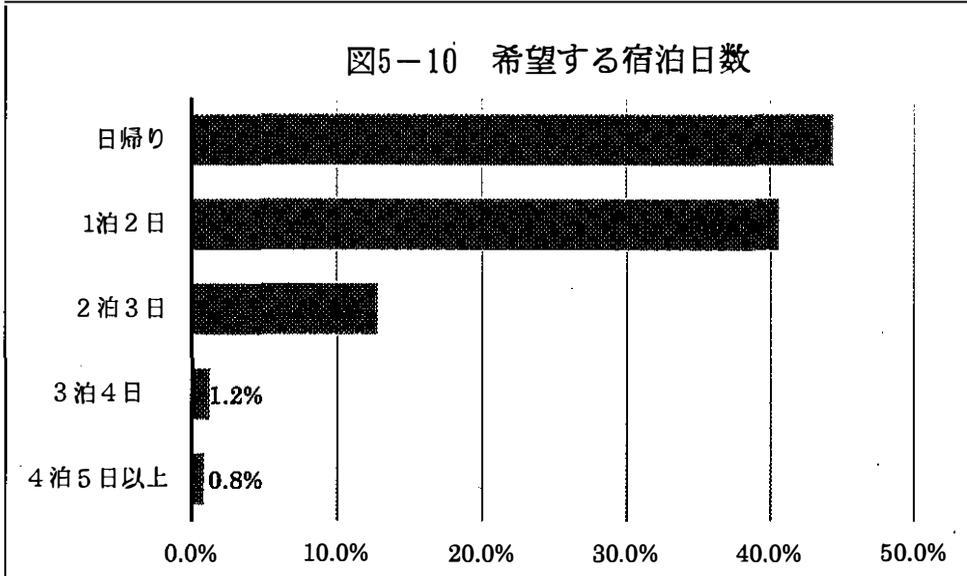


図 5-10 希望する宿泊日数

⑧受けいられる消費額

受けいられる消費額をステージスの公式によって 9 階級に区分した (表 5-2)。階級の幅は 217 元となっている。表 5-2 と図 5-11 を合わせてみれば、「50 元以上 294 元未満」の割合が最も高く、その次は「294 元以上 538 元未満」であった。「782 元以上 1026 未満」は

三番目となっていた。農家楽を体験する際に、「安価の料金」が求められる傾向が見られる。また「782元以上 1026未満」のやや高い選択も見られるが、これは長期的な宿泊への希望をも含めていると考えられる。

表 5-2 受けいれられる消費額のステージス階級表

ステージスの公式による階級：9			
階級の幅：217（元）（約¥4094）			
	階級値	度数	相対度数
50元以上 267元未満 (¥943.5~¥5038.2)	158.5元 (¥2990.9)	14	0.438
267元以上 484元未満 (¥5038.2~¥9133.1)	375.5元 (¥7085.7)	4	0.125
484元以上 701元未満 (¥9133.1~¥13227.9)	592.5元 (¥11180.5)	4	0.125
701元以上 918元未満 (¥13227.9~¥17322.7)	809.5元 (¥15275.3)	1	0.031
918元以上 1135元未満 (¥17322.7~¥21417.5)	1026.5元 (¥19370.1)	5	0.156
1135元以上 1352元未満 (¥21417.5~¥25512.2)	1243.5元 (¥23464.9)	0	0
1352元以上 1569元未満 (¥25512.2~¥29607.0)	1460.5元 (¥27559.6)	1	0.031
1568元以上 1786元未満 (¥29607.0~¥33701.8)	1677.5元 (¥31654.4)	0	0
1786元以上 2003元未満 (¥33701.8~¥37796.6)	1894.5元 (¥35749.2)	3	0.094

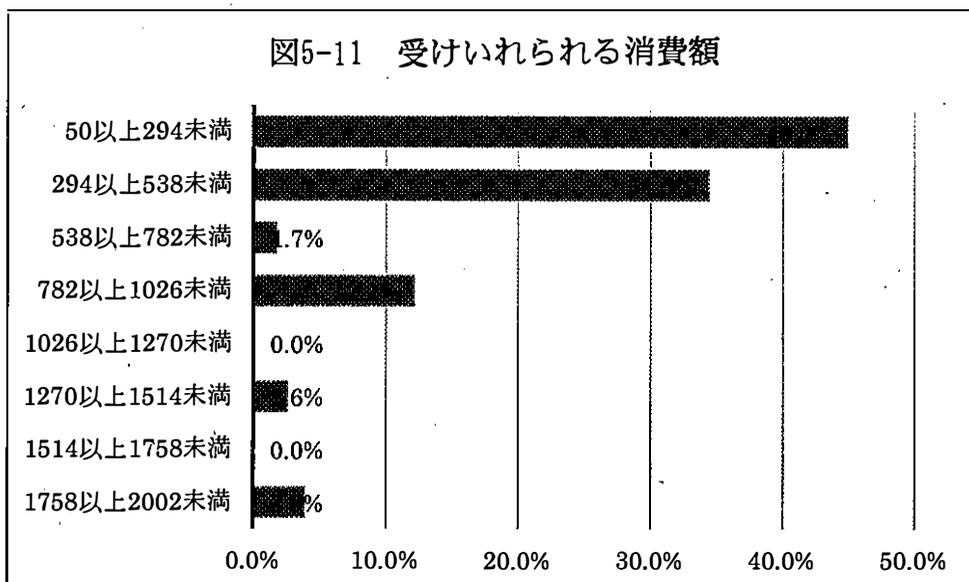


図 5-11 受けいられる消費額

⑨農家楽を体験する際の希望条件

農家楽を体験する際の希望条件を見てみると、「気候など自然的な快適性」割合が15.8%で、最も多く占められるが、その次は「体験・サービス」の充実14.8%、「安価の料金」と「周辺の観光施設の充実」は12.6%で、「目的地までの距離が近いこと」は11.7%という順番になっていた（図5-12）。

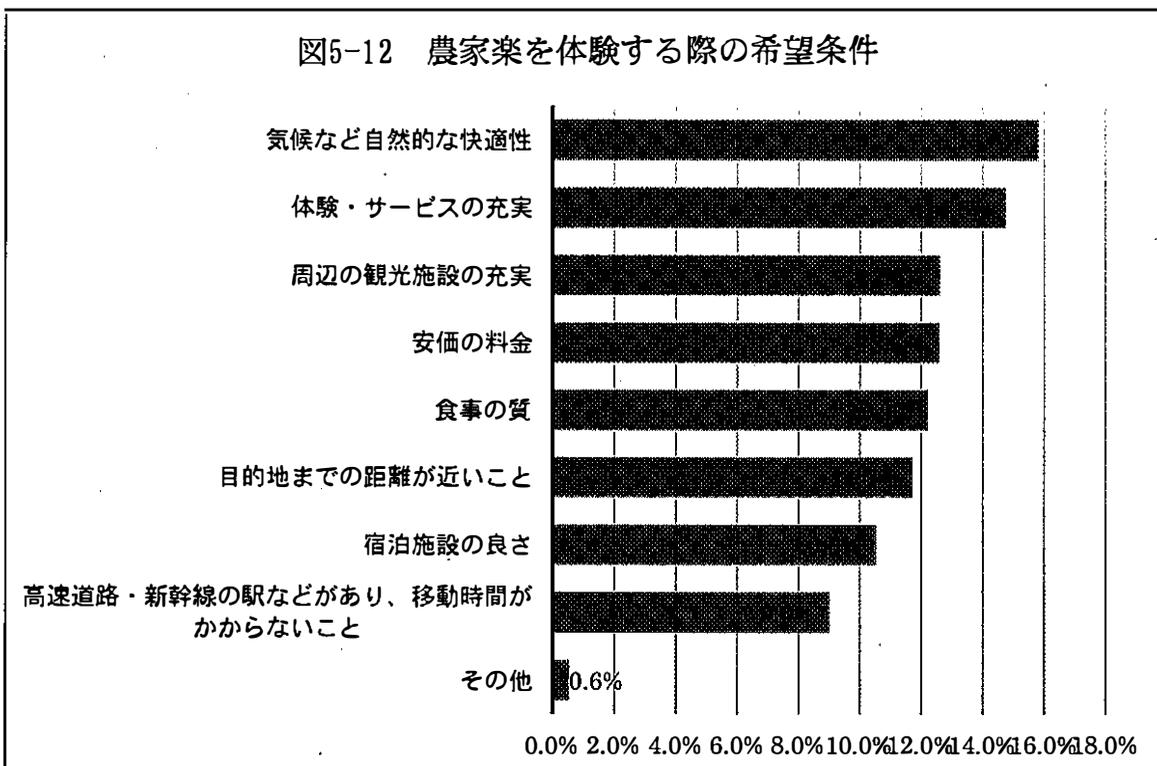


図 5-12 農家楽を体験する際の希望条件

⑩農家楽への今後の期待

今後の農家楽への利用意向からみれば、「体験メニューが類似、単一で面白くない」という不満が最も多かった。その次は「体験施設の整備」への意向は17.4%で、二番目となっていた。現在中国の農家楽の利用者はまだ欧州のように農家でゆっくり休暇をするより、体験内容の豊かさや施設の水準への希望が大きいことが伺われた（図5-13）。

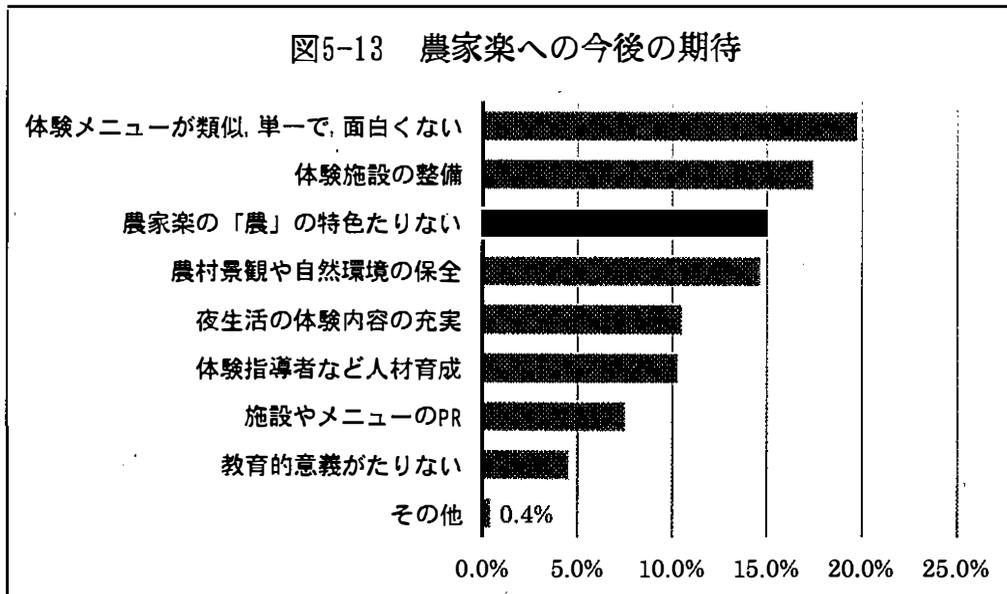


図5-13 農家楽への今後の期待

回答者全員の農村・農家楽に対するイメージ及び農家楽の利用実態の結果を以下のよう
にまとめることができる。

ア：全員農村・農家楽に対してよいイメージを持っている人が多かった。そしてその中で
8割以上の回答者は農家楽を体験したことがあり、農家楽への関心度が高いといえ
る。しかし、最も行きたい農家楽の種類に関しては、ありのままの農村風景をもって
いる辺鄙農山村地農家楽は都市近郊農家楽や観光地農家楽よりアクセスが悪いなど
のため、最も人気が低かった。現在中国の若者は農家楽を選ぶ際に、目的地までの行
きやすさを考えている一方、日本やヨーロッパのように本当の農村に出向かいて、
「農」を楽しもうという意識もいまだ高くないものと判断できる。

イ：全員農家楽を体験する際に、家族と一緒に参加する割合が最も高かった。そして短期
滞在かつ安価の料金が最も希望されるため、これからの農家楽は短期滞在ができる
安価なファミリープランなど手軽さをウリにした滞在プログラムの提供が求められ
る。

ウ：農家楽を体験する際の希望条件に関しては、気候と自然の快適性が最も重視され、そ
の次は「体験・サービス」の充実と「安価な料金」であった。自然が豊かな農村地域

で、体験メニューが豊富で、かつ料金も安いことは農家楽利用者の希望であることが分かった。また農家楽の今後の希望をみると、体験メニューが単一、体験施設の整備への意向の割合が高かった。現在中国の国民は農家楽を利用する際に、農家楽の立地環境に加えて体験の多様性を重視する傾向が顕著である。

エ：農家楽へ行ったことがあるAタイプの方は、行き先の中で省内の割合は国内、国外より最も高かった。行きやすさや目的地までの距離などの条件も農家楽への志向に大きく影響を及ぼしていることが明らかとなった。また体験した内容を見ると、農家レストランで地元の食材を味わうことが最も多く選ばれた。一方、農家楽へ行ったことがないBタイプの方の中で、およそ3割の方は農家楽を体験したくないことが分かった。その理由を見てみると、費用の高さや交通不便などの割合が高かった。この点から体験内容と費用の関係の明確化や正確な情報提供、交通条件の改善などにより利用者をさらに増加させうる可能性が伺われる。また、7割の方は農家楽を体験してみたいが、希望の体験内容を見てみると、Aタイプと同じく、農家レストランで地元の食材を味わう割合が最も高く占めていた。ここから、現在の中国では農家楽は農家レストランとして広く認められている傾向が伺われる。

第2節 観光専門と非観光専門の学生の農村・農家楽へのイメージ及び農家楽の利用実態の差異

観光専門の学生と非観光専門の学生の間で農村・農家楽へのイメージ及び農家楽の利用実態の差異についての検定結果を表5-3に示す。表5-3の結果をみると、調査項目の「農家楽を体験する際の希望条件」以外の各項目は有意差がないことが分かった。「農家楽を体験する際の希望条件」には、「安価な料金」、「体験・サービスの充実」、「気候など自然的な快適性」、「目的地までの距離が近いこと」、「周辺の観光施設の充実」、「高速道路・新幹線の駅などあり、移動時間がかからないこと」、「食事の質」、「宿泊施設の良さ」、「その他」の9つの選択肢がある。これらの条件に対して、観光専門の学生と非観光専門の学生間に有意な差が認められた。

表 5-3 農村・農家楽に対するイメージ及び農家楽の利用実態（観光専門と非観光専門の学生）

調査項目	χ^2 統計量	確率 (p)
農村に対するイメージ	8.9407	—
農家楽に対するイメージ	5.2937	—
農家楽への関心度	5.8823	—
専門別且つ A タイプ—行ったことがある人		
①行き先	2.8374	—
②体験した内容	12.2509	—
専門別且つ B タイプ—行ったことがない人		
③体験希望	6.4421	—
④体験したくない理由	2.5185	—
⑤体験内容への希望	9.0896	—
同行者	0.8809	—
宿泊日数	3.4108	—
受けられる消費額	9.3352	—
* 農家楽を体験する際の希望条件	137.026	※
農家楽への推進意向	6.7164	—

※表はピアソンのカイ二乗検定を利用した結果

有意差がある「農家楽を体験する際の希望条件」の9つの項目別に検定してみると、観光専門の学生は非観光専門の学生より、「B, 体験サービスの充実」($p=0.0049$), 「C, 気候など自然的な快適性」($p=0.0005$), 「D, 目的地までの距離が近いこと」($p=0.0085$)と「H, 高速道路・新幹線の駅などがあり、移動時間がかからないこと」($p=0.0010$)をより重視している傾向が見られる。すなわち、観光専門の学生は気候など自然的な快適性を最も優先的に考え、その次は体験サービスの充実、目的までの距離、移動時間がかからないことを優先順位としていることがあきらかとなった。一方、非観光専門の学生は観光専門の学生より、「A, 安価な料金」($p=0.0021$)を最も重視していることがあきらかとなった(図 5-14) (*をつけている項目は有意差がある項目である。以下同じ)。

図5-14 農家楽を体験する際の希望条件

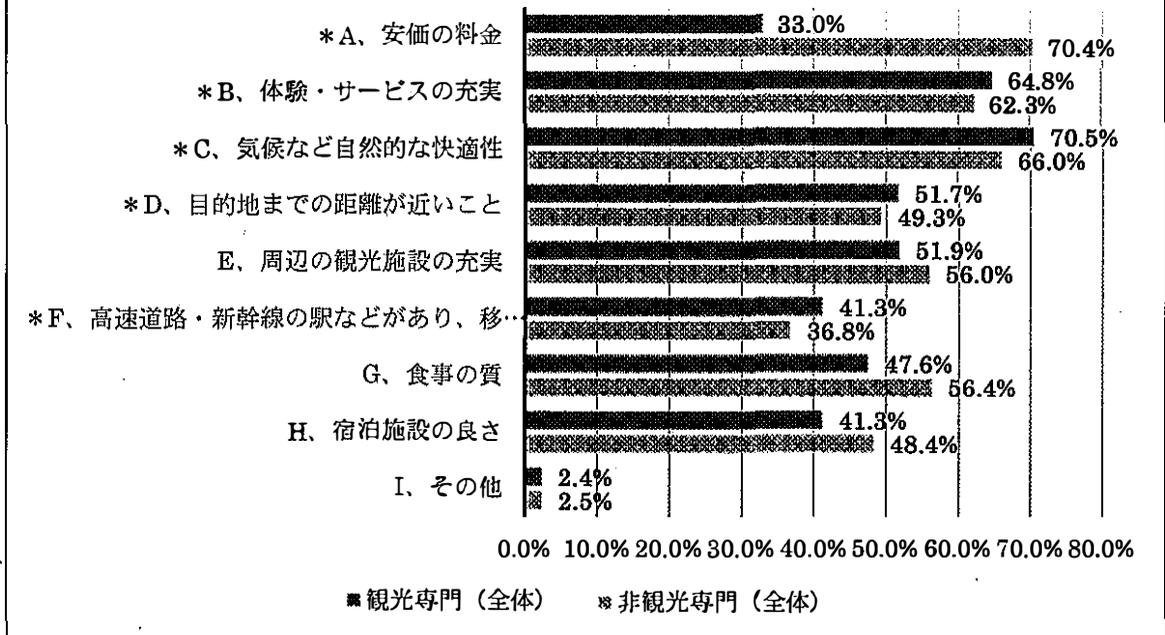


図5-14 観光専門と非観光専門の学生が農家楽を体験する際の希望条件（ピアソンのカイ二乗検定を利用した結果）

観光専門の学生と非観光専門の学生が農村・農家楽へのイメージ及び農家楽の利用実態の結果を以下のようにまとめることができる。

ア：観光専門の学生は非観光専門の学生より、体験サービスの充実、気候など自然的な快適性、目的地までの距離が近いことと高速道路・新幹線の駅などがあり、移動時間がかからないことを重視している傾向から、観光専門の学生は観光地農家楽への強い希望が見られる。一方、非観光専門の学生は観光専門の学生より安価の料金を重視している。即ち農家楽を体験する際に、観光知識を持っていない普通の学生は料金の安さだけを考えていることが明らかとなった。

イ：全体から見れば、観光専門の学生と非観光専門の学生の間には、観光知識を持っているかどうかに関わらず、農家楽を体験する際の希望条件以外意識と利用実態に差がなく、あるがままの農山村を楽しむようなグリーン・ツーリズムらしさが特別に意識されていない状況が浮き彫りとなった。これは現在の中国の専門的観光教育では、グリーン・ツーリズムに関する知識を十分に伝え切れていないと状況にあると思われる。

第3節 辺鄙農山村地農家楽を希望する人と希望しない人の農村・農家楽へのイメージおよび農家楽の利用実態

三農問題が発現している一般的農山村への富の再分配の方法として、農家楽を通じた辺

鄙農山村地農家楽の発展は極めて重要な役割をもつと考えられるため、辺鄙農山村地農家楽利用の希望者を増やすよう、マーケティングを行う必要があると考えられる。そこで現時点での辺鄙農山村地農家楽利用を希望する人と希望しない人の間に、農村・農家楽へのイメージ及び農家楽の利用実態について差がないかを検定した結果、「農家楽を体験する際の希望条件」という項目にのみ有意差がみられた（表 5-5）。

表 5-4 農村・農家楽に対するイメージ及び農家楽の利用実態（辺鄙農山村地農家楽を希望する人と希望しない人）

調査項目	χ^2 統計量	確率 (p)
農村に対するイメージ	6.4237	—
農家楽に対するイメージ	3.0523	—
農家楽への関心度	0.2441	—
A タイプ—行ったことがある人		
①行き先	3.0109	—
②体験した内容	18.8733	—
B タイプ—行ったことがない人		
③体験希望	1.0917	—
④体験したくない理由	3.2561	—
⑤体験内容への希望	12.4855	—
同行者	5.5855	—
宿泊日数	2.2308	—
受けられる消費額	6.1028	—
農家楽を体験する際の希望条件	35.1871	※
農家楽への推進意向	6.2920	—

※表はピアソンのカイ二乗検定を利用した結果

「農家楽を体験する際の希望条件」の各項目を更に検定した結果からみると、辺鄙農山村地農家楽を希望する人は希望しない人より、「A, 安価な料金」($p=7.2751E-0$)を重視している($p=7.2751E-0$)ことが分かった。一方、辺鄙農山村地農家楽を希望しない人は希望する人より、農家楽を体験する際に「G, 食事の質」($p=0.0037$)、「H, 宿泊施設の良さ」($p=0.0360$)と「I, その他」($p=0.0042$)という順番で重視されていることが分かった（図 5-15）。

図5-15 農家楽を体験する際の希望条件

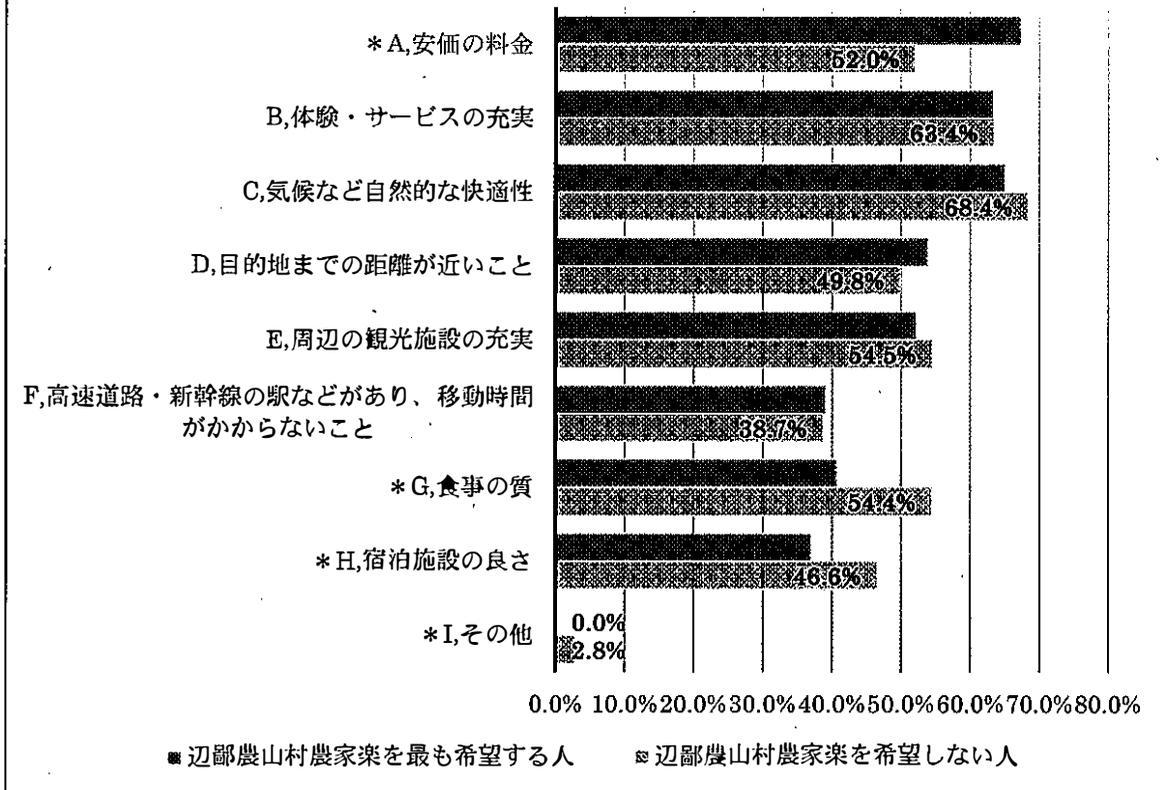


図 5-15 辺鄙農山村地農家楽を希望する人と希望しない人が農家楽を体験する際の希望条件 (ピアソンのカイ二乗検定を利用した結果)

また、辺鄙農山村地農家楽を希望する人と希望しない人の間に、農村・農家楽に対するイメージ及び農家楽の利用実態に関する全ての調査項目の選択項目を残差分析したところ、農家楽の利用実態の中では、辺鄙農山村地農家楽を希望する人と希望しない人且つ A タイプの人の間に、体験した内容の「N, ロッククライミング」群が統計的に有意差が認められた。詳しくみると、辺鄙農山村地農家楽を希望する A タイプの人は、「A, 農家レストランで地元の食材を味わう」、「B, 宿泊」、「E, 自然の中での森林浴, トレッキング活動などの体験活動」、「M, 自転車で観光」、「O, 漁猟, 魚釣り」などの希望が多かった (図 5-16)。辺鄙農山村地農家楽を希望する人は希望しない人より宿泊や自然との触れ合いが多い体験内容を希望している傾向が見られる。

図5-16 Aタイプ体験した内容

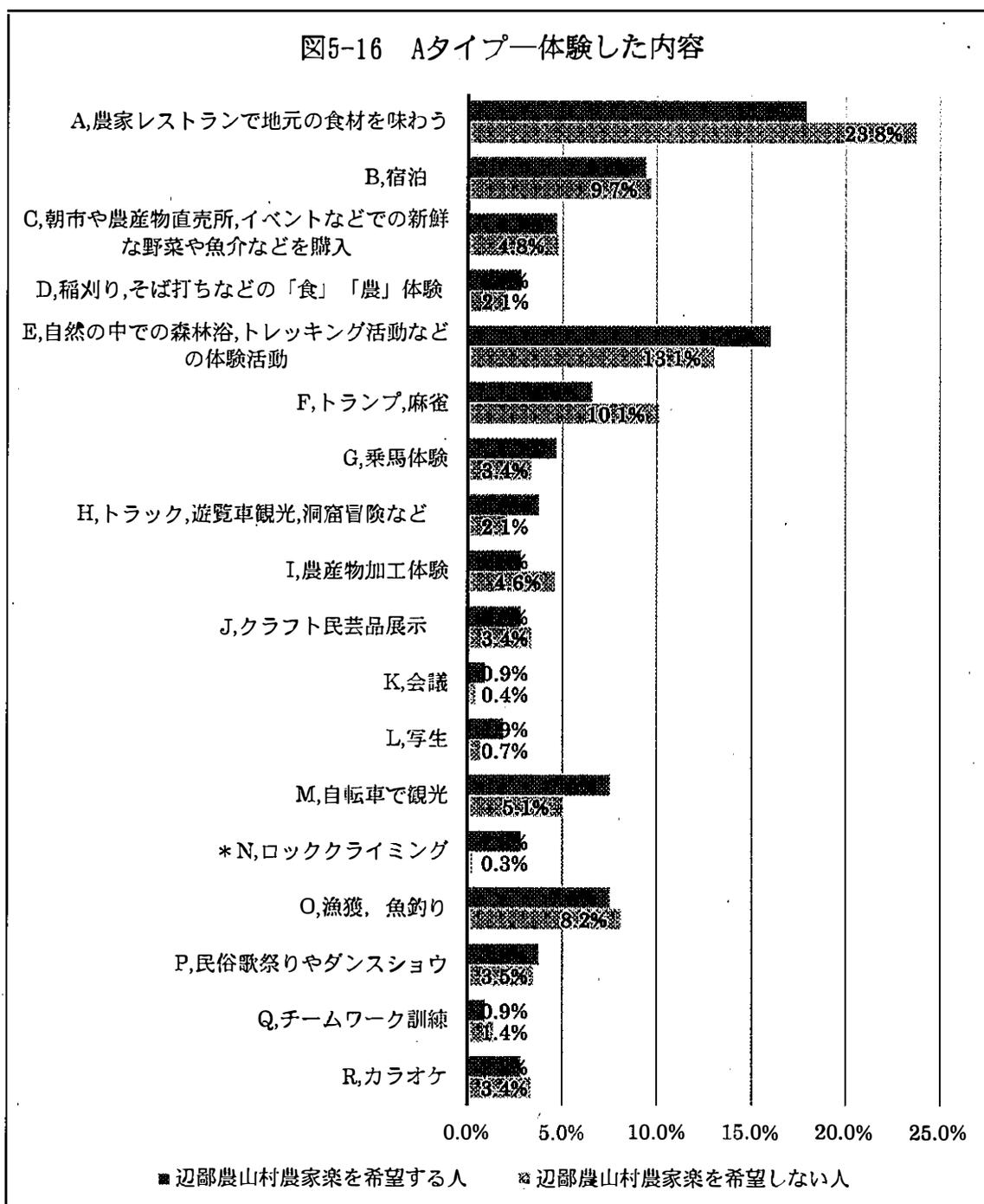


図 5-16 辺鄙農山村地農家楽を希望する人と希望しない人の A タイプが体験した内容

そして、辺鄙農山村地農家楽を希望する人と希望しない人の間に宿泊日数の希望の「2泊3日」群も有意差が認められた。宿泊日数の希望に関しては、図 5-17 に示す。図 5-17 からみると、辺鄙農山村地農家楽を希望する人は、希望しない人より「日帰り」や「1泊2日」の短期滞在がやや少なかったが、「2泊3日」($p=0.0356$)以上の長期滞在はやや割合が高い傾向が見られた。

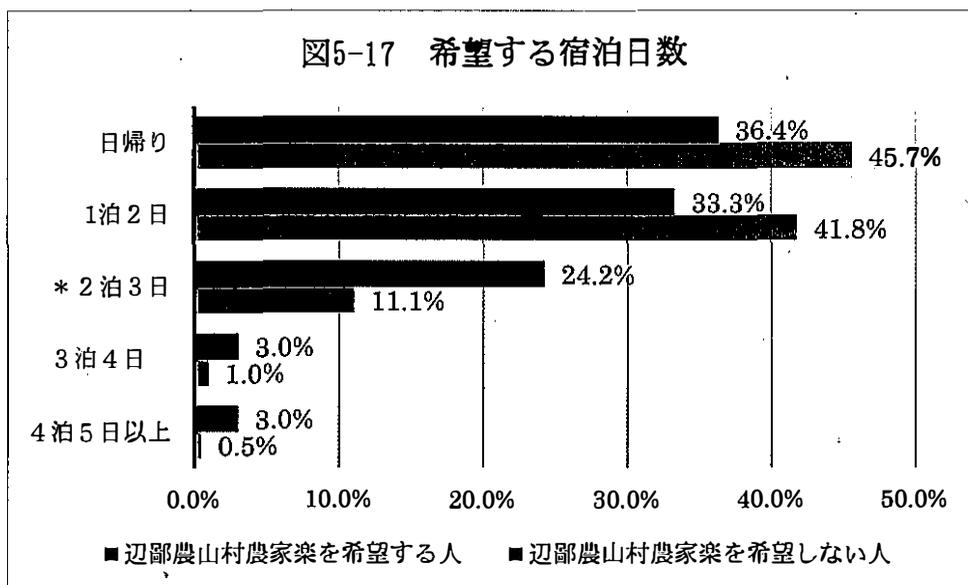


図 5-17 辺鄙農山村地農家楽を希望する人と希望しない人の希望する宿泊日数（ピアソンのカイ二乗検定を利用した結果）

辺鄙農山村農家楽を希望する人と希望しない人の農村・農家楽へのイメージ及び農家楽の利用実態の結果を以下のようにめとめることができる。

ア：辺鄙農山村地農家楽を希望する人は料金の安さを重視している一方、希望しない人は食事の質、宿泊施設の良さとその他を重視していた。ここから、現時点の辺鄙農山村地農家楽は利用者を増やすため、料金の安さを確保する一方、食事の質や宿泊施設の改善を検討する必要があると思われる。

イ：農家楽を体験する際の希望条件では、辺鄙農山村地農家楽を希望する人は希望しない人よりロッククライミングを好む傾向が見られる。辺鄙農山村地の農家楽は現地の自然環境を利用して、ロッククライミングのようなスポーツ体験などを特徴的な体験を用意する必要があると思われる。また、滞在日数に関しては、辺鄙農山村地農家楽を希望する人は希望しない人より2泊3日の割合が高かった。中国では、2月の春節と10月の国慶節は一週間の休暇を除いて、全ての祝日は3日間となっている。辺鄙農山村地農家楽を希望する人は祝日に農家楽で過ごす傾向が希望しない人より高かった。そして全体からみれば、辺鄙農山村地農家楽を希望する人の長期滞在の意向も見られる。

第4節 アンケート調査のまとめと考察

アンケートの結果から明らかになったことは以下ようになる。

まず第1に、現在中国では、多くの若者たちが農村・農家楽に対して良いイメージを持っている。そして、農村より農家楽に対するイメージの方がやや良い傾向も見られた。都市と農村格差解消を目指した施策である新農村建設の一環としての「美しい農村づくり」は全国的にさかんとなっており、都市住民の健康志向と相まって、農村生活や農業体験、農産物の

品質などへの関心が非常に高まってきている。これらの「農」に対する需要は農家楽の持続発展に極めて大切な条件と考えられる。

第2に、しかしながら、3種類の農家楽の利用実態を調査した結果、周辺観光名所がある観光地農家楽か交通便利かつ短距離の都市近郊農家楽の利用は盛んであるが、「農」の特色が非常に強く、自然が豊かな辺鄙農山村地農家楽の利用は最も少なかった(方ら, 2015)。それは中国における都市住民のグリーン・ツーリズムに対する意識の成熟度の問題である。著者らの農家楽に関するヒアリング調査に基づく研究結果では、現在の中国では浙江省のような都市化が極めて進んでいる地域でも農山村地域の自然や景観のありのままの姿を楽しむ意識は未だ未成熟である可能性が示唆されたが(方ら, 2015)、今回の意識調査をみれば、都市住民の農への潜在的ニーズの高さは示されても、実際に本当の農村に出向いて、「農」を楽しもうという意識はけっして高くはない。つまり、農村や農産品への関心は高まってきているが、そのことと農山村を実際に訪れることには、まだ大きな隔りがあるといえよう。

第3に、観光専門の学生と非観光専門の学生の間に、農村・農家楽に対するイメージ及び農家楽の利用実態を検定したところ、「農家楽を体験する際の希望条件」でしか差が認められなかった。中国では、90年代以降の農業と観光業の発展及び農村環境の改善に伴い、グリーン・ツーリズムが次第に発展してきている(藤田ら, 2011)。極めて新しく登場したもので、まだ日は浅いため、現在中国の観光教育では、グリーン・ツーリズムに関する知識を十分に伝えきれていないのではないかと考えられる。とはいえ自然条件や体験内容に注目する傾向も見られており、こうした方向性を促進することが辺鄙農村農家楽の振興にも重要と考えられる。

第4に、実際に農家楽を利用したことがあり、かつ辺鄙農山村地農家楽を希望するタイプの人には、自然との触れ合いが多い体験内容や長期的滞在及び安価の料金への希望が見られる。こうした希望は辺鄙農村農家楽において十分にはかなえられるものと位置づけられよう。しかし上記第2で見たように全体としては辺鄙農村農家楽の利用は決して多くはなく、2013年の農家楽に関するヒアリング調査からも、辺鄙農山村地農家楽の現実の経営は非常に困難に直面していることも分かっている。辺鄙農山村地農家楽を農山村への富の再分配への一つの方法として機能させるためには、利用者の増加が必要であり、「自然との触れ合いが多い体験内容や長期的滞在及び安価な料金設定」を希望するような都市住民の意識の醸成と辺鄙農村農家楽サイドからのマーケティングが不可欠といえよう。

以上の結果から、現在の中国に農家楽を農村振興の手段として発展させるため、将来の方向性としては以下のように考察できる。

1) ありのままの農山村を楽しむ美意識の醸成

調査の結果からは、若者は農村・農家楽へのイメージはよかったが、実際の利用行動としては、辺鄙農山村地へ行って、本当の「農」を楽しもうという意識はまだ低いことが明らかとなった。こうした意識を醸成するため、都市と農山村の関係を「対立」から「融合」へと誘導するため種々の対策が行う必要がある。日本においては、子どもを対象とした農山村体

験交流のセカンドスクール事業（佐藤, 2010）を開催したり、農山村地域では遊休農地の解消や都市農山村交流による地域活性化などを目的としての市民農園（内藤, 2011）を開設したりしている。現在の中国では、農山村に対する「美」意識を醸成するため、こういう交流活動によって都市住民に農村の実態を理解させることが極めて重要といえる。

2) グリーン・ツーリズムに関する知識の伝達

アンケート調査の結果からみれば、現在中国の観光専門の学生と非観光専門の学生は農村・農家楽に対するイメージ及び農家楽の利用実態には「農家楽を体験する際の希望条件」しか差がなかった。グリーン・ツーリズムは従来の観光対象とならなかった地域に赴く新しい観光の形として注目されており、観光分野を専攻する学生は非観光専門の学生よりもグリーン・ツーリズムに関する知識を備えるべきと考えられるが、実際にはその差は大きくはないことが明らかになった。しかしながら自然条件や農山村での体験を重視する傾向も垣間見られたことから、こうした方向をより促進していくことが必要といえるだろう。すなわち、農村振興及び観光業の持続発展のため、中国の観光教育分野では、時代の発展とともに、グリーン・ツーリズムなどの新たな観光形態に関する授業や知識を教授することが必要といえる。

3) 地域資源の発掘

アンケート調査の結果からみれば、辺鄙農山村地農家楽の潜在利用者は、地元の食材を味わったり、自然の中での森林浴やロッククライミングなどを体験したりして、長期宿泊の傾向も見られた。また農家楽を利用する際に、安価の料金も最も希望されている。こうした潜在利用者を招くため、辺鄙農山村農家楽は恵まれた地域資源を発掘し、自然との触れ合いがある体験メニューを増やしていくことが重要である。そして、自家産の食材あるいは地元の食材を活かし、地域独特の料理を提供する一方、コストの削減も求められる。また、農家民宿を整備しながら、「ふるさと村」的な長期滞在ができる環境づくりに力を入れるべきである。

第6章 総合的考察

第1節 結果のまとめ

本研究では、新しいあり方を探るためグリーン・ツーリズムの誕生から現在に至るまでを見てきた。ヨーロッパと日本のグリーン・ツーリズムの展開をみていくことで、グリーン・ツーリズムは地域資源を活かし、自然保護にもつながる将来性・持続性のある観光形態であることがあきらかとなった。一方、藤田ら（2011）は中国のグリーン・ツーリズム（農家楽）を主に、自然・景観・文化などの農業・農村の多面的機能を利用し、農業・農村の活性化及び都市住民へのゆとりあるライフスタイルの提供を目的として、農業生産・農業技術・伝統食品の加工などの農業関連活動を観光客に紹介する事業活動であることと指摘している。そして、現段階の中国のグリーン・ツーリズムにおいて日本のグリーン・ツーリズムに期待されているような対等な関係を伴った都市農村交流や両者の連携・協働への展開が確認される状況にはないことも指摘している。

前述した第4章のヒアリング調査と第5章のアンケート調査の結果を分析した結果により、現在中国のグリーン・ツーリズム農家楽は欧州や日本との相違は以下のようにまとめることができた。

まずは発展経緯の違いがある。欧州のグリーン・ツーリズムは、19世紀に自然とふれあうことが国民のライフスタイルとして定着し、1950年代大都市から田園都市への流入が起こり、都会からの移住者が旅行者を泊めたことが始まった。80年代90年代にかけてイタリア、ギリシアなどにヨーロッパ全域に広がった。日本では、1970年代、都市と農山村の交流政策、観光農業事業を推進し始め、80年代の半ばに都市と農村の交流活動を本格的に開始し、90年代にグリーン・ツーリズムは農山村地域の振興手段として登場した。一方中国の場合では、1980年代の四川省成都市郫県農科村の農家楽を皮切りに誕生し、90年代の後期に大中都市の近郊で、「農家で食事、農家で宿泊」する旅行形態が一般化になってきた。21世紀に入ってから、農家楽を利用した観光へのニーズが更に高まったが、欧州や日本と比べたら、まだ日が浅いニューツーリズムである。

そして、グリーン・ツーリズムの条件から見ると、ヨーロッパでは、当時、各国とも農山漁村では過疎化が進み、雇用機会や所得が減少しており、農業を続けるための多角経営が模索されていた。そこで注目を集めたのが、農村の美しい自然、景観、歴史的建造物、広いスペースを利用・活用して都市住民が農村に滞在するツーリズムであった。農家の一部を開放したり、部屋を整備したりして、旅行者を受け入れる農家民宿がその中心である（多方ら、2000）。そして、グリーン・ツーリズム事業には行政による直接補助と税の減免などが制度化され、立地場所が条件不利地域にある場合には、さらなる優遇策が取られている。利用者長期休暇の取得が普及し、農家で長期的にのんびりと滞在するケースが多い。

一方日本の場合では、グリーン・ツーリズムは農山漁村の活性化策として大きくクローズアップされ、経営主体も多様化している。多方ら（2000）は日本のグリーン・ツーリズムを

2つの流れが存在すると指摘している。1つは官設官営型あるいは第3セクター型で、補助金を背景として推進されるグリーン・ツーリズムである。第2は行政と比較的關係なく自分たちの能力に応じてグリーン・ツーリズム、すなわち「ボトム・アップ型グリーン・ツーリズムあるいは「草の根型グリーン・ツーリズム」の動きである。農家の奥さんたちがヨーロッパへ視察に行き、実際に農家民泊などをみて、自分たちでもやってみたいと考え、民宿は農家レストランを始めるケースで、その数はすこしずつであるが増えている。しかし、長期休暇取得が困難などのため、長期滞在の利用は少なく、日帰り型が中心である。

中国では、農家楽は三農問題を解決する手段の1つとして注目されているが、行政側からの支援は不均衡で、農家楽を発展する潜在力の高い地域や少数民族の特殊地区しか支援が行われなかった。そして農家レストランが中心で、都市側の利用者は「農」を楽しむより、体験メニューや施設などへの希望が高く、日本と同じく日帰り型が中心で、欧州型のような長期滞在型の発展は難しい。それぞれのグリーン・ツーリズムの条件の相違点は表6-1にまとめた。

表6-1 日中欧グリーン・ツーリズムの条件

		欧州	日本	中国
グリーン・ツーリズムの条件	行政側	条件不利地域政策と農業環境政策の推進	農業環境政策が未確立、交流施設整備のみ	グリーン・ツーリズムを発展する潜在力がある地区及び少数民族の特殊地区しか支援政策が見られない
	農村側	放牧型畜産と畑作の大規模農場経営	北海道を除いて零細稲作、兼業経営が中心	南は水田稲作、北は旱地、西は放牧型畜産の農業形態
		耐用年数の長い家屋、個室方式プライバシーが守れる様式	開放的な木造家屋 大部屋方式、プライバシーが守れない様式	個室方式が主体であるが、古い家屋が多いため、改造する必要がある
		若者が農業離れ、農家後継者不在	過疎化・高齢化	労働力の余剰問題
		性別分業体制、男性機械による農作業、女性は農場民宿	農業労働力の多くは女性と高齢者、性別分業が未確立	共働기가多く、性別分業が未確立
		独立した家族経営	個別経営以外に集落営農、公社、グループ営農など多様な経営	個人経営が基本だったが、集落や地区として農家楽に取り組む姿勢も

		体	見られた
	基本は農家の副業としてのツーリズム，旅行者を受け入れる農家民宿が中心	兼業経営が中心，民宿は農家レストランを始めるケースが多い	家族の主業になる場合が多く，農家レストランが中心
	宿泊者向けのサービスは，実に淡泊	リピーターやサポーターの顔の見える者同士の相互取引を重視した都市と農村の交流	都市・消費者への迎合が強く，必要以上のサービスになってしまうことが多い
都市側	長期休暇の取得が普及；週休2日以外に年間3~5週間の長期休暇	長期休暇の取得が一部を除いて困難；盆暮正月，春の連休に長期休暇が集中	長期休暇の取得が一部を除いて困難；国慶節，旧正月の連休に長期休暇が集中
	夏期は長期の滞在が行われ，冬期は短期滞在が中心	日帰り型が中心	日帰り型が中心
	農家でのんびりで休暇を過ごす	様々な体験や交流活動を希望	豊富な体験メニューや施設への希望が高い
	1日1人当たりの観光消費額が低い	1日1人あたりの観光消費額が高い	農家楽の料金設定が統一されていないため，消費額も様々

以上、ヒアリング調査及びアンケート調査の結果による日中歐のグリーン・ツーリズムの歴史や条件の比較を通じて、現在中国のグリーン・ツーリズムに関する問題は政府側、農家楽側、地域側、利用者側及び教育機関側の立場から、以下のようにまとめることができる。

(1) 政府側からみれば第4章で述べたように、現在の中国政府は観光地農家楽、都市近郊農家楽と辺鄙農山村地農家楽のいずれの地区も振興すべき農山村を位置づけているが、政府の支援には区分別に大きく相違がある。3区分の中で観光地農家楽と辺鄙農山村地農家楽の少数民族地区しか政府の支援を受けていなかった。しかも同じような政策的テコを入れても、都市から離れ、周辺観光地がないため、少数民族地区の辺鄙農山村地農家楽の経営は困難である。政府からの支援がない辺鄙農山村地の農家楽はさらに難しい状況に直面している。

「レジャー農業と郷村旅游発展のガイドブック」(2011)によると、現在中国では農家楽の地域を重点発展地域と一般発展地域に分けている。全国からみれば、重点地域でも一般地域でも大都市近郊地区、観光名所地区、民族特色がある地区(少数民族など)に設定され

ていることが分かった。その中で独特な農業資源や、文化資源、観光名所がある地区を政府に農家楽の重点地区として扱っている。また、2011年に浙江省财政厅と農業事務所が公布した「浙江省実施農家楽休閒旅游發展資金管理方法」によると、省の支援金は主に開業補助金と宣伝・広報料金であり、その対象としては、省級（注）レベルの農家楽への支援を確保した上で、ほかの農家楽村（点）に支出することが分かった。

中国のグリーン・ツーリズムは本来三農問題の解決手段として政府に重要視されたが、観光客を招く潜在力のある地区だけに農家楽の支援をしていることは、農村活性化の振興政策と矛盾している点も見られる。以上の点から農家楽＝グリーン・ツーリズムを三農問題解決のための梃子として使うのであれば、辺鄙農村への支援の拡充が重要といえるだろう。

(2) 農家楽側からみれば、地域住民や地元行政の積極的経営意思の存在も重要である。調査地の観光地農家楽では、村民自らが市・県政府と交渉し、国からの援助をうまく利用することにより、経営は順調な様子が見られたが、少数民族の辺鄙農山村地農家楽では、少数民族という独特の文化資源や自然資源に恵まれたが、政府の勧めで開業され、経営改善への要望でも政府への依存度が高い傾向が見られた。(1)で指摘したように農家楽を三農問題解決に資するよう利用するには政府の支援が必要条件ではあることは確かであるが、一方で十分条件としての当事者である地元や経営者の積極的経営意思の存在が必要であるといえよう。

(3) 地域側からみれば、グリーン・ツーリズム事業を中心とした村づくりの展開は個別の力ではなく、地域住民の合意形成が必要である。調査地の観光地農家楽は地域ぐるみの形で市や県政府から補助金などの行政支援を受け取り、極めて早いスピードで芦茨村地区の活性化を着実に果たしていた。しかし、近年経営者からの話によると、現在の芦茨村は地域全体的な知名度を上げてから、村内の農家楽の間でも競争が激しくなり、地域での合意形成も難しくなった。

(4) さらに運営上「農」的な特色の強化と利用の通年化を両立するための工夫が重要である。ヒアリング調査によって、観光地農家楽は公共交通不便のため、貸切団体客が主で、県内の顧客が少ない；一方辺鄙農山村地農家楽は、山の奥にあり、交通不便の理由で外からの利用者が少ない問題も見られた。これらの農家楽において交通の不便を補うためには利用者を引き付けるための特色の強化が必要といえる。反対に交通の利便性を持つ都市近郊農家楽は、集客が良いため、日々の利用率が高いため、食材はほとんど自家産ではなく、地元の農家や市販品を仕入れている。「農」の特色は薄い。以上のことから農家楽の魅力向上の手法の一つとしては「農」的な特色の向上が重要といえるだろう。しかしながら、観光地農家楽でも、都市近郊農家楽でも、辺鄙農山村地農家楽でも、農作物供給の季節性が非常に強く、夏・秋繁忙期以外での施設稼働率を向上させることが困難となっており、「農」的な特色の強化と矛盾する面も見られる。この点に関しては後に見るように食事以外の自然や農村体験メニューの強化という形での「農」的な特色の強化も必要といえるだろう。

(5) 第5章のアンケート調査の結果からみれば、若者の利用者は農村、農家楽へのイメージはよいが、参加希望の農家楽は主に観光地農家楽と都市近郊農家楽である。辺鄙農山村地農家楽を希望している人はわずか14%しかない。これは農への潜在的なニーズの高さは示されても、実際に本当の農村に向いて、「ありのままの農山村」を楽しもうという意識は決して高くない。つまり、農村や農産品への関心は高くても、そのことと農山村を実際に訪れるには、まだ大きな隔りがあるといえよう。その解決に向けては以下のように考えられる。

また、農家楽の宿泊希望日数をみると、日帰り型が多く、滞在型が比較的に少ないことから、長期滞在型でのんびりと自然や農村の雰囲気を楽しむような欧州型のグリーン・ツーリズムの展開が難しいことが予想される。

しかしアンケート結果によれば、比較的短期の滞在で、地元の食や自然の中での体験や「農」的な体験を求めるニーズも確実に存在しており、こうした傾向は日本型のグリーン・ツーリズムに近い傾向も見られた。こうした点から今後の中国におけるグリーン・ツーリズムの発展には日本の取組みにおける教育的要素の取り込みなどが必要と考えられる。

(6) アンケート調査の中では、観光専門の学生と非観光専門の学生の間、農村・農家楽に対するイメージ及び農家楽の利用実態を検定したところ、「農家楽を体験する際の希望条件」においてのみ差が認められた。

調査地の杭州商学院の旅行管理専門の一年生から四年生までの科目を確認したところ、グリーン・ツーリズムの知識に関わる科目は「郷村旅游」しかない(表6-2)。しかも、回答者の学生によると、該当科目は選択科目で、専用の教科書はなく、通常、教師がPPTを通じて、口頭説明するしかないとのことである。ここから、中国の観光分野で、時代の発展とともに、グリーン・ツーリズムなどの新たな観光形態に関する知識を十分に伝え切れていないのではないかと考えられ、教育内容の改善なども課題考えられる。

表 6-2 杭州商学院の旅行管理専門の教育課程表

旅游管理専門教育課程表					
	科目名	単位		科目名	単位
選 択 科 目	ガイド業務と技能	3		卒業論文	6
	ホテル飲食管理	2		卒業インターシップ	9
	ホテル管理実務	2		ホテル管理学	3
	ホテル企画と建設	2		旅行会社の経営と管理	3
	ホテル設備管理	2		観光経済学	2
	コンベンションのデザインと管理	2		観光開発と企画管理	3
	景観デザイン学	2		観光心理学	2
	観光地経営と管理	2		観光学概論	2
	お酒と飲料	2	必修	インターンシップ	1
	観光計画学	2		レジャー学	2
	観光地理学	2		専門指導	1
	観光サービス礼儀	2		専門実践	1
	観光管理情報システムと電子ビジネス	2			
	観光企画の図作成	3			
	観光文化	2			
	観光英語（一）	2			
	観光英語（二）	2			
	観光政策法律	2			
	観光資源学	2			
	ホールとゲストルームの管理	2			
	地域分析と企画	2			
	世界文化遺産	2			
	郷村旅行	2			
	テーマディスカッションと研究	2			

第2節 課題と展望

以上、中国のグリーン・ツーリズム（農家楽）の背景及び現状を踏まえ、日本や欧米などの先進国のグリーン・ツーリズム運営のノウハウを参考に、政府側、経営者側、地域側、利用者側、教育機関側図 6-1 のように考察できる。

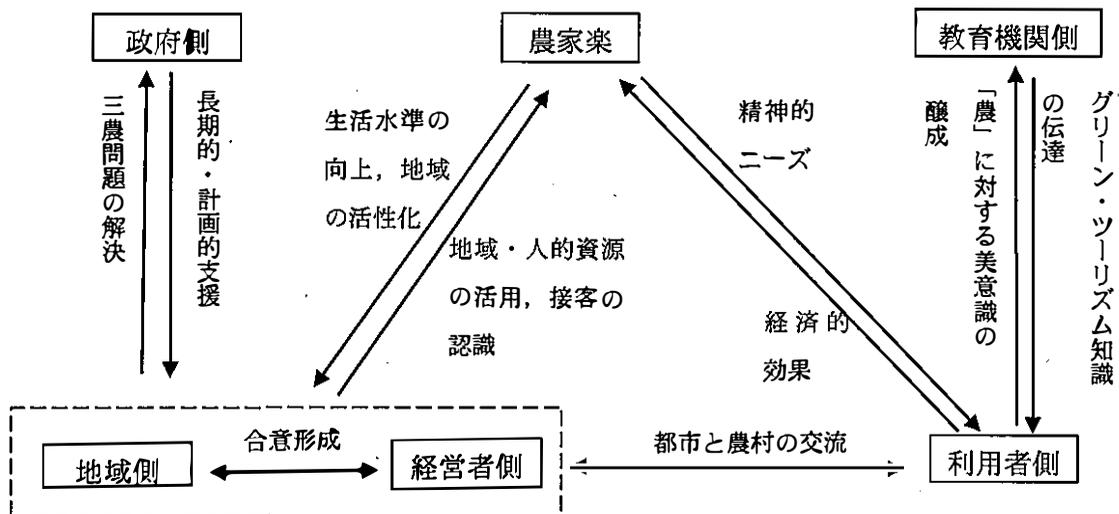


図 6-1 農家楽の発展を図るための諸要素

図 6-1 を詳しく説明すると、以下ようになる。

(1) (政府側) 公的機関の長期的・計画的な支援

公的機関が支援することは、グリーン・ツーリズムの初期段階にあっては極めて重要であると思われる。ヒアリング調査結果により、観光地農家楽はもともと集客がよく、政府の支援があればさらに順調な経営が見られた。辺鄙農山村地域の農家楽の成否の鍵は初期の資金援助、インフラ建設などハードの支援と観光客の誘致や経営管理の指導などソフト面の支援である。グリーン・ツーリズムを通じて、三農問題を解決するために、潜在力がある農村に多大な援助を出すのではなく、条件不利の農村地域を重点対象として支援するべきだと考えられる。

ヨーロッパや日本におけるグリーン・ツーリズムは中国より歴史も長く、グリーン・ツーリズムの初期段階から多くの支援が見られる。

フランスでは、民宿経営に対する支援体制は大きく3つに分けている。まずは様々な資金援助である。そして県によって、法律で定められた農業条件不利地域の民宿経営者にたいする補助金の額を、一般地域より多くしているところもある。また住民税や職業税などの税制上の優遇措置も補完されている。イギリスでは農村地域にかかわる全ての政策は①地域社会と経済の活性化、②農村環境の保全、③国民による農村地域での楽しみ、この三つのバランスをとるようにしている。そして「農村地域は国民共有の財産」の精神を踏まえ、お互いがお互いを補完しあえるような協調的なアプローチを呼びかけている(山崎ら, 1996)。

全体から見ればヨーロッパ大陸で行われている行政支援方策には、二つの共通項がある。まずは、低下する農業所得への補完収入の確保が最大の目標となっている。各地で進んでいる農業の衰退をどのように防ぐかが問題意識としてまずあり、農家の副業そのものを農家

のニュービジネスを育成するための新たな方策として位置づけがはっきりしている。基本的には農家の副業としてのツーリズムであることを前提とし、行政による直接補助と税の減税などが制度化されている。あくまで農家が主役となって、低下しつつある農業の所得の落ち込みを防ぎ、過疎地人口の再生を目指している事業との認識がある。

次は、民宿開業への緩やかな規制措置である。ほとんどの国々で農家が民宿を始めるときに一定の制限はみられるものの、営業許可の取得が極めて緩やかな状況になる。イギリス、ドイツ、オーストリアなどはおおむね10ベッド以下など、いずれの国も一定規模以下の農家でも民宿などの営業が可能とされている。さらにホテル営業など専門の宿泊業とは一線を画し、両者間のトラブルを避けることも念頭に置かれている。いずれの国でも農村部には簡易なホテルがあるが、農家民宿はこれらのホテル専門経営体とは、まず宿泊客の規模において差別化が図られている（藤井，2011）。

政府からの影響を受けやすい現在の中国のグリーン・ツーリズム（農家楽）には、ヨーロッパのような完全な政府支援は最も不可欠の要素と考えられる。

(2)（経営者側）地域・人的資源の活用及び接客としての認識

①地域資源の発掘と体験メニューの多様化

地域づくりで導き出された地域の資源やコンセプトが全て観光客に受け入れられるわけではない。したがって、地域に存在する資源のみに限定して観光の資源を考えるのではなく、「観光客に対して訴求力をもつ資源とは何か」という発想も同時に必要である。つまり「地域にどんな資源が存在するか」と「消費者である観光客はどんな資源が魅力的と感じるか」という視点が必要である（原田ら，2011）。第5章で前述したように、利用者全体は自然との触れ合いがある体験メニューが希望されている傾向が見られた。現段階の中国の農家楽では、地域資源を発掘し、様々な体験メニューを豊富にすることが大事である。特に辺鄙農山村農家楽は恵まれた自然資源を活用しながら、地元の食材を味わったり、自然の中での森林浴やロッククライミングなどを体験したりして、長期宿泊の傾向がある潜在利用者を招くことが重要である。具体的な成功モデル事例としては、日本の群馬県利根郡川場村では農林業と観光をマッチさせた事業を1970年代より進め、その一問が都市との交流であり、1981年に世田谷区と結ばれた「縁組み協定」（区民健康村相互協力に関する協定）がその代表である。これは世田谷区が豊かな自然に恵まれた山村自治体と提携し、区民が「ふるさと感」を味わい、健康的な余暇時間を過ごせるレクリエーション施設を設置し、自治体相互、住民相互の交流により地域活性化を図ろうとするものであった（浄法寺町活性化研究会，1999）。

この事業の第一主体は利用者であり、主に区民、区内に職場のある者、区立小学校55年学童である。第二主体は住民であり、つまり健康村の所在する地域の人々や帰省者である。第三の主体の運営者であり、運営に関わる人々、区の担当者、教育委員会、所在する自治体職員である。

この事業の当初は、移動教室や様々なイベントなどを通じての交流が主だったが、やがて村民と区民が自由に行き来し、今では自発的な交流さえも見られるようになった。現在の交

流事業はそのような状況に合わせた企画・運営を目指して、およそ4つのステップが見られる（鈴木, 2011）。

ステップ1は「いつでも楽しめるオプションイベント」である。このターゲットは持続的に交流事業への参加が期待できる、新規利用者と子供連れ（家族）層である。「ナイトハイクツアー」や「カントリーガイドウォーク」ツアーなどの本格的な自然体験によって、村の自然環境や文化などを学ぶ。

ステップ2は「また来たくなる交流事業」である。季節に応じる果物の収穫などの日帰りツアーや、川場村の溪流に身を置くフライフィッシングスクールや、手作りそばの会、レンタアップル（川場村のりんご園主さんより、りんごの木を借りて、一年間オーナーになる制度）、棚田オーナー制度やレンタル農園を通じて、村民との交流も深める。

ステップ3は「里山づくりを学ぶ」である。「健康村里山自然学校」を母校にした2つの塾が開講中である。里山の景観を守る異議や楽しさを知り、里山づくりに欠かせない、それぞれの分野の技術を習得し、専門的な知識を学ぶ。

ステップ4は「交流事業から発展した自主活動」である。村に求められた様々な技術を取得し、村の作法を理解した交流事業参加者は川場村のサポーターとなる。現在では、山林整備や農業などの領域で、交流事業参加者と村民のとの協働が進んでいる。

このように、川場村に訪れてきた観光者数は1985年40376人から2010年の891,900人に達し、交流事業からもたらしてきた効果が明瞭に見られる。

中国の農家楽地区、特に辺鄙農山村地の農家楽は農山村ならではの豊かな自然に恵まれ、郷村観光の理想地であるため、都市部の住民と「健康村づくり」のような事業は現段階の最も参考にできる成功例であるといえよう。

②人的資源の活用

グリーン・ツーリズム事業を推進するため、地域住民の積極的経営意思の存在や集落や地区の協力が重要であり、地域の人的資源を最大限に発揮することが不可欠である。つまり「山村地域に眠る地域資源（労働力、技術を含む）を活かし、山村住民がコミュニティでの人とのつながりを大事にしながら、自発的に山村問題の解決や山村再生、山村活性化に取り組み、ビジネスとして成り立たせる活動」という山村コミュニティ・ビジネス（山村再生研究会, 2015）の実践が大切である。いわゆるコミュニティのパワーといえよう。成功事例としての台湾の復興まちづくり「社区重建营造」から学べる。本研究に関しては、日本と欧州のグリーン・ツーリズムと比較することが基本であるが、ここでは社区建設の成功事例を紹介したいため、同じく中国文化圏である台湾の「社区重建营造」を例として取り上げたい。

台湾は世界貿易機構（WTO）に加盟した結果、農産物の輸出問題で、農業が大きな打撃を受け、農村自体が経済的に困窮した状態に陥っていた。そうした背景の中で、山間地域で921地震が起きた。台湾でも山間地域では、高齢化が進み、生産基盤であった農業も弱体化して、若者の多くは村を出た。農村の活性化という問題が台湾でも大きな課題となっていた。こういう背景の中で、台湾政府は、復興を住民の主体的参加による「まちづくり：社区（コミュニテ

イ) 营造」として展開することとなった(中林, 2005)。

復興の基本的な考え方は「村の人は村で生活し、働くということがいちばん」である。集落を住民主体で復興していく為に、「社区発展協会(まちづくり協議会)」を立ち上げ、専門家支援や初動期の活動資金を 921 重建基金が支援した。この山間地域の村の誇るものは豊かな自然である。この「自分たちの資源」を活用して、多くの集落や村で生態村づくりによる都市住民との交流を基底とするグリーン・ツーリズム村やエコ T 村おこしが展開されていった。また、その実現のために傷んだ山道や農道を修理し、観光用の施設などを村の人たちの力を使って再建・復興したいと考えた。これらの事業によって、村の人たちも雇用され、わずかながらでも収入を得ることができた。桃米社区という社区は、「民宿組」、「レストラン組」、「空間組」、「解説組」を作って、村の人を雇って営業し、村くるみでのツーリズムとして、民宿営業者、民宿で働く人、ガイド、遊歩道の補修など、それぞれの収入に応じて、各人の収入の 5~10%を出資しあって、「桃米社区公基金」が作られ、地域内経済を活性化させる仕組みになっている。このような山の自然や、川の自然などを活かした生態村づくり、グリーン・ツーリズム、エコツーリズムといった地域の資源の自然をいかし、村全体で仕事し、自立・自活していく持続的発展可能な村おこしの選択、スローフード、スローライフのその生き方は、中国における辺鄙農山村地域での村おこしの一つのモデルになると考えられる。

③接客業としての認識

いかに素朴さが売りのグリーン・ツーリズムであっても、観光客という「客」を相手とした接客業であることの自覚が必要である。顧客の確保が出来なければ、グリーン・ツーリズム事業も成り立っていない。現在中国のグリーン・ツーリズムにおいては、農家楽の衛生・安全面での向上や従業員の教育、施設、サービスの品質などがまだ大きな問題となっている。経営者は施設やサービスの水準を改善するとともに、「人と人との接点において顧客が感じる満足感」というホスピタリティ意識の醸成も農家楽の持続発展には不可欠である。

また、第 5 章のアンケート調査結果では、非観光専門の学生は観光専門の学生より安価な料金を重視している傾向も見られた。経営者はサービスの品質などを向上するとともに、コストを削減し、利益を確保しながらより低い料金の基準を設定することも必要といえるだろう。

(3) (地域側) 地域ぐるみの取り組み

調査地の観光地農家楽では、集落や地区の協力でグリーン・ツーリズム事業の開始段階では、順調な様子が見られた。しかし利益の駆り立て、村内の農家楽も競争が激しくなり、従来強い地縁に基づく運命共同体のような一体感は失われつつある。都市農山漁村交流活性化機構(2002)は、地域ぐるみの受け入れ事業を地域の活性化とつながる；高齢者の生きがい対策になる；個人経営と違い、事業に永続性がある；行政などの協力が有り、宣伝しやすい；マスコミで紹介されやすい；補助金の交付などの行政支援を得やすいなど 6 つの利点を取り上げた。例の観光地農家楽では、永続的な経営を図るため、まずは地域での合意形成

が大事である。公共交通不便などの問題に関しては、集落内の農家楽の経営者全員を集め、行政の支援をもらいながら、共同出資で定期便のバスをレンタルするなども解決の有利手段になる。また住民有志の参画による新しい推進計画づくりも必要である。農家楽の先進地、特に集落の力を結集した共同受け入れの成功地区へ視察し、研修会や研究会などの学習活動も必要である。

(3) (利用者側) 「農」に対する美意識の醸成

前述した第4章と第5章の調査結果からみれば、現在中国のグリーン・ツーリズムに一番足りないのは「農」に対する美意識醸成である。こうした意識を醸成するため、都市と農山村の関係を「対立」から「融合」へと誘導するため種々の対策が行う必要がある。例えば、前述した子どもを対象とした農山村体験交流のセカンドスクール事業を通じて、児童に農業・農村への理解を深めさせる。またこういう交流プロジェクトは受け入れ地域においても、副収入増加などの経済的効果はもちろん、高齢者の生き甲斐創出やコミュニティ活動が活性化するなどの社会的効果の存在も指摘されている(藤田, 2011 (2))。またこういうような交流事業の以外でも、都市住民の「食」と「農」への関心の高まりや潤いと安らぎのある生活、土地や生き物との触れ合いに対するニーズに応えるとともに、都市的地域では農地の有効利用や都市住民の農業理解の促進等を、また農山村地域では遊休農地の解消や都市農山村交流による地域活性化などを目的としての市民農園の開設(内藤, 2011)や都市住民の食の安全に対する不安を解消できる産直の取引などの手段も都市住民に農村の実態を理解させることができるのではないと思われる。

総じて言えば、「農」に関する意識の醸成は農家や地域のためのグリーン・ツーリズムという考え方だけでなく、都市住民のためのグリーン・ツーリズムという考え方でもあり、農山村と都市の連携をつくり出すことである。また、その前提として、国民全体のグリーン・ツーリズムに対する合意形成である。グリーン・ツーリズムが都市住民に提供するものは何か「農村や自然を保全することが都市や社会全体にどんな影響があるのか」をRし、グリーン・ツーリズムに対する都市住民の意識醸成がなければ、グリーン・ツーリズムの成功はありえない。このように、都市住民は農山村の自然の役割を認識し、これらの愛着をもつこと、そして最終的には都市、農山村という分け方ではなく、その両方がお互いにそれぞれを補完し合うことで一つの国土が形成されているという意識をもつことはできる(八木, 2009)。

(4) (教育機関側) 教育的要素の取り組み

アンケート調査の結果からみれば、現在中国の観光専門の学生と非観光専門の学生は農村・農家楽に対するイメージ及び利用実態には、「農家楽を体験する際の希望条件」しか差がなかった。現在の観光分野では、観光行動、観光資源、観光ビジネス、観光と情報、観光と交通、観光と行政・政策などありとあらゆる側面から、観光研究が行われている。観光学部・学科で育成する人材像としては将来の観光産業や観光によって地域振興のリーダーとなれる人材の育成を掲げている(Guideline 2007)。中国の教育機関はこれから、観光専門の科目設定を時代の発展とともに慎重に改革し、グリーン・ツーリズムなどの新たな観光形態に関す

る授業や知識を十分に伝達することが求められる。

ドイツでは、国民の環境意識の高まりはソフト・ツーリズムとして休暇旅行に反映されており、フंक（1996）によるプファルツの森でのアンケートの調査結果は、それを端的に物語っている（表 6-3、表 6-4）。例えば、「もっとお金をかけていいもの」という質問事項では、「環境にやさしい宿泊施設」が第 1 位の回答であり、「休暇で重視すること」の質問では、「破壊されていない自然」や「ごみがない」などが高い評価を得たのに対して、「スポーツ施設の充実」は最も低い評価であった。こうしたドイツ人の環境意識の形成背景には、学校における単なる知識だけを教える環境教育ではなく、実践的な環境教育が重視されている点が指摘されている（横山，1992）。ドイツの事例から、グリーン・ツーリズムの将来性を確保するため、中国の教育機関は観光分野だけではなく、児童から環境教育や農業体験の教育実施にも大きな力を入れるべきと考えられる。

表 6-3 もっとお金をかけてもいいもの

	数	%
環境にやさしい	41	47.7
ごみ、排水処理の充実	32	37.2
自然農業食品	22	25.6
地域の名物	19	22.1
公共交通手段の充実	15	17.4
多様性のある施設の充実	15	17.4
スポーツ施設の充実	9	10.5

（資料）フंक，K（1996）ドイツと日本における観光行動の比較とその組織的背景

表 6-4 休暇で重視すること

	とても重視	全然重視しない
破壊されていない自然	63	0
ごみがない	54	0
きれいな湖・河	41	0
静か	55	0
町並み	34	0
田園風景	22	1
植物相・動物相	17	0
自然でのレクリエーション	20	3
地域の食べ物	14	4
自然農業の食べ物	9	9
公共交通手段の充実	5	15
自然での宿泊施設	12	22
スポーツ施設の充実	1	21

(資料) フンク, K (1996) ドイツと日本における観光行動の比較とその組織的背景

以上、中国のグリーン・ツーリズムを行政側、経営者側、利用者側及び教育機関側から総合的に考察してきたが、これからの課題はまだたくさん残されている。簡単にまとめれば、以下のようなになる。

まず、現在中国でのグリーン・ツーリズムは「新農村建設」の一目標として、単純に農家の収入を確保して農家を維持させたい傾向が強い。ともかく、都市からの来訪者受け入れに一生懸命になるあまり、体験メニューの充実や豪華な食事の提供など、必要以上のサービスになってしまい、その結果収入は少なく、気疲れし、かえって疲弊していく農山村が少なくない。都市住民のニーズに配慮しながら、農村地域住民の参加や地域農業と他産業との連携を通じて村づくりを支援するという戦略性を持つことはこれからの課題となっている(藤田, 2011 (1))。

また、グリーン・ツーリズムを展開する地域に関しては、盲目的なブームを防ぐこともこれからの課題である。現在の中国では、全国的にグリーン・ツーリズムがブームになれば、地域の実情をあまり考えずに、その成功例と言われている地域の良い部分だけを見て、画一的にグリーン・ツーリズムを導入しようとしてきた面がある。しかし、地域によっては、既にグリーン・ツーリズムを行う主体的条件が乏しくなっているような地域でグリーン・ツーリズムを推進しても、地域はかえって衰退する可能性もある。

また、4章のヒアリング調査の結果からみえるように、現在の中国では、三農問題が発現している一般的な農山村への富の再分配の方法として、農家業を通じた辺鄙農山村地農家業の発展は極めて重要な役割をもつと考えられる。しかし、農家業は全ての農山村地の

振興手段ではない。宮崎（2011）は日本の村づくりを2つの主要な展開方向を指摘している。1つはグリーン・ツーリズムであり、農業・農村の多面的機能の中でも伝統文化、美しい景観、豊かな自然など、都市住民に魅力のあるツーリズム資源を活用して、農業・農村体験を中心に6次産業化を図るものである。もう一つは地元農林水産物とその加工品のブランド化である。これからの中国でも、農山村を振興させるため、グリーン・ツーリズムを唯一の解決手段にするのではなく、地域農産物のブランド化などの方向にも注目を浴びる必要がある。そして、グリーン・ツーリズムの利用が適切な地域とそうでない地域を区分しながら推進させていくことも今後の課題となっている。

ヨーロッパでも日本でも持続可能なグリーン・ツーリズムを目指している。これを持続可能なものにできれば、農業を始めとした第一産業、販売サービス主体の第三次産業、雇用促進、安らぎ癒やし、環境保全、地域活性化など効果ははかりしれない。グリーン・ツーリズム事業を展開する際に、目の前の経済効果だけを見るのではなく、時間をかけて、ゆっくり長い目ですすめることが、グリーン・ツーリズムの発展を促すのではないかと思われる。また最近中国では、顧客を引き付けるため、質の高いサービスを提供する「農家が経営しない農家楽」や「洋家楽」次第に人気となってきた。そして、第4章のアンケート調査の結果からも、観光専門の学生は体験メニューや施設などへのニーズが高まることが見られた。このように、「農」を楽しむよりサービスを重視する傾向は農家楽の発展方向にいかに関与があるのかも深く考える必要がある。

最後に、現在の中国では、グリーン・ツーリズムに関する研究はいまだ未熟な段階に留まっている。グリーン・ツーリズム事業を展開する際にも、マーケティング調査や計画の作成は十分に実施されていないのは現状となっている。グリーン・ツーリズムの持続発展を促すため、グリーン・ツーリズム関係の専門家の育成や、研究の深化なども大きな課題となっている。こうした現状に対し、上記の観点からの更なる研究の継続が中国におけるグリーン・ツーリズムの発展には不可欠といえるだろう。

引用文献：

- Adler, J. (1989): *Origins of sightseeing*, *Annals of Tourism Research*, 16(1):7-29
- Batta, R.N. (2009). *Green tourism certification manual*. Tokyo: Asian Productivity Organization (APO). Retrieved April 27, 2010, from http://www.apo-tokyo.org/00e-books/GP-18_Green_Tourism.htm#contents.
- Cavaco, C. (1995): *Rural Tourism: The Creation of New Tourism Spaces*, in Montanari, A. and Williams, A. eds. *European Tourism: Regions, Spaces and Restructuring*. John Wiley & Sons: 129-149
- Dodds, R. and Joppe, M. (2001). *Promoting urban green tourism: The development of the other map of Toronto*. *Journal of Vacation Marketing*, 7(3), pp.261-167
- Furqan A. Mat Som A.P. Hussin R (2010) *Promoting green tourism for future sustainability*. *Theoretical and Empirical Researches in Urban Management*, 8(17), pp.64-74
- Jungk, R. (1980). *Wieviel Touristen pro Hektar Strand?*. *GEO*, 10, pp.154-156
- Krippendorf, J. (1986). *The new tourist turning point for leisure and travel*. *Tourism Management*, 7, pp.131-135
- Lane, B. (1994). *What is rural tourism?* Bramwell, B. and B. Lane (eds.): *Rural tourism and sustainable rural development*. *Multilingual Matters*, UK, pp.7-21.
- Rochlitz, K.H. (1998). *Sanfter Tourismus im Alpenraum*. *Geographische Rundschau*, 40-6, pp.14-19
- Sinclair, M.T. (1998). *Tourism and economic development: a survey*. *The journal of development studies*, 34(5), pp.1-51.

青木辰司 (2004) *グリーン・ツーリズム実践の社会学*. 丸善

安部桂子 (2013) *接客教育とホスピタリティ*. (ホスピタリティ入門. 青木義英, 神田孝治, 吉田道代編, 新曜社) 120-125

井上和衛 (2002) *ライフスタイルの変化とグリーン・ツーリズム*. 筑波書房

井上和衛・中村攻・山崎光博 (1996) *日本型グリーン・ツーリズム*. 都市文化社

大島順子 (2002) *フランスにおけるグリーン・ツーリズムの振興と農村における民宿制度*. (財)都市農山漁村交流活性化機構

大谷尚実 (2008) *日本型グリーン・ツーリズムの展開*.

http://www.obirin.ac.jp/la/ico/images/_04report/2008otani.pdf

王文亮 (2002) 『中国の WTO 加盟と国際観光業—日中観光交流の新時代へ』 日本僑報社

王文亮 (2001) 『中国観光業詳説』 日本僑報社

緒方宏海 (2009) 「中国における「郷村観光」の実態に関する社会人類学的研究」『旅の文化研究所研究報告』第 17 号 1-41

多方一成・田淵幸親・成沢広幸 (2000) *グリーン・ツーリズムの潮流*. 東海大学出版会

岡本伸之 (2001) *観光学入門—ポスト・マス・ツーリズムの観光学*. 株式会社 有斐閣

小槻文洋・原一樹・伊多波宗周 (2013) *観光研究の主要概念—Key Concepts in Tourist*

- Studies 抄訳 http://www.kobeshukugawa.ac.jp/wp-content/uploads/2013/06/ksgu__journalH24-01_002key.pdf
- Guideline (2007) 教育改革 ing (第 14 回観光学部・学科).
www.keinet.ne.jp/gl/07/11/kyoing0711.pdf, 2007/11
- 菊地俊夫 (2008) 地理学におけるルーラル・ツーリズム研究の展開と可能性—フードツーリズムのフレームワークを援用するために—地理空間, 1-1, 32-52
- 姜春雲 (2005) 現代中国の農業政策. 家の光協会
- 公益財団法人日本交通公社 (2004) 観光読本 (第 2 版). シンポジウム
<http://www.jtb.or.jp/publication-symposium/researcher-publication-tokuhon2>
- 呉民錫 (2008) 中国における「三農問題」と農村改革運動—「新農村建設運動」の登場背景とその内容を中心に—, 早稲田大学大学院教育学研究科紀要, 別冊, 16 号-1, 153-164
- 斎藤節夫 (2008) 中国の三農問題と「社会主義新農村」の建設—農業・財政政策を中心に, 下関私立大学論集 第 51 巻, 第 1・2・3 合併号 (2008, 1) 51-61
- 佐藤真弓 (2010) 都市農村交流と学校教育. 農林統計出版株式会社
- 山村再生研究会 (2015) 山村再生ビジネスとマーケティング. 森と木と人のつながりを考える (株) 日本林業調査会
- 浄法寺町活性化研究会 (1999) 「大学から浄法寺町への提言—中山間地の活性化戦略」吉成印刷出版
- 鈴木忠義 (2011) 『都市と農山村の交流—世田谷川場縁組協定 30 周年記念』, 株式会社世田谷川場ふるさと公社
- 多方一成 (2006) スローライフ, スローフードとグリーン・ツーリズム. 東海大学出版会
- 張広帥 (2010) 郷村観光の定義とその重要性に関する一考察. 北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院院生論集 6 : 83-90
- 張広帥 (2011) 中国観光の発展過程とその特徴に関する一考察. 北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院院生論集 7 : 71-79
- 展鳳彬 (2008) 中国の新型観光農家楽—四川省・成都市を事例に—. 同志社政策科学研究 10 (1), 241-246
- 都市農山漁村交流活性化機構 (2002) 地域ぐるみグリーン・ツーリズム運営のでひき—都市と農山漁村の共生・対流—. 社団法人農山漁村文化協会
- 内藤重之 (2011) 市民農園の展開と都市・農村交流 (都市と農村—交流から協働へ. 橋本卓爾, 山田良治, 藤田武弘, 大西敏夫編, 日本経済評論社). 113-129
- 中澤禮介「グリーン・ツーリズム提唱」『DATUMS Advocacy, (1991 年—1994 年)』レジャー・サービス産業労働情報開発センター
http://www.netric.com/advocacy/datums/92_10nakazawa.html(last access 2009/11/14)
- 中林一樹 (2005) 「台湾の自然を生かした共生をめざす復興村おこし—921 台湾大地震からの復興まちづくり「社区重建营造」に学ぶこと」 BIO-City 特集 No. 31, P13-21

- 21 ふるさと京都塾 (1998) 人と地域を生かすグリーン・ツーリズム. 学芸出版社
- 沼田真編 (1998) 自然保護ハンドブック. 朝倉書店
- 農政ジャーナリストの会 (1997) 日本農業の動き No. 119 グリーン・ツーリズムの胎動. 農林統計協会
- 農林水産省 (2012) 「平成 23 年度海外農業情報調査分析事業 (アジア) 報告書, 農林水産省大臣官房国際部国際課
http://www.maff.go.jp/j/kokusai/kokusei/kaigai_nogyo/k_syokuryo/h23/pdf/asia01.pdf
- 八木邦広 (2009) ドイツの農家民宿の取り組み事例から学ぶグリーン・ツーリズム, 静岡総合研究機構の活動実績, 情報誌「SRI」発行実績, 第 95 号, P79-85
- 原田順子・十代田朗 (2011) 観光の新しい潮流と地域. 財団法人放送大学教育振興会
- 藤井咲 (2011) ヨーロッパと比較する日本のグリーン・ツーリズム. [http://www.cc.kyoto-su.ac.jp/~konokatu/fujiisaki\(11-1-30\)](http://www.cc.kyoto-su.ac.jp/~konokatu/fujiisaki(11-1-30))
- 藤田武弘 (2) (2011) 日本型グリーン・ツーリズムと都市・農村連携. (都市と農村—交流から協働へ. 橋本卓爾・山田良治・藤田武弘・大西敏夫編, 日本経済評社). 40-57
- 藤田武弘・楊丹妮 (1) (2011) 中国の「新農村建設」とグリーン・ツーリズム. (都市と農村—交流から協働へ. 橋本卓爾・山田良治・藤田武弘・大西敏夫編, 日本経済評論社). 253-266
- フंक, K (1996) ドイツと日本における観光行動の比較とその組織的背景. 日本観光学会 第 73 回全国大会報告要旨, 32-33.
- 星野敏 (2007) 中国における「社会主義新農村建設」の展開とその問題—農民の受け皿組織としての理事会に注目して, 農村計画学会誌: Vol. 26 (2007) No. 4 427-433
- 方琳・山本信次・山本清龍・藤崎浩幸 (2015) 中国における三農問題解決のための農家楽の可能性と課題—浙江省杭州市桐廬県を事例とする質的調査から—, 日林誌 97: 115-122
- 松村嘉久 (2009) 「観光大国への道のり」 佐々木信監修『中国の改革開放 30 年の明暗—とける国境, ゆらぐ国内』世界思想社. 30-43
- 宮崎猛 (2002) これからのグリーン・ツーリズム—ヨーロッパ型から東アジア型へ. 家の光協会
- 宮崎猛 (2011) 農村コミュニティビジネスとグリーン・ツーリズム. 昭和堂
- 山崎光博・小山善彦・大島順子 (1996) グリーン・ツーリズム 社団法人 家の光協会
- 楊丹妮・顧海英・兪菊生・藤田武弘 (2008) 中国都市部におけるグリーン・ツーリズムの進展と観光農業の展開. 農業市場研究, 第 17 巻第 1 号, 99-104
- 横山秀司 (1992) ドイツ地理教育における環境問題 (前編・後編), 地理 37 巻 9 号, 128-135, 37 巻 11 号, 127-131
- 横山秀司 (1997) ヨーロッパにおけるグリーン・ツーリズムの展開について. 九州産業大学商経論叢 37 (4): 153-174

- 横山秀司 (2002) ヨーロッパにおけるグリーン・ツーリズムとエコツーリズム. 地理科学 vol. 57 no. 3:168-175
- 横山秀司 (2006) 観光のための環境景観学 ～真のグリーン・ツーリズムにむけて～. 古今書院
- 吉田春生 (2003) エコツーリズムとマス・ツーリズム—現代観光の実像と課題—. 大明堂
- 蔡昉・王徳文・都陽 (2008) 『中国農村改革与変遷—30年歷程和經驗分析』上海人民出版社
- 陳蕾 (2004) 浅析農家樂的興亡与發展. 四川經濟管理学院学報 2004年03期:10-20
- 陳錫文 (2014) 「2014年中国乡村旅游游客数量达到12亿人次 占全部游客数量的30%」 中国經濟網 <http://www.199it.com/archives/327501.html> 杜潤生:『杜潤生自述:中国農村体制变革重大決策紀實』, 人民出版社 2005年版
- 郭煥成・呂明偉 (2011) 休閒農業与鄉村旅游發展工作手作 (第二版). 中国建築工業出版社
- 郭煥成・呂明偉・任国柱・朱立英・張媛・王南希 (2011) 『休閒農業与鄉村旅游發展工作手冊』. 中国建築工業出版社
- 郭煥成・任国柱・呂明偉 (2010) 我国新農村建設与鄉村旅游發展. (鄉村旅游理論研究与案例实践. 郭煥成・鄭健雄・呂明偉編, 中国建築工業出版社) 2-7
- 何景明・李立華 (2002) 関与「鄉村旅游」概念的探討. 西南師範大学学報 (人文社会科学版). 28 (5): 125-128
- 侯元凱・劉慶雨 (2012) 『休閒農業怎么做—資源与構建』中国農業出版社
- 胡衛華 (2002) 農家樂旅游開發探析. 城鄉建設 No. 8. 2002. 8
- 李飛雲・江耕 (2013) 浙江城市化率達63.2%代表擔憂造城運動, 中国新聞網, <http://www.chinanews.com/df/2013/01-27/4523605.shtml>, 2013/01/27
- 李鵬・王秀紅 (2011) 『鄉村旅游經營者多維目標研究』科学出版社
- 金穎若・周玲強 (2011) 『東西部比較視野下的鄉村旅游發展研究』中国社会科学出版社
- 劉娜・胡華 (2001) 成都郫縣友愛農家樂現狀剖析与發展思路. 国土經濟 (1) 43-44
- 林琳 (2013) 我縣“十二五”旅游業發展規劃實施情況中期評估報告出爐. 今日桐廬:第2148期-04
- 駱高遠 (2009) 『觀光農業与鄉村旅游』浙江大学出版社
- 茅忠明 (2014) 新農村建設的实践与思考—以浙江省建設「中国美麗鄉村」為例, 經濟研究導刊 No. 7, 2014, Seria No. 225, 41-43
- 呂昂 (2014) 2013年浙江省城鄉居民收入水平居全国省区首位, 新華網, http://www.zj.xinhuanet.com/newscenter/focus/201402/24/c_119473169.htm, 2014/02/04
- 任虹 (2004) 昆明鄉村發展旅游的思考. 「昆明冶金高等專科學校学報」No. 6
- 市委办 (2013) 中共杭州市委员会事務所文件. 2013年6号
- 桐廬県統計局 (2013) 桐廬県 2012年国民經濟和社会發展統計公報 (2013/01). 4-5
- 田喜洲 (2002) 論農家樂旅游經濟. 「農村經濟」No. 11

- 肖佑興 (2001) 「論鄉村旅游的概念和類型」『旅游科学』38-41
- 肖佑興·明慶忠 (2001) 関与開展雲南鄉村旅游的思考. 桂林旅游高等專科學校學報 (1) 33-35
- 徐軍勇 (2012) 休閒農業和鄉村旅游業成為新的重要增長點. 杭州日報,
http://hzdaily.hangzhou.com.cn/hzrb/html/20201/12/content_1205295.htm,2012/01/12
- 楊桂華·王秀紅 (2006) 農家樂經營手冊. 中国旅游出版社
- 楊建翠 (2004) 成都近郊鄉村旅游深層次開發研究. 農村經濟 (5) 33-34
- 姚素英 (1997) 淺談鄉村旅游. 北京第二外國語學院學報 (3) 42-46
- 張德修·申保珍 (2006) 浙江社會主義新農村建設實踐. 學習與創新 2006 年 29 期,
<http://www.jmnews.com.cn>,2006-6-14
- 張建國·俞益武·蔡碧凡·夏盛民 (2009) 浙江“農家樂”旅遊開發的動機與實現途徑. 商業研究 2009 年 05 期:169-174
- 張俐俐 (2003) 「我國旅游管理體制改革的歷程」『社會科學家』總第 100 期, 82-90
- 趙憲軍·趙邦宏·張潤清 (2011) 『休閒農業為何這麼熱』中国農業出版社
- 鄭健雄 (2005) 旅游吸引力與鄉村旅游發展策略
- 中国國家旅游局 (2006) 『概念, 類型, 誤區, 問題と对策』<http://www.cnta.gov.cn/html/2008-6/2008-6-2-21-16-49-29.html>
- 中国旅遊協會旅遊都市分會 (2011) 現代農家樂實務手冊. 中国旅遊出版社
- 中国人民共和國統計局「中国統計年鑑」<http://www.stats.gov.cn/tjsj/ndsj/>
www.maff.go.jp/j/kokusai/kokusei/kaigai_nogyo/k_syokuryo/h23/pdf/asia01.pdf- 2013-02-22
- 中華人民共和國中央人民政府網, 住房城鄉建設部関与公布第一批建設美麗宜居小鎮, 美麗宜居村示範名單的通知. 建村 2013 年 159 号, www.gov.cn
- 浙江省農家樂休閒旅游發展資金管理方法 (2011) 599 号 <http://www.zj.gov.cn/> 浙江省人民政府網
- 2014 年浙江省國經濟と社会發展統計公報,
http://www.zj.stats.gov.cn/tjgb/gmjshfzgb/201502/t20150227_153394.html , 浙江省經濟
- 朱姝 (2009) 『中国鄉村旅游發展研究』中国經濟出版社

注記：

- 注 1)：三農問題とは、中国における農村、農業、農民の問題を示し、経済格差や流動人口等包括した中国の社会問題となっている。農民問題は三農問題の中核となる問題、農民の収入が低く、増収は困難であり、都市-農村間の貧富の差は拡大し、農民は社会保障の権利を実質得ていないことを示している；農村問題は農村の状態が立ち遅れ、経済が発展しないことに集中して示している；農業問題は農民が農業で金を稼げず、産業化のレベルが低いことを示している。
- 注 2：改革開放政策とは中国の鄧小平の指導体制の下で、1978年12月に開催された中国共産党代十一期中央委員会第三回全体会議で提出、その後開始された中国国内体制の改革および対外開放政策のこと。
- 注 3：社会主義新農村建設とは、都市と農村の経済・社会発展を協調させることを堅持した上で、「生産を發展させ、生活を豊かに、気風を改善させ、村を美しくし、民主的管理を行う」という概念である。
- 注 4：土地改革運動は1949年に中国の建国後の最初に発動された全国的運動である。1950年1月、中共中央政府は土地改革の開始を指示し、1950年6月30日、『中華人民共和國土地改革法』を公布した。土地改革の目的と任務は「地主階級による土地所有制を廢除し、農民による土地所有制を実施、以て農村の生産力を解放し農業生産を發展させ、新中国の工業化の道を開く」ことである。
- 注 5：農業合作運動は互助組織の結成が発端となったもので、「初級合作社」と「高級合作社」に分けられていた。「初級合作社」は「互惠を目的とする自由参加、モデルをつくり規範を示す」との原則のもとで、農民に対する土地所有権の認定及び国家と集団、そして個人との三者間の分配を認める制度であった。「高級合作社」は「初級合作社」の施行より、生産性増大の刺激を受けて設けられた制度で、土地の集団所有と「統一経営、統一採算、統一分配」という公有化・国有化の特徴が見られる。
- 注 6：人民公社中華人民共和國において農村に存在した組織であり、一郷一社の規模を基本単位とし、末端行政機関であると同時に集団所有制の下に、工業、農業、商業等の経済活動のみならず、教育、文化さらには軍事の機能を営んだ。即ち、従来の権力機構（郷人民政府と郷人民代表大会）と「合作社」を一体化した「政社合一」の組織であった。
- 注 7：大躍進運動は農工業の増進政策で、技術革命とも言える。即ち、15年以内に国家体制をイギリスの経済水準まで上げることを目標とした農工業の大増産政策で、無理な生産力増大に失敗した。
- 注 8：生産責任制は農家請負制あるいは家族営農請負制ともいえ、1980年代前半に中国の農村で推進された重要な経済改革の一つであり、これにより中国農村の土地改革は重大な転換点を迎え、そして、生産責任制は現在の中国農村の経済基盤の一つとなっている制度である。
- 注 9：郷鎮企業とは中国で人民公社解体後の1985年頃から急増した農村企業の総称。人民

公社の解体後、公社あるいは生産大隊が経営していた社隊企業は、中国農村の末端の行政単位である郷（村）や鎮（町）が経営する集団所有の郷鎮企業として再出発した。

注 10：精神的に肉体的に「ためになる-Rewarding」；気持ちまたは教養の面で「豊かになる-Enriching」；未経験なことを体験する「冒険的なもの-Adventuresome」；未知なことを「学ぶ体験-Learning experience」この 4 項目の英語の頭文字を取って REAL となる。

注 11：観光扶貧：観光地として観光産業を進めることで、農村の経済を活性化する政策である。

注 12：戸籍制度は 1958 年から実施され、中国の国民を医療、教育、就業などの領域で農村戸籍と都市戸籍に分けて様々な政策を実施した。2014 年 7 月 30 日に戸籍登録制限を撤廃され、都市農村間の転入は農民自身が選択することになった。

注 13：都市的地域から田舎へと人口が移っていく統計的及び社会的プロセスのことを中国ではこのよう表現する。

注 14：中国国家统计局が経済力及び競争力から全国 2,000 ヶ所以上の県の中で、100 の先進県を選定する。

注 15：中国電視芸術家協会と中国センターテレビ（CCTV-7）の提携で放送された「新農村電視芸術祭」番組における選定。

注 16：国際ガーデン協会と国連環境企画署が主催のコンテストで、「緑のアカデミー賞」として中国国内では知られている。

注 17：「4A 級」「3A 級」中国では観光地を旅行安全、交通状況、サービスレベル、衛生状況、歴史文化の価値などの品質によって、高い順から AAAAA（5A 級）、AAAA（4A 級）、AAA（3A 級）、AA（2A 級）、A 級の 5 等級に区分している。

注 18：中国老年学会が認定する称号。現在中国全体で 49 ヶ所が指定されている。

注 19：村民委員会組織法、居民委員会組織法に位置づけられたそれぞれ農村、都市の住民の自治組織であり、地方人民政府ではない。しかしこれら委員会の主任、副主任、委員は、住民の選挙によって選ばれ、委員会是有権者で構成する住民の会議に対して責任を負うこととなっている。

注 20：浙江省農業農村事務所がインフラ施設や、安全、衛生、環境保護などの項目によって農家樂を評価する方法である。高い順から 5 つ星、4 つ星、3 つ星、2 つ星、1 つ星がある。

注 21：これは有名観光地ということでは無く、少数民族への優遇措置という意味合いが強い。

注 22：習近平就任当初の発言、高級官僚幹部はすべからず贅沢と浪費を廃して質素儉約に努め、実質的な仕事をすべしという指示。